

五和町史資料編（その5）

み かわ じょう あと  
三 川 城 跡

あまくさ いつわ かみのほら しのほら  
熊本県天草郡五和町大字上野原字下野原所在の中世城跡

平成 8 年 3 月

熊本県天草郡五和町教育委員会



## 発刊のことば



平成6年度の下内野城跡<sup>しもうちの</sup>に続き、今年度は三川城跡<sup>みかわ</sup>の発掘調査報告書を「五和町史資料編(その5)」として、発刊する運びとなりました。これは、平成5年から進めております町史編纂事業の中で、分野ごとの調査研究、資料収集時点における成果を資料編としてまとめるという当初の計画に沿ったものです。

町史資料編も5冊を数えるに至りました。町史編纂委員会の先生方の精力的な調査と執筆活動に対し、深く感謝申しあげる次第です。

今回の発掘調査に当たっては、町史編纂委員長で調査総括者の鶴田倉造先生をはじめに、執筆委員の大田幸博先生や、多くの関係者の方に御協力いただきましたことを、ここに改めて御礼申し上げます。

本報告書が、下内野城跡調査報告書と共に郷土に対する理解をさらに深めるための一助になることを信じ、発刊のことばといたします。

平成8年3月30日

五和町長 伊藤山陽

## 序 文

このたび、五和町史資料編(その5)として三川城跡の発掘調査報告書がまとまりました。

三川城跡は上野原地区にある丘城で、内野川流域に存在する3城跡のうちの一つです。下流域にある下内野城跡と上流域にある城木場城跡を双方、見渡せる地点にあります。

平成6年度の下内野城跡に続き、三川城跡の詳細な発掘調査ができましたことは、中世に関連する文献の少ない天草地域におきましては大変貴重なものであると考えます。

調査にあたっては、町史編纂委員長の鶴田倉造先生をはじめとして、執筆委員の大田幸博先生や、多くの関係者の御協力をいただきました。改めて感謝申し上げます。特に、地元の方々から温かい御理解と御協力をいただきましたことに対し、厚く御礼を申し上げます。

本報告書の発刊によって、郷土に対する理解が益々深まることを祈念いたします。

平成8年3月30日

五和町教育長 岩崎直志



## 目 次

第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査の組織	1
第2節 調査の経緯	1
第3節 三川城跡の概説	2
第Ⅱ章 遺跡の概要	3
第1節 五和町について	3
第2節 五和町に所在する中世城跡	4
第Ⅲ章 調査の成果	11
第1節 I郭検出遺構	11
第2節 地形について	16
第Ⅳ章 出土遺物	26
第Ⅴ章 まとめ	56
〔付論〕 三川城跡について 鶴田倉造	58
墓碑銘調査 鶴田倉造	60

## 挿 図 目 次

第1図 五和町位置図	3	第15図 三川城跡測量図⑤	24
第2図 五和町地形図および 中世城跡位置図	5	第16図 三川城跡測量図⑥	25
第3図 三川城跡周辺地形図①	7	第17図 出土遺物実測図①	28
第4図 三川城跡周辺地形図②	8	第18図 出土遺物実測図②	32
第5図 三川城跡全体測量図	9	第19図 出土遺物実測図③	34
第6図 I郭調査区域図	12	第20図 出土遺物実測図④	36
第7図 土壇1・土壇2実測図	13	第21図 出土遺物実測図⑤	38
第8図 建物跡1・建物跡2実測図	14	第22図 出土遺物実測図⑥	40
第9図 土壇3実測図	15	第23図 出土遺物実測図⑦	43
第10図 三川城跡測量図①	18	第24図 出土遺物実測図⑧	45
第11図 グリッド設定図	19	第25図 出土遺物実測図⑨	46
第12図 三川城跡測量図②	21	第26図 出土遺物実測図⑩	49
第13図 三川城跡測量図③	22	第27図 出土遺物実測図⑪	51
第14図 三川城跡測量図④	23	第28図 出土遺物実測図⑫	52

## 目 次

第1表	五和町に所在する中世城跡一覧	4	第11表	出土遺物観察表⑨	42
第2表	柱穴計測表	15	第12表	出土遺物観察表⑩	44
第3表	出土遺物観察表①	29	第13表	出土遺物観察表⑪	45
第4表	出土遺物観察表②	30	第14表	出土遺物観察表⑫	47
第5表	出土遺物観察表③	31	第15表	出土遺物観察表⑬	48
第6表	出土遺物観察表④	33	第16表	出土遺物観察表⑭	50
第7表	出土遺物観察表⑤	35	第17表	出土遺物観察表⑮	51
第8表	出土遺物観察表⑥	37	第18表	出土遺物観察表⑯	52
第9表	出土遺物観察表⑦	39	第19表	三川城関連遺物年代別分類表	53
第10表	出土遺物観察表⑧	41	第20表	三川城跡出土遺物年代別分類表	55

## 写 真 図 版

図版1	三川城跡遠景 南西方向より	図版12	調査風景②
図版2	三川城跡遠景 南西方向より	図版13	三川城跡から見た下内野城跡
図版3	三川城跡遠景 北東方向より	図版14	三川城跡から見た城木場城跡
図版4	三川城跡Ⅰ郭近景	図版15	対岸にある文殊庵
図版5	三川城跡Ⅱ郭近景	図版16	出土遺物①
図版6	三川城跡Ⅲ郭・堀切3近景	図版17	出土遺物②
図版7	三川城跡Ⅰ郭検出遺構	図版18	出土遺物③
図版8	Ⅰ郭検出遺構 建物跡	図版19	出土遺物④
図版9	Ⅰ郭検出遺構 土壇	図版20	出土遺物⑤
図版10	建物跡検出状況	図版21	出土遺物⑥
図版11	調査風景①		

## 例 言

1. 本書は熊本県天草郡五和町教育委員会が、町史編纂事業の一環として平成7年度に実施した発掘調査の報告書・五和町史資料編(その5)である。
2. 発掘調査を実施した遺跡は五和町大字上野原に所在する中世城跡『三川城跡』である。
3. 現地調査は鶴田倉造氏(町史編纂委員長)を中心に町史編纂室で行い、大田幸博氏(町史執筆委員・熊本県教育庁文化課文化財整備係長)や黒田裕司氏(玉名郡三加和町教育委員会)などが従事した。
4. 出土遺物は五和町教育委員会で保管している。
5. 出土遺物の整理については、大橋康二氏(佐賀県立九州陶磁文化館)に指導を受けた。
6. 出土遺物の実測、遺構および遺物の製図は石工みゆき氏が行った。
7. 本書の執筆は大田氏と鶴田氏が行った。第Ⅰ章第1・2節は井上英二(町史編纂室長)が担当した。
8. 本書の編集は大田氏と鶴田氏が総括し、実務は町史編纂室とともに溝口真由美氏が行った。

# 第I章 調査の概要

## 第1節 調査の組織

調査主体	五和町教育委員会
調査責任者	岩崎直志（教育長）
調査総括	鶴田倉造（町史編纂委員長）
調査員	大田幸博 黒田裕司 平田正範（町史編纂委員） 山本 繁（町史編纂委員）
調査機関	五和町史編纂委員会
協力者	村崎孝宏（熊本県教育庁文化課） 大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長） 〔地権者等〕 森田 淳 渡辺武雄 金井憲昭 田口富春 松本権吉 笹原三郎 鶴田輝光 〔文化財保護委員〕（故）松野俊明 長野 潮 宮崎照志 山田義光 中井國之 長島 悟 本多 隆
調査事務局	〔五和町史編纂室〕 井上英二（室長） 神田日出紀（前教育課主幹） 池崎 剛（参事） 泉 喜代一 林 弘美
報告書作成	鶴田倉造 大田幸博 石工みゆき 溝口真由美
出土遺物整理作業	林 枝三
発掘従事	樋口トミエ 山本マツヨ 城下ツタエ 井上ウメコ 森田ハルコ 白木和子 岩本幸子 岩崎 正 小出廣久 荒木建設（荒木 孝）
伐採従事	森田洋介 天草森林組合

## 第2節 調査の経緯

〔1〕 五和町では平成5年度から町史編纂事業に取り組んでいる。この中で中世分野では数カ年計画で文献調査に加えて、中世城跡の発掘調査や測量調査の成果を折り込む計画をたてた。

〔2〕 平成6年度は下内野地区の「<sup>しもうちの</sup>下内野城跡」を発掘調査し、その成果は五和町史資料編（その2）として発刊した。次いで平成7年度は<sup>かみのほら</sup>上野原地区の「<sup>みかわ</sup>三川城跡」を発掘調査した。

〔3〕 三川城跡の発掘調査は、平成7年3月に草木の伐採作業とともに試掘調査を行い、同年6月2日から6日間の本調査を行った。

〔4〕 城跡の測量調査は5月のゴールデンウィークを中心とし、さらに休日を利用して大田氏

と黒田氏、井上、池崎とで平成8年1月まで継続的に行った。

〔5〕 調査報告書の作成・実務作業は石工氏と溝口氏が中心となって町史編纂室とともに行った。

(井上英二)

### 第3節 三川城跡の概説

〔1〕 中世文書をはじめ、近世の城郭書や地誌にも城名の記載はない。ただし、地元では「三川城」または「上野原城」として言い伝えられてきた。三川城の城名の由来は、内野川（本流）に2本の支流（打越川・平川）が流れ込む地点が城跡の所在地である事による。

〔2〕 北北西2km先に下内野城跡、南南西1.4km先に城木場城跡がある。いずれも内野川流域に所在する中世城である。城跡からは両城跡を望む事ができる。

〔3〕 帯状形の丘陵地を利用した大規模造りの山城で、全長319mを測る。城跡の基本的な縄張りは下記の通りである。

尾根筋の主軸方位は大方N14°Wで、鞍部の南端箇所には大きな堀切がある。中心部と見られるのは北端箇所の高台で、この箇所のみが西側に折れて、主軸方位がN40°Wとなる。地形の変化に応じて北側から南側へ順にⅠ郭、Ⅱ郭、Ⅲ郭とした。

さらに各郭間に堀切が認められるので、これには1～3の番号をつけた。南端部の大堀切は堀切3となる。

＊Ⅰ郭……南西側の一角に祇園社（八坂神社）と秋葉社が祀られている。

＊Ⅱ郭……一部は墓地(1)に利用されている。

＊Ⅲ郭……丘頂部分には五和町の水源施設（上水道城河原配水池：昭和49年建設）が造られている。そして西側裾部の削平地には墓地(2)がある。

〔注〕 墓地(1)(2)については、墓碑銘を60・61頁に掲載。

〔4〕 三川城跡に関連すると思われる伝承が残っている。城跡の近くに住む、岩崎正高氏宅に伝わる口承で、それによれば、以前は松下姓を名乗っていたという。三川城主とされる（岩崎氏の談による）松平姓につながるものという（別途記述）。

〔5〕 城跡関連の地名は次のようなものがある。城跡の北側麓にある川（内野川・打越川・平川）の合流点付近を「城先」、Ⅰ郭の北西麓を「城下」という。城域の南限にあたる堀切箇所を「堀切」と呼ぶ。また「堀切」の東方下において打越川にかかる橋付近を「大木戸」という。

〔6〕 地形から見て、三川城跡に直接結びつく様な麓集落の形成は無い。あえて比定地を捜せば、城跡の西側麓（字下野原と中野原の地内）に点在する民家の敷地一帯であるが、下内野城跡に見られる様な圍繞地形にはない。

## 第Ⅱ章 遺跡の概要

### 第1節 五和町について

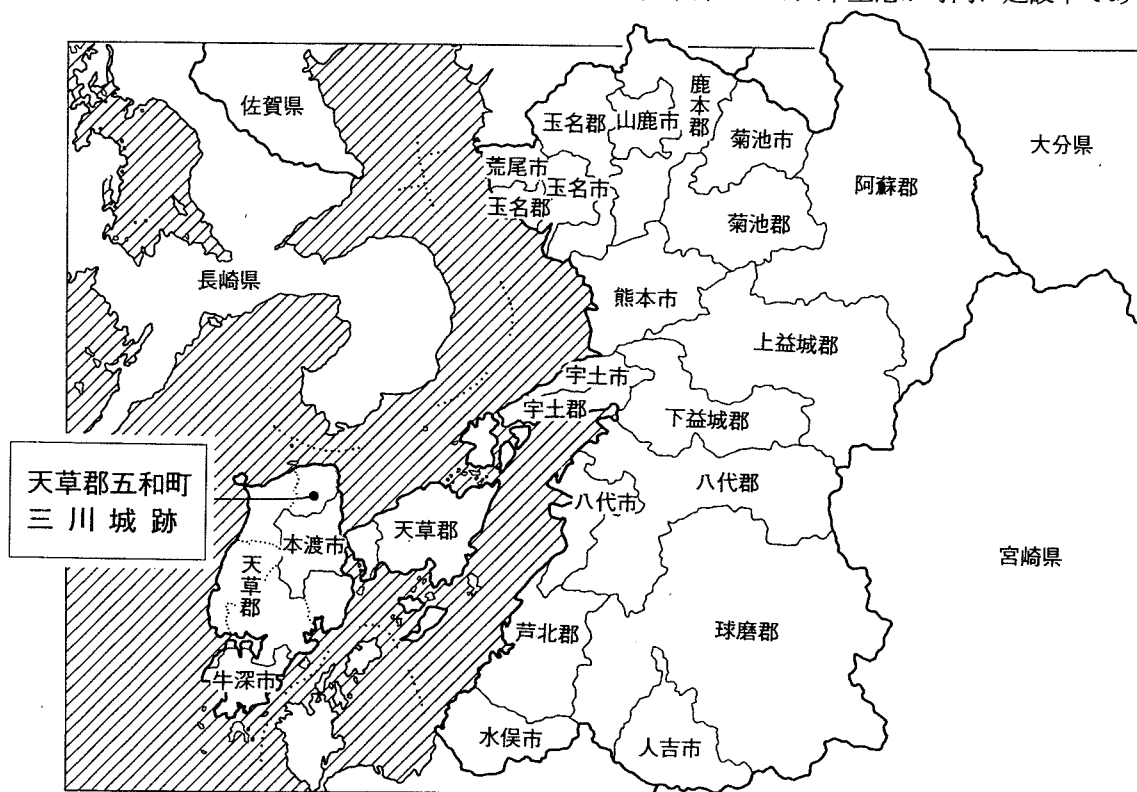
〔1〕 天草・下島の北東部に位置しており、北縁と東縁は有明海に接する。行政域では西側は苓北町、南東側は本渡市に接している。面積50.05km<sup>2</sup>、人口11,386人、世帯数3,473戸（平成7年10月1日・国勢調査）。

町域に広がる丘陵地の西側寄りには内野川が北流し、二江港に注いでいる。

江戸時代には御領の港を背景として御領・石本家に代表されるように、銀主の商業活動が活発に行われた。

〔2〕 明治の初期に一時、長崎府（明治元年）に属し、富岡県（明治元年）、天草県、八代県、白川県を経て、熊本県の管轄となった。明治22年（1889）の町村制施行により、手野村（井手村と下内野村が合併）と城河原村（城木場村・荒河内村・上野原村が合併）が誕生した。これにより既存の御領村・鬼池村・二江村とともに5村となった。二江村は昭和16年（1941）に町制を施行した。昭和30年（1955）5月1日に1町4村が合併して五和町となった。「和を以って貴しとなす」が新しい町建設の理念であった。

〔3〕 近年はソフト面の開発にも力を入れ、イルカウォッチングや鬼の城公園の町として広く知られるようになった。一方、ハード面では、五和東部ダムや天草空港が町内に建設中である。



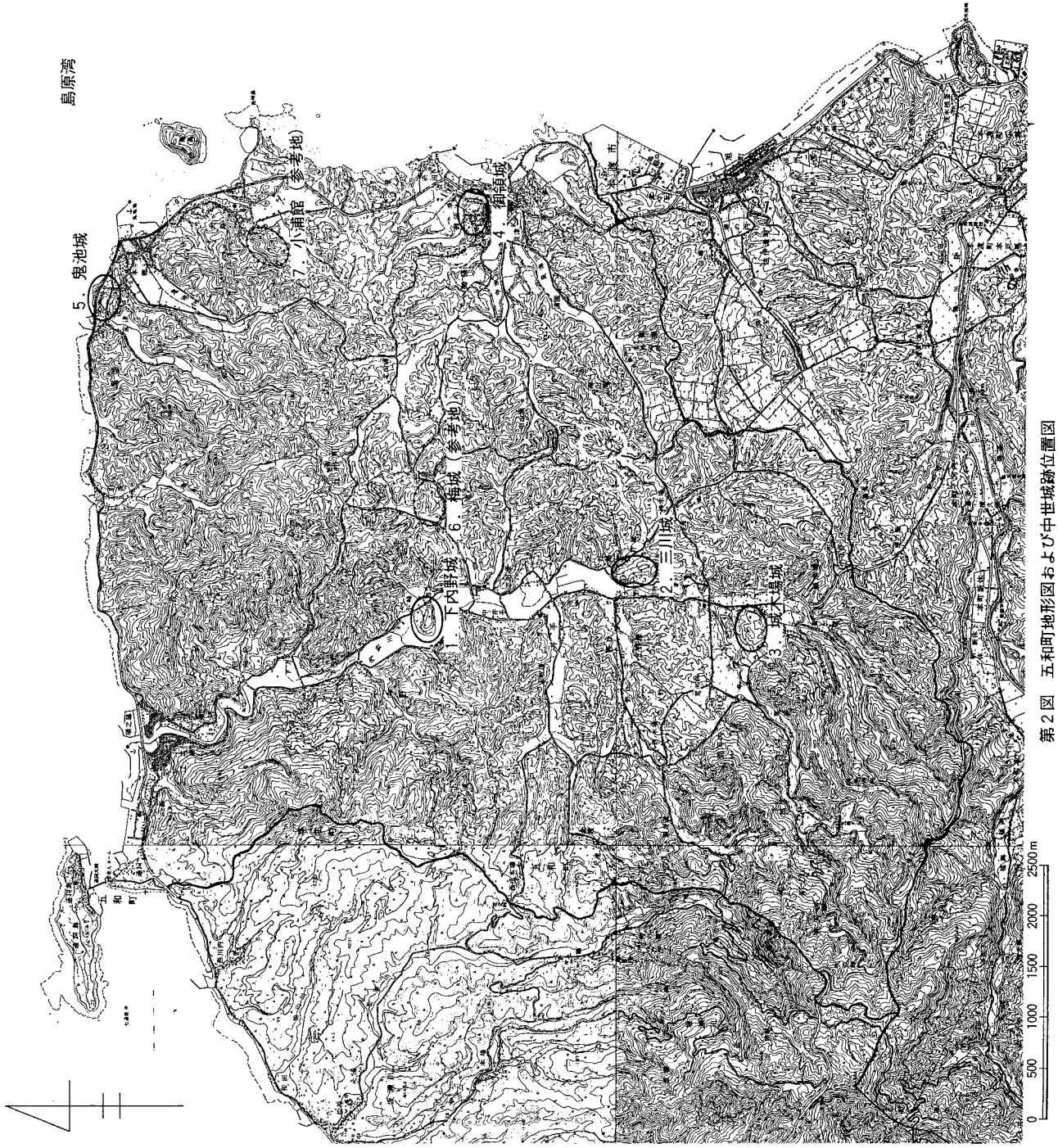
第1図 五和町位置図

## 第2節 五和町に所在する中世城跡

No.	城名	文献	字名小名	種類	立地条件	備考
1	下内野城 (小峰城)	慶安四年 「差出」	中心部に 「城山」の 字名。	丘城	・内野川の中流域にある。 ・右岸の丘陵地を利用している。(大蛇行内に収まる)	・麓集落にあたる小峰と小峰原の両地区は独立した区域内にある。 ・発掘調査(平成6年) ・時代 〔上限〕 14世紀(南北朝) 〔下限〕 16世紀後半～ 17世紀前半 (戦国末期～近世初頭)
2	三川城 (上野原城)	——	麓に「城下」の小名。	丘城	・内野川の上流域にある。 ・右岸の丘陵地にある。 ・打越川との合流地内にある。左岸ではさらに平川と合流する。 ・城名の由来はこの立地による。	・全長319mの大規模丘城。 ・北側から南側へ3つの郭が並ぶ。 ・南側鞍部に大堀切。 ・発掘調査(平成7年) ・時代 〔上限〕 14世紀後半～15世紀 〔下限〕 16世紀後半～ 17世紀前半 (戦国末期～近世初頭)
3	城木場城	慶安四年 「差出」 円覚寺の 由緒書 (本渡市)	中心部に 「城の尾」 の小名。	丘城	・内野川の最上流域にある。 ・左岸の丘城。	・西側の鞍部に堀切。 ・城跡は遺物(破片)の散布地で、かつて中心部から大型の礎石(川原石)が出土している。
4	御領城	——	中心部に 「城内」の 小名。	丘城 (平城の 色彩が 濃い)	・海岸沿いにあり、御領港に隣接する。 ・馬場川の下流域。 ・右岸の丘城。	・城跡地は舌状形の平地である。 ・城跡に関連した地名や伝承が良く残っている。
5	鬼池城 (宮津城)	——	中心部に 「城」の字 名。	丘城	・海岸線に接しており、東に鬼池港、西に宮津漁港。	・城域については今後の調査で確定する必要がある。
6	梅城 (参考地)	——	字名に 「梅城」と ある。	——	・西へ約1km先に下内野城跡がある。	・当該地は城跡地らしい形状をしていない。
7	小浦館 (参考地)	——	——	——	・標高25mの丘陵地 ・北東に大島漁港。	・小浦荘の推定地。 ・館跡の存在には一考の余地がある。

〔注〕慶安四年「差出」……慶安四年「肥後国 江戸江差上候御帳之扣」

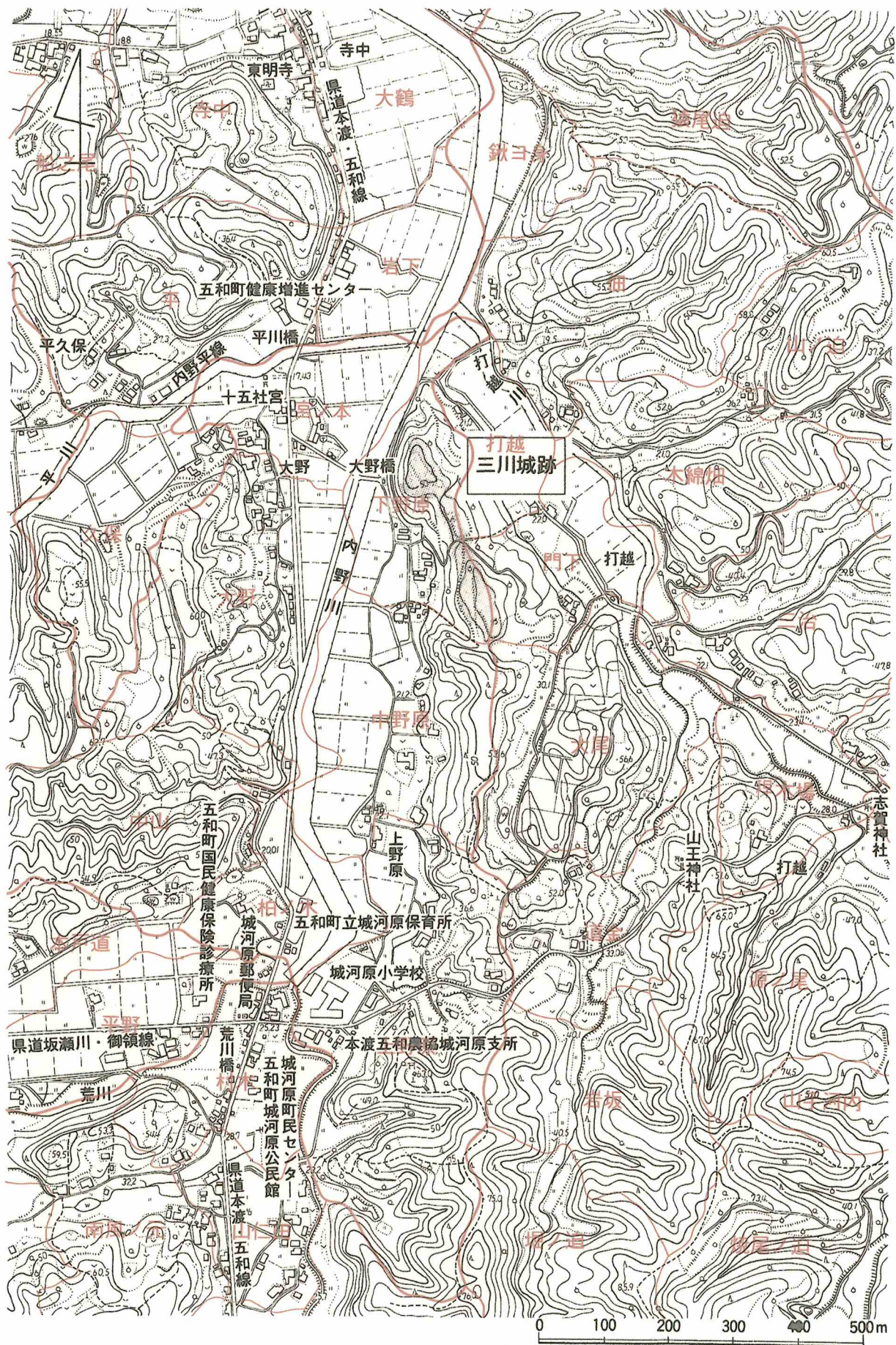
第1表 五和町に所在する中世城跡一覧



第2図 五和町地形図および中世城跡位置図



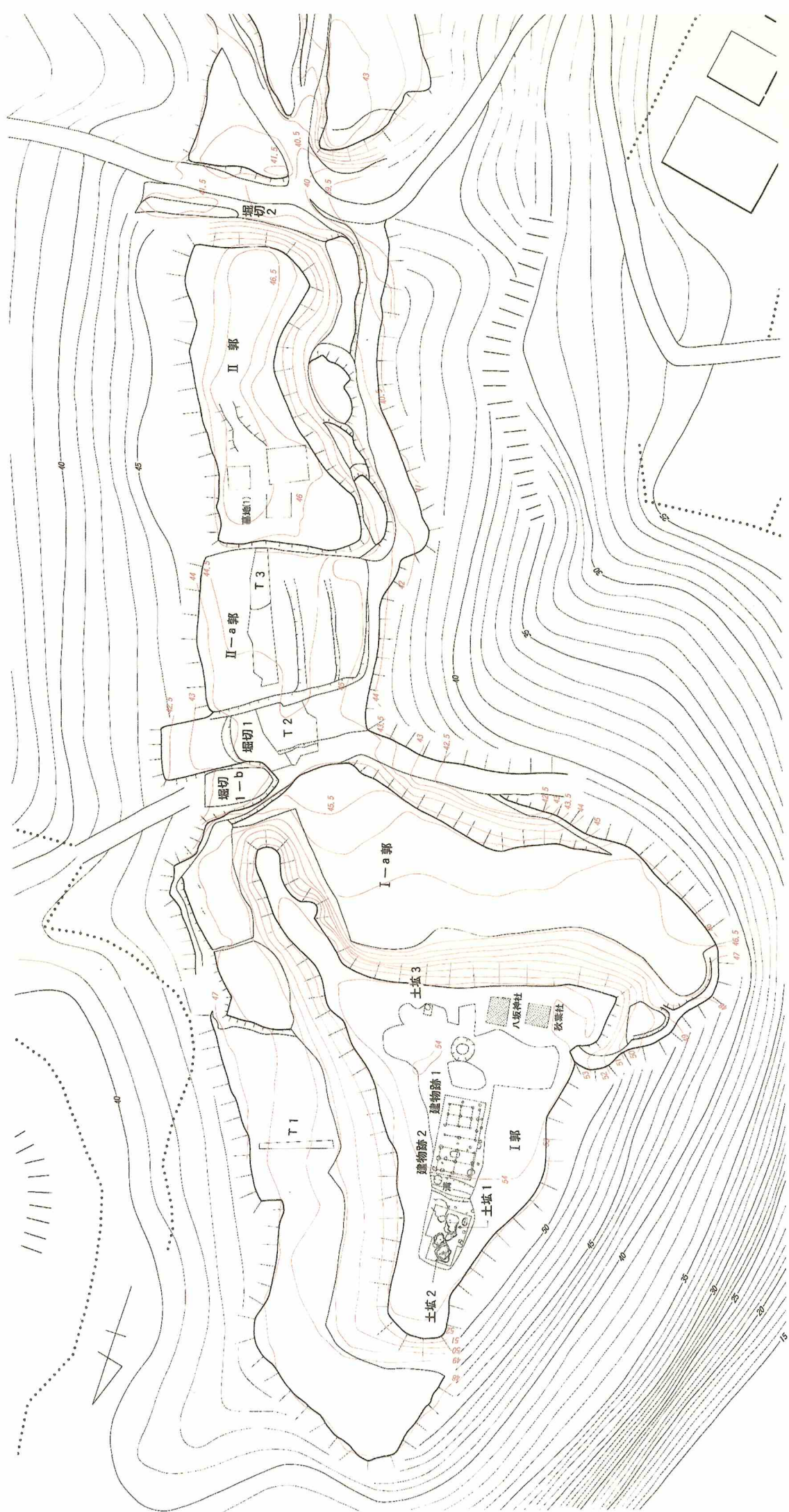




第3図 三川城跡周辺地形図⑦

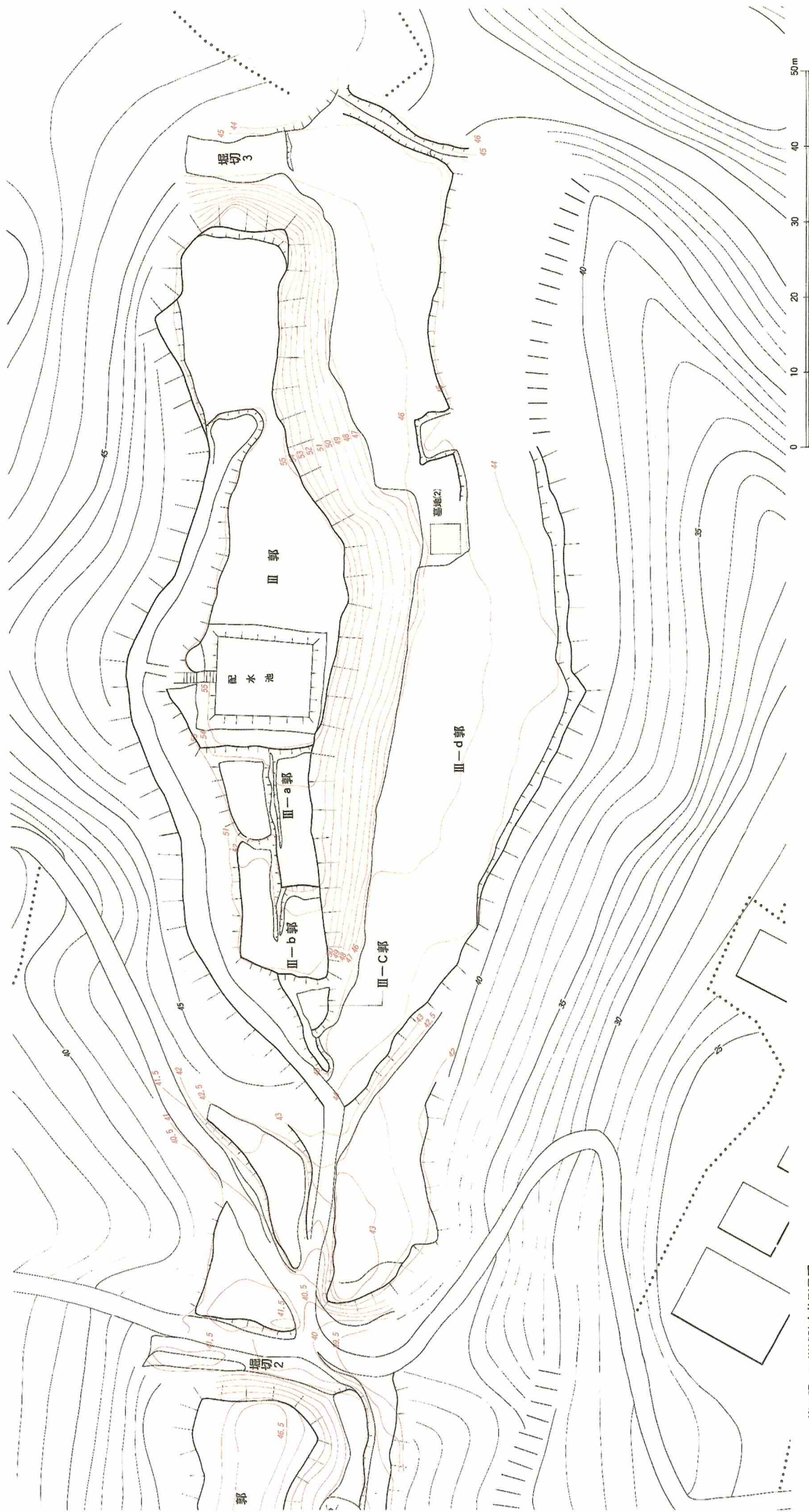






第5図 三川城跡全体測量図





第5图 三川城跡全体測量図



## 第Ⅲ章 調査の成果

### 第1節 I 郭検出遺構

〔1〕 祇園社（八坂神社）はあるものの、調査前は大半が荒地で、足の踏場もない状況下にあった。特に平成3年の台風19号による杉の倒木が重なり合っており、その撤去作業は困難を極めた。平成7年3月の試掘とは、この作業期間を意味する。（作業は町史編纂室の井上室長や神田主幹が中心となって行った）

〔2〕 手作業で慎重に表土を剥いでいったが、その過程で数多くの遺物が出土した。

〔3〕 平場全域を発掘調査したが、結果として中央部から2棟の建物跡（1・2）を検出した。さらに北側寄りでは2基の土壇（1・2）が見つかった。

〔4〕 建物跡1は桁行の長さ3.2m、梁行2.8mで正方形に近い形状である。桁行の主軸方位はS80°Wで、東西方向に近い。城跡の向きは南北方向にあるので、これに直交する格好となっている。規模は2間×2間で、柱間は桁行が1.6m、梁行が1.4mを測る。

地山は茶褐色ローム層土で、計9個の掘り込み穴が検出された。これについては、埋土がローム層土で、非常に固く引き締まっており、一概に掘立柱の柱穴とは言えない程の状況にあった。小型の礎石を固定するための地業穴のようでもあった。しかし、一部を掘削した結果、掘立柱の柱穴と判断した。

この建物跡1の北側と西側から、カギ形状の庇跡が検出されている。北側のものは柱間が2.1m、検出部分の長さは4.2mである。建物跡の北側桁行とは1.46mの間隔を保っている。一方、西側部分は、検出部分の長さが4.2mで、柱間は1.3mと1.6mに分かれる。建物跡の西側梁行とは0.98mの間隔を保つ。

〔5〕 建物跡2は桁行4.6m、梁行3.2mで長方形の形状を呈する。主軸方位はS85°Wで、建物跡1と比較した場合、やや南側へ傾き並列しない。規模は2間×2間で、柱間は桁行が2.3m、梁行1.6mを測る。

前述の建物跡1の北側庇と建物跡2の南側桁行との間隔は東端で1.6m、西端で1.86mとなる。

〔6〕 建物跡2の北側に建物区域と土壇区域の仕切りとなる溝がある。全長6m、深さ0.5m、上場幅(最大)2.7m、下場幅0.8mを測る。地形的にも、この溝を境に南側が北側よりも一段高い。

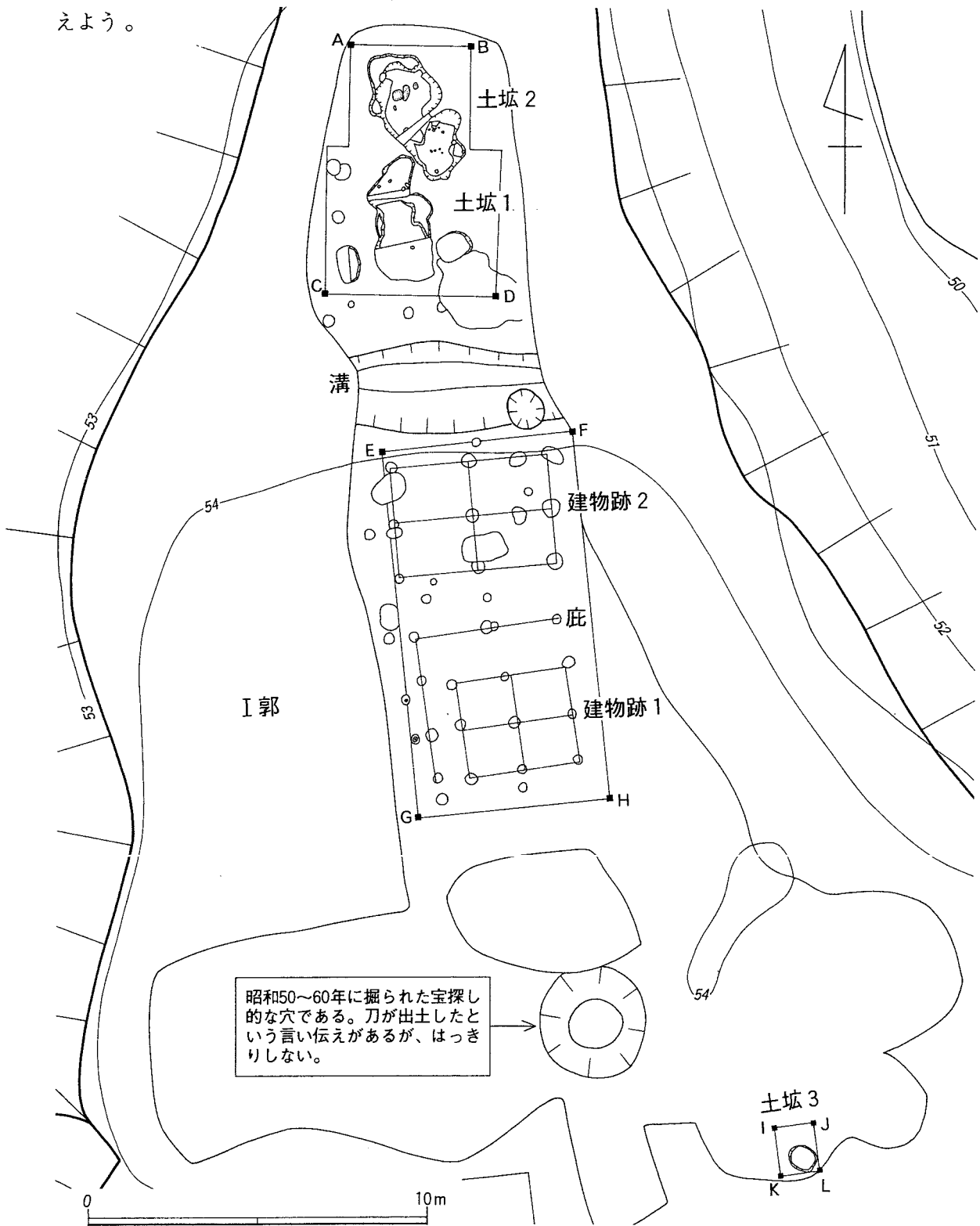
〔7〕 溝の北側から土壇が検出された。基本的には長円形の掘り込みであるが、土壇2は東側寄りで、やや歪である。埋土から多くの染片と礫が出土した。

烽火穴<sup>のろし</sup>とも考えられる。埋土に炭化物の混入はなかったが、焼土が広範囲に広がっていた。



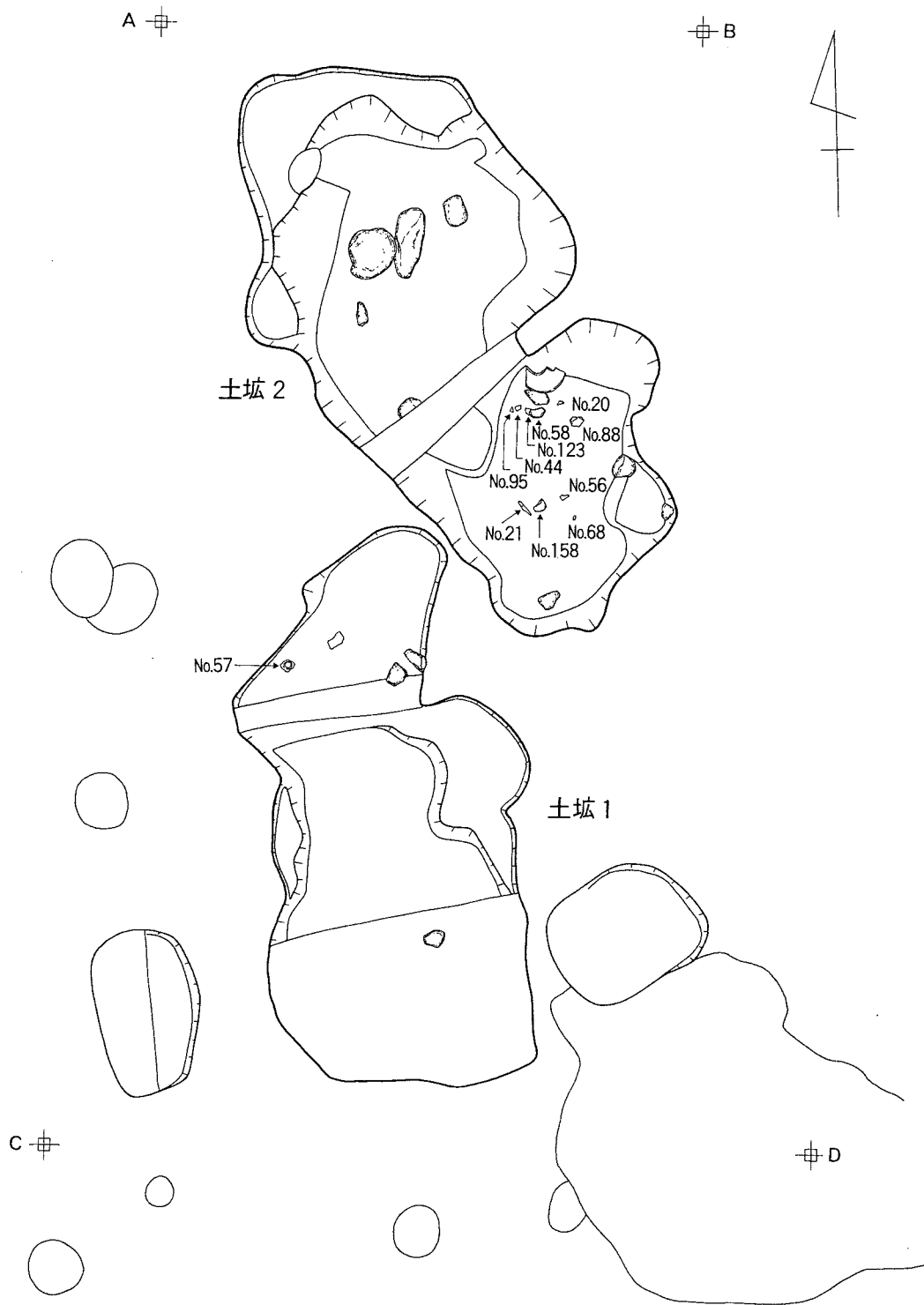
ただし、建物に隣接しているという矛盾点もある。一方で、ゴミ穴的なものとの見方もできるが、この場合、急斜面側へ投げ捨てればよいわけで、あえて穴を掘る必要はなかろうという気がする。

建物区域とは溝ではっきりと仕切られているところから、建物と同時代に存在した土壇といえよう。

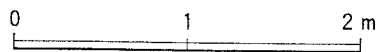


第6図 I 郭調査区域図

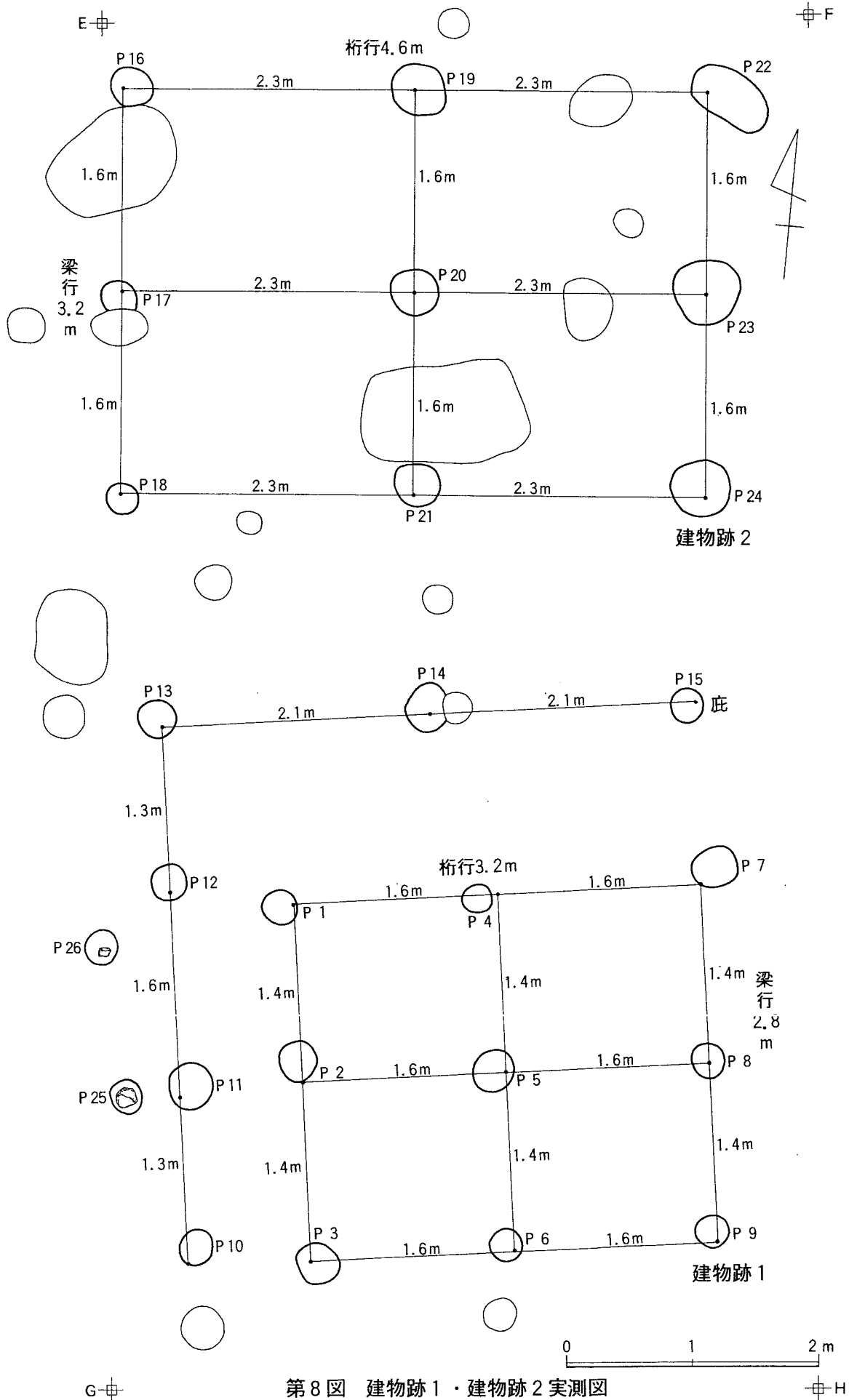




※No.は遺物実測番号と合致する。



第7図 土塚1・土塚2実測図

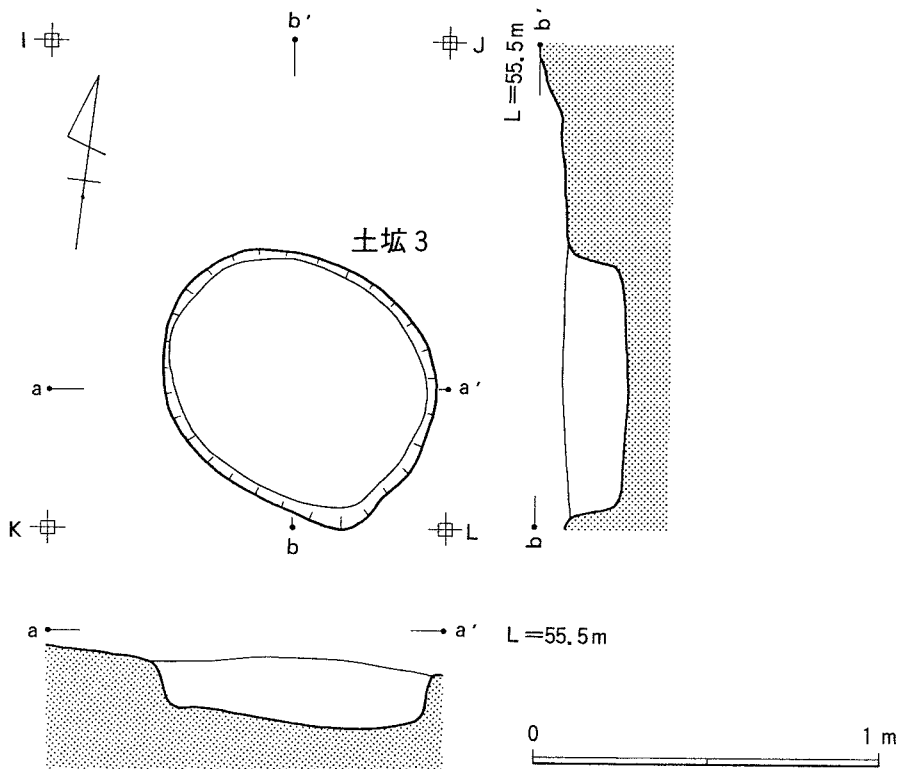


第8図 建物跡1・建物跡2実測図

(単位：cm)

	No.	長径	短径	備考
建物跡 1	1	28	25	柱芯は西縁に片寄る。
	2	34	29	柱芯は北縁に片寄る。
	3	33	31	
	4	24	23	柱芯は柱筋から、やや西側へそれる。
	5	34	31	
	6	27	25	
	7	37	31	柱芯は南東隅に片寄る。
	8	28	25	
	9	27	25	
庇	10	26	24	
	11	37	34	
	12	27	26	
	13	29	27	
	14	39	—	東縁は柱穴状のものに切られている。
	15	28	25	
建物跡 2	16	33	29	南縁は土壇状のものに接している。
	17	27	—	南縁は柱穴状のものに切られている。
	18	29	25	
	19	41	39	
	20	38	36	
	21	36	34	
	22	68	38	
	23	53	49	
	24	48	44	
	25	28	23	大きさ16cm大の礫が中央部に座る。
	26	28	24	大きさ8cm大の礫が混入する。

第2表 柱穴計測表



第9図 土壇3実測図

## 第2節 地形について

### I 郭

〔1〕 三角形の平場で、長軸方位は尾根筋と同一の南北方向にある。長径47.5m、短径は南端で39.5m、北端は8mにすぼまる。細分的には平場の南端から北へ26.5mの所から先が段落ちとなる。標高は①地点が54.17mで、②地点(以下、「地点」は略する)が53.51mである。

発掘調査の結果、段落ち部分から溝(深さ0.5m)が検出された。

〔2〕 平場の南東隅には土塁状の突き出しがある。幅は3m、長さ21mで、西縁では北端から9mの所にさらに半円型の突き出し(西側へ1.2m、幅は3m)が見られる。

〔3〕 平場の西側斜面は絶壁で、直の状態のまま、裾部の内野川へ下っている。したがって、城跡地によく見られる階段状地形は存在しない。

〔4〕 平場の東下と北下には削平地が巡っている。①と③の比高差は6.42mを示す。平場側の壁は直に削り落された状態にある。ここにはトレンチ(T1)を入れたが、空堀の埋没はなかった。削平地については北側で最大幅12.5m、長さ26m、東側で幅8.5~12m、長さ67.5mを測る。

なお、東側部分は北端から南へ40mのところ段上がりとなっている。ちなみにこの箇所の上には土塁の様な突き出しがあり、これから南側は段上がり箇所と並走する格好となる。

〔5〕 平場の南下には広い平坦地(I-a郭)がある。①と④の比高差は7.67mを示す。平場側の壁は西側斜面部と同様に直の状態に削り落されている。この平場については、東西の長さ60mで、最大幅は東側で20m、西側で12mを測る。西縁に虎口があり、ここは土橋状の通路(幅1m)となっている。

### 堀切1

見た目には堀切状の窪地(深さ0.5m程度)である。東西の長さ28m、南北の幅は9mを測る。東西については、西端から東へ18.5mの所で段落ちとなっている。ここにトレンチ(T2)を入れたが、地山に堀切を示す様な掘り込みはなかった。この事については、その後の測量調査の過程で竹林を伐採したところ、堀切1-bが存在している事が判明した。痩せ馬地形(山城)の堀切に見られる様に、中央部を土橋状に掘り残し、両端の斜面部を深く掘り込む工法をとった可能性が大きい。

### II 郭

〔1〕 長方形の区画で、長軸は尾根筋と同一の方向にある。長径40m、短径は北端で19m、中央部で11m、南端で16mを測る。⑤の標高は46.77mで、地表面は全体的に丸みを帯びており、北側寄りの一隅に墓地(1)がある。見た目に完全な平場ではないが、それでも西側と南側

は大きく削り落されて、直の状態となっている。

〔2〕Ⅱ郭と堀切1に囲まれた区画(Ⅱ-a郭)は、Ⅱ郭よりも段下りで、⑦と⑥との比高差は0.8mを測る。台形状を呈し、東西の長さ22.5m、幅は東縁で21m、西縁で16mを測る。この区画にはトレンチ(T3)を入れたが、表土の下は軟質の凝灰岩で、遺構は検出されなかった。表土からは近世遺物が出土している。

## 堀切 2

Ⅱ郭との比高差は⑧と⑤で6.57mを測る。長さ27m、底幅2.54~4.0mを測る。南壁と西側部分が壊れているが、堀切としての痕跡は残っている。

## Ⅲ 郭

〔1〕⑨の標高は55.8mで、Ⅰ郭より1.6mほど高い。現在、丘頂の北側に城河原配水池がある。平場の長軸方向は丘陵の主軸方向と同一で、帯状形を呈する。長軸72m、短軸は北側で17.5m、南側で14mを測る。中央部は配水池建設時の取り付け道路のため削られて、極端に括れている。西側と南側斜面は削り落としの痕跡が明確である。

〔2〕Ⅲ郭北側の段落ち箇所は、3区画(Ⅲ-a郭・Ⅲ-b郭・Ⅲ-c郭)に細分される。この中でⅢ-a郭はⅢ郭と1.42mの比高差がある。各平場の長軸方向は丘陵地の主軸方向と同一である。

〔3〕Ⅲ-a郭とⅢ-b郭はいずれも方形で、中央部に仕切りのような段差があるものの、高さにさほど差異はない。

Ⅲ-a郭は東側で長径10.5m、短径5m、西側で長径17m、短径5mを測る。

Ⅲ-b郭は東側で長径15m、短径4m、西側で長径10m、短径5.5mを測る。

Ⅲ-c郭は北端部にあり、三角形形状を呈する。丘陵地の主軸方向に突き出しており、長径5m、短径は南端で4.5mとなる。東縁は削り残されて土塁のような形状を呈する。この部分は長さ11.5m、上場幅1~1.5mを測る。

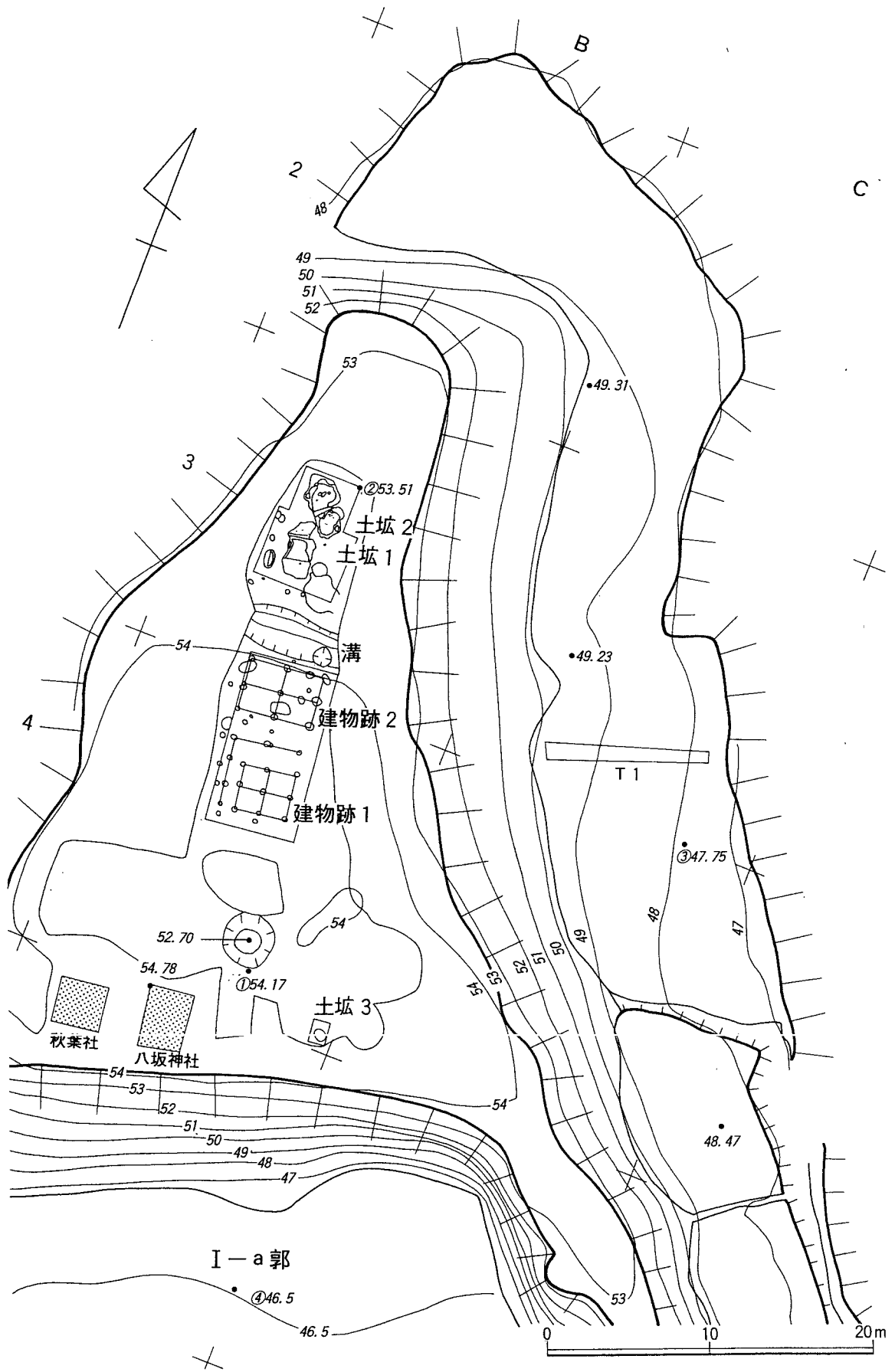
〔4〕Ⅲ郭の西下を巡る帯状形の削平地(Ⅲ-d郭)で、⑨と⑩で10.17mの比高差がある。Ⅲ郭に伴走しており、幅は最大で22.5mを測る。中央部に墓地(2)がある。

西端部は弧を描くように弯曲し、堀切3と繋がっている。弯曲部分の幅は18mである。

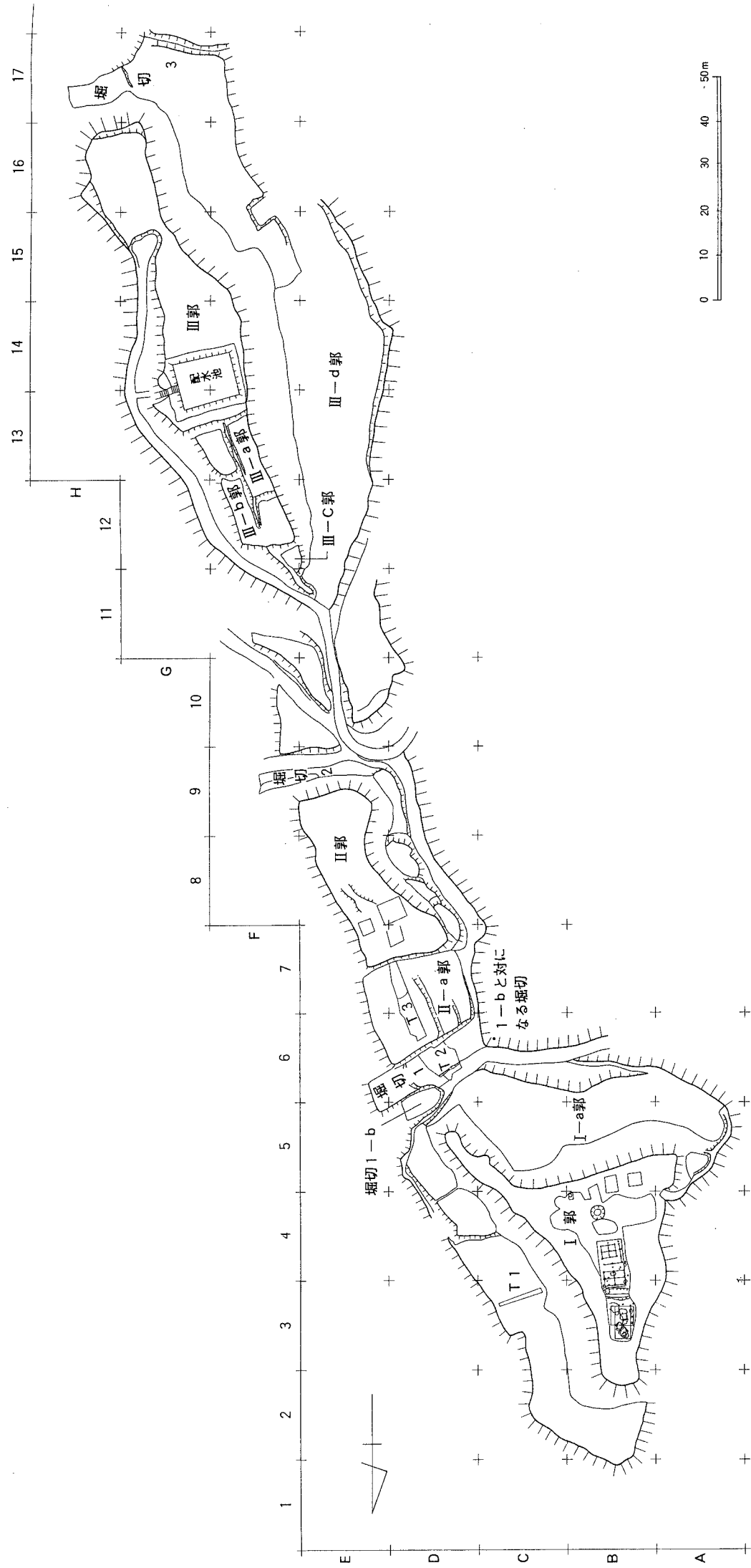
## 堀切 3

城跡の南限にあたる所で、「堀切」と称されている。堀底幅は東端で5m、西端で11mを測る。堀切の東端からⅢ-d郭の弯曲部までの長さは34mで、元来、丘陵地の鞍部にあたる谷部に手を入れたものと思われる。

堀切に繋がる西側斜面は、この迫地を利用して麓に至るまで棚田が作られている。



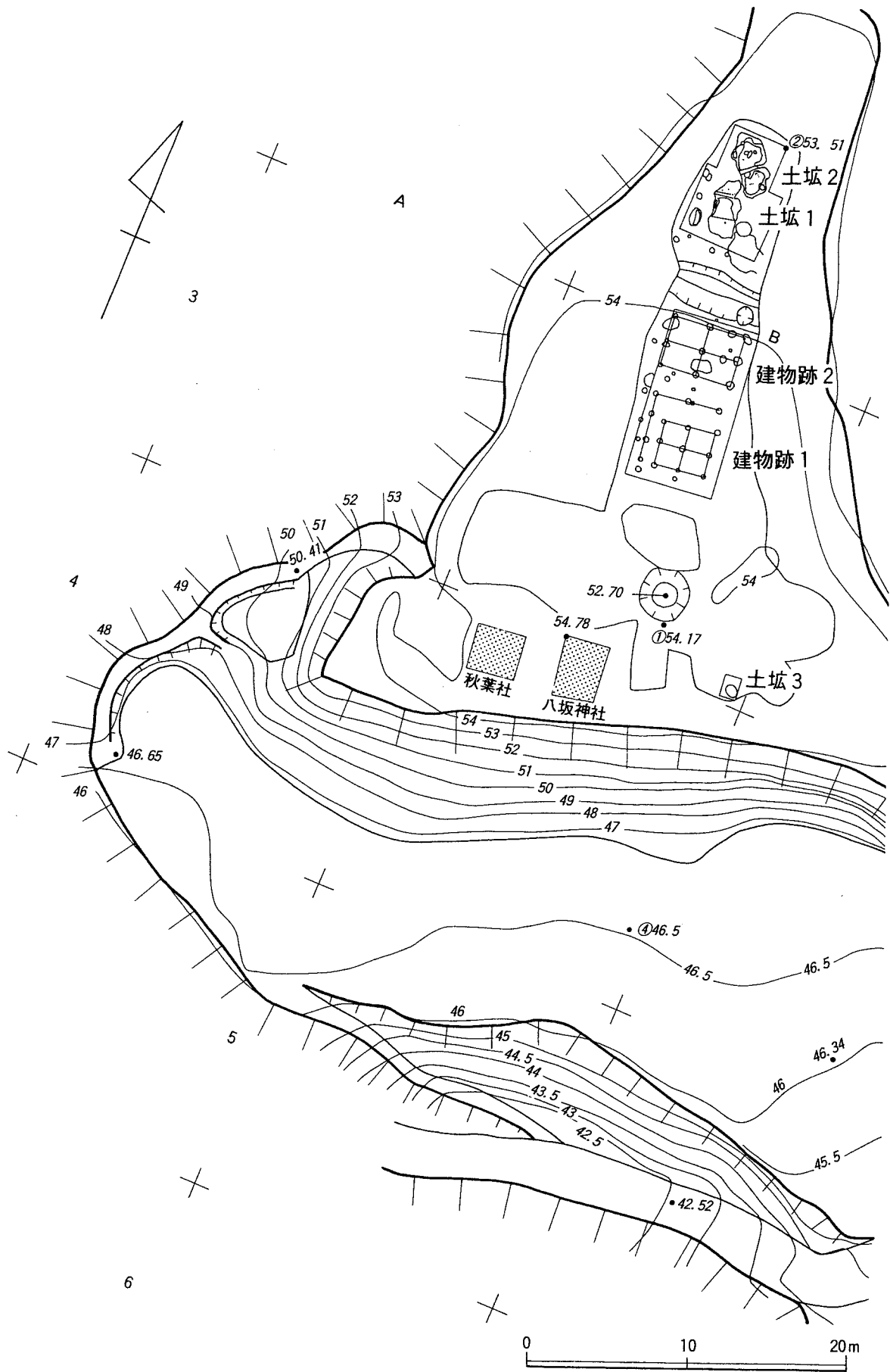
第10図 三川城跡測量図①



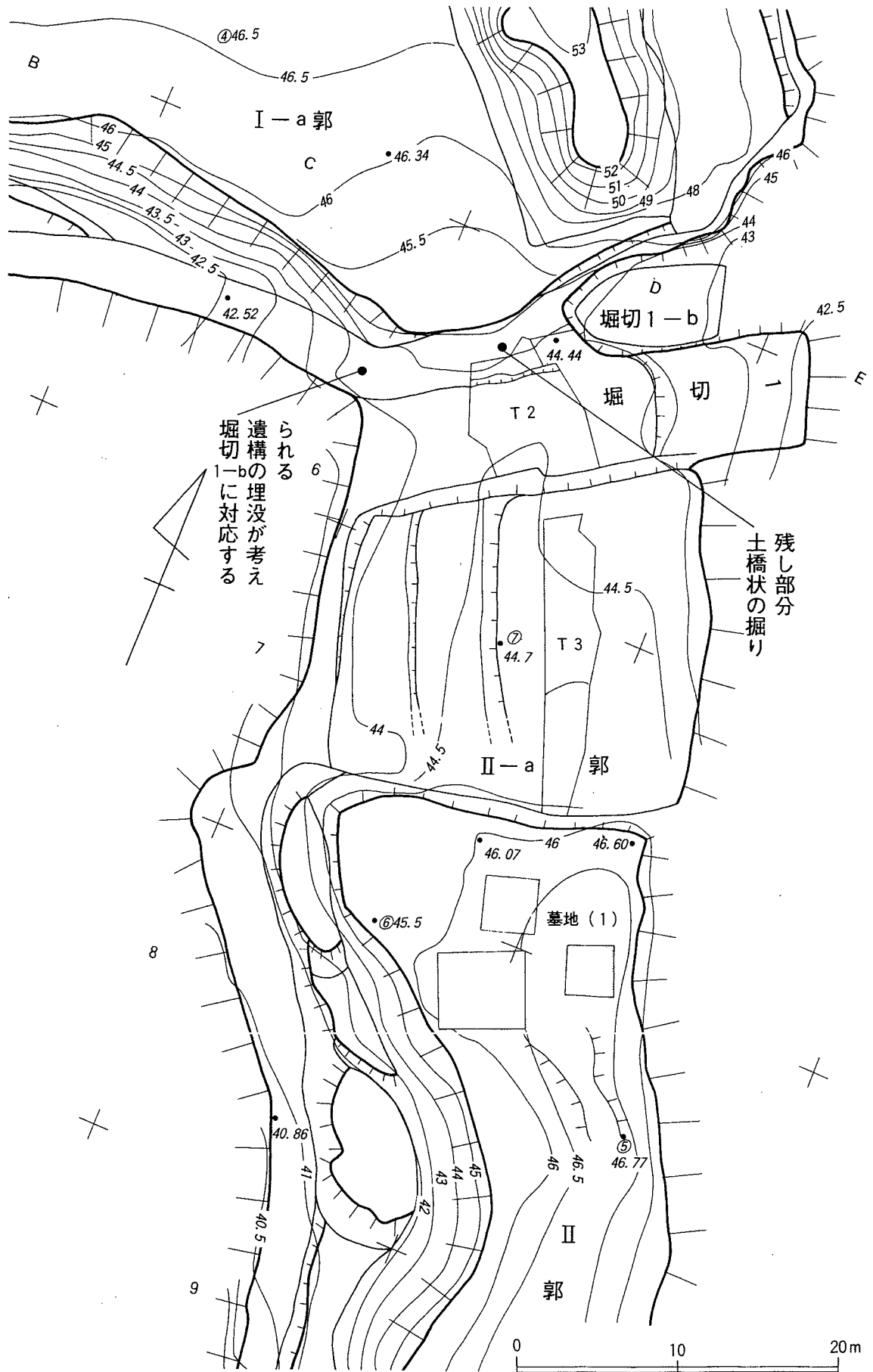
第11図 グリッド設定図



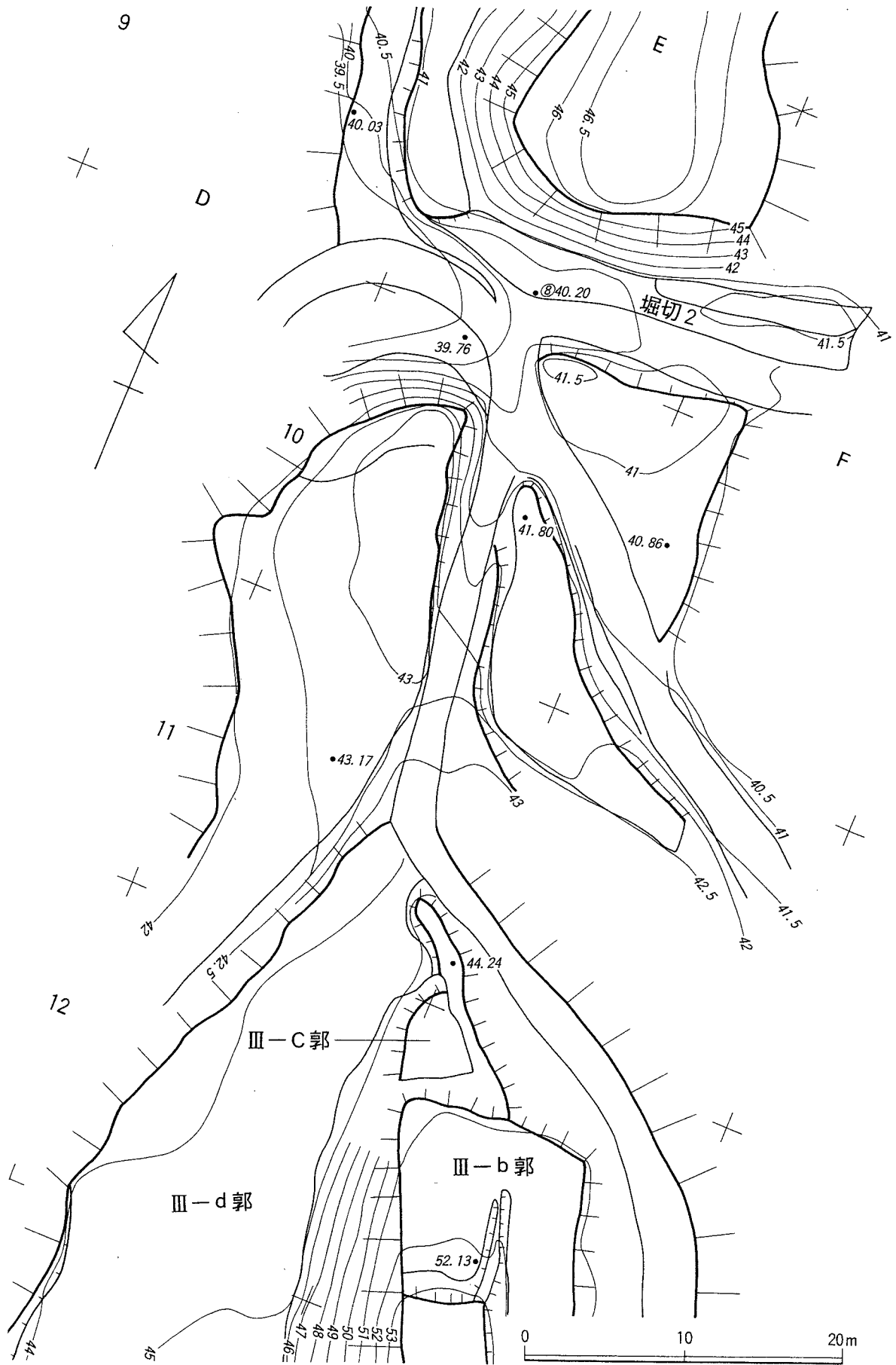




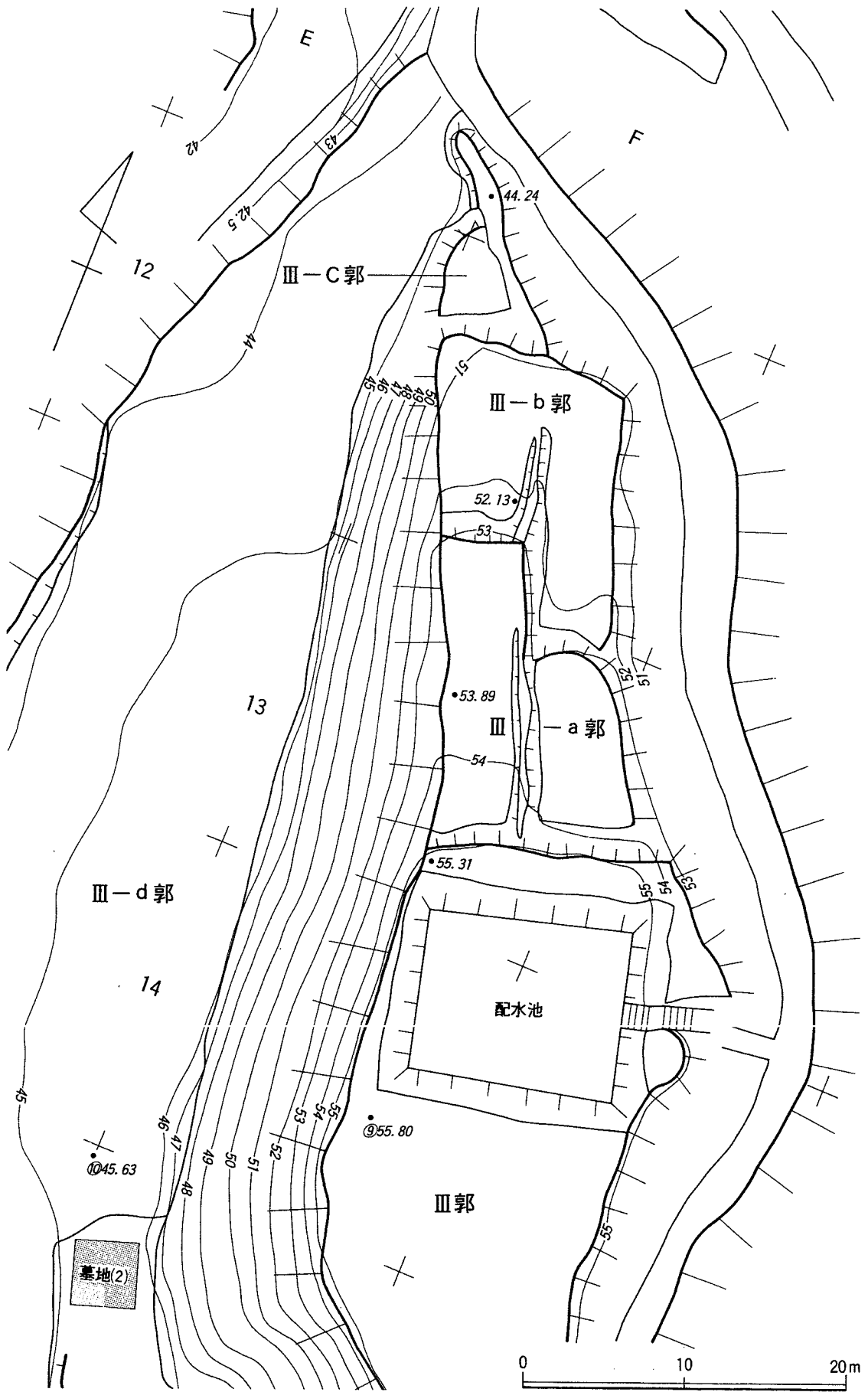
第12図 三川城跡測量図②



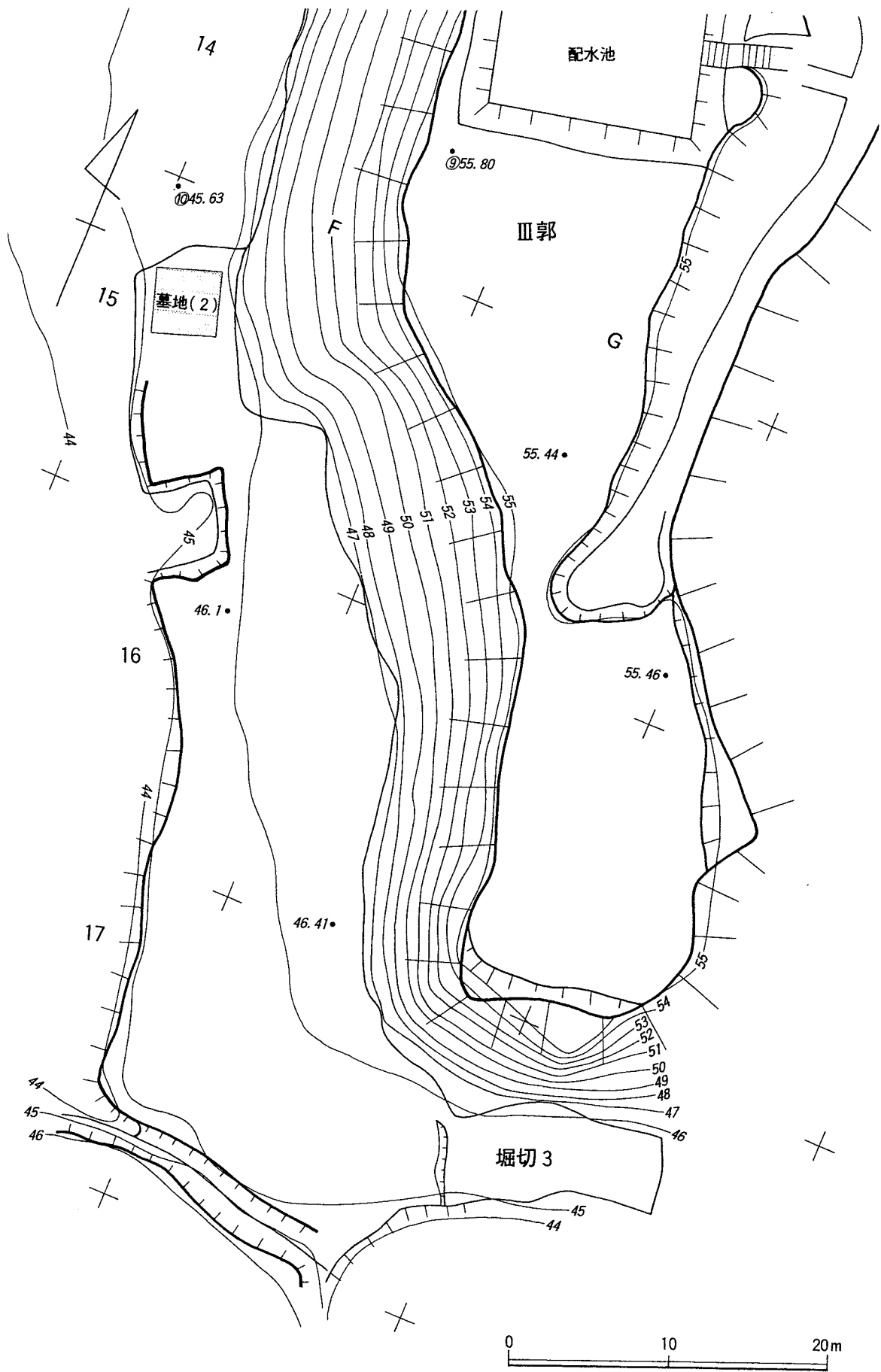
第13図 三川城跡測量図③



第14図 三川城跡測量図④



第15図 三川城跡測量図⑤



第16図 三川城跡測量図⑥

## 第Ⅳ章 出土遺物

三川城跡に関する遺物は1から112と156から160である。時代は14世紀後半を上限として、下限は17世紀初頭に位置付けられる。

### 1. 14世紀後半～15世紀（1～5）

〔青磁〕1～5は中国産で、総じて体部はやや内弯する。いずれも無文であるが、外器面に1mm幅の沈線が巡るもの(3)がある。釉色は灰オリーブ色(1・2・4)と灰黄オリーブ色(3・5)に分かれる。

### 2. 15世紀後半～16世紀中期（6～42）

〔青磁〕6～24はいずれも中国産であるが、6～9は15世紀後半に位置付けられる。7を除き、口縁部は外弯（端反り）する。7の口唇部は丸みを帯びる。釉色は灰白オリーブ色(6)、灰オリーブ色(7)、灰緑オリーブ色(8)、灰青オリーブ色(9)に分かれる。

10～24は16世紀中期までの幅を有する遺物である。口縁部は(11～14・16～19)がやや内弯する。10は途中で外弯し、最上位で内傾気味となる。15・20・21は上位で外弯する。11～15・20・21は外器面に剣先連弁文様が描かれている。10・19は無文である。釉色は灰白オリーブ色(10・15)、灰青オリーブ色(11・13・14)、青灰オリーブ色(12・17)、灰オリーブ色(16・19・23)、灰青緑オリーブ色(18)、緑白オリーブ色(20・21)、緑青白色(22)、灰黄オリーブ色(24)に分かれる。21・24はI郭の土塚2から出土した。

〔白磁〕25～29で、いずれも中国の景德鎮窯で焼かれた皿である。25～27は口縁部で外弯する。28・29の高台は畳付きを除き、全面に施釉されている。釉色は白色であるが、やや灰色味を帯びるもの(26・29)がある。25はI郭の土塚2から出土した。

〔染付〕30～42で、いずれも中国産で、景德鎮窯で焼かれたものである。この中で30・31・35・40は15世紀末に上限の及ぶ遺物である。30は口縁部で外弯する。31は蓮子型の碗で、逆向きの羽根文様を羅列する。32は口唇部がやや波状を呈する。33は復元底径が4.8cmで、見込みに十字花文様を描く。34は剣先連弁文様、35は点描き文様があり、口縁部は直線的に伸びる。39は界線内に「佳」の文字を記す。40は31に似かよった文様であるが、比較すると、やや崩れた感じがする。41・42は色絵大皿である。42は復元底径10.9cmを測る。内底面に樹木文様が描かれ、空白部分は施釉により塗りつぶされている。端部には界線間に三角形文様を見る。31・34・42はI郭の土塚2から出土した。

### 3. 16世紀後半（43～81）

〔白磁〕43は中国産の口禿げの小杯で、I郭の土塚2から出土した。釉色は白色であるが、口禿げ部分は薄茶色。薄壁で、上位で外弯する。

〔染付〕44～80で、大方は景德鎮窯で焼かれているが、中には福建省・広東省系の窯(46～48・57・77)と福建省漳州系の窯(50～52)のものがある。44・45・60～62は界線間に四方禪文様が描かれている。44は最上位でわずかに外弯する。45は2回目に薄色の緑釉を施釉。47・49は皿で、復元口径は12.2cm(47)、13.2cm(48)、15.2cm(49)を測る。50・52は大皿で、器厚は50が6～8mm、52は底部と体部ともに1.2cmを測る。文様は50が渦巻き文様で、52が葉状文様を描く。53は復元口径18.3cmの皿で、中途から外弯する。55は皿で、獅子を描く。57は界線を基準に、縦線を放射状に描く。外底面に墨書きの丸印がある。58の内底面は饅頭形を呈し、底部径は5.2cm、外底面の四方に「長命富貴」の文字を配する。65・66は唐草文様を描いている。72・74・76の口唇部は直口気味である。44・45・47・48・55・56・58～60・62・68・69・77はI郭の土坑2から出土した。さらにI郭の土坑1からは57・79の出土を見た。

#### 4. 16世紀前後

〔三彩陶器<sup>さんさい</sup>〕角型の瓶と思われる。短頸部の外器面に緑釉、内器面に黄色釉が施されている。胴部に文様と斜めの櫛描き文様がある。

#### 5. 16世紀後半～17世紀初頭

〔白磁〕82～88で、いずれも中国産の皿である。この中で、82～84・87は福建省・広東省系の窯で焼かれたものである。形態については、85・86が内弯し、82・83は上位で内弯する。88は復元口径16cm、器高3.2cm、復元底径8.6cmを測る。体部は途中で外弯し、口唇部は波状を呈している。内外器面には放射状に広がる6mm幅の沈線がある。83・87・88はI郭の土坑2から出土した。

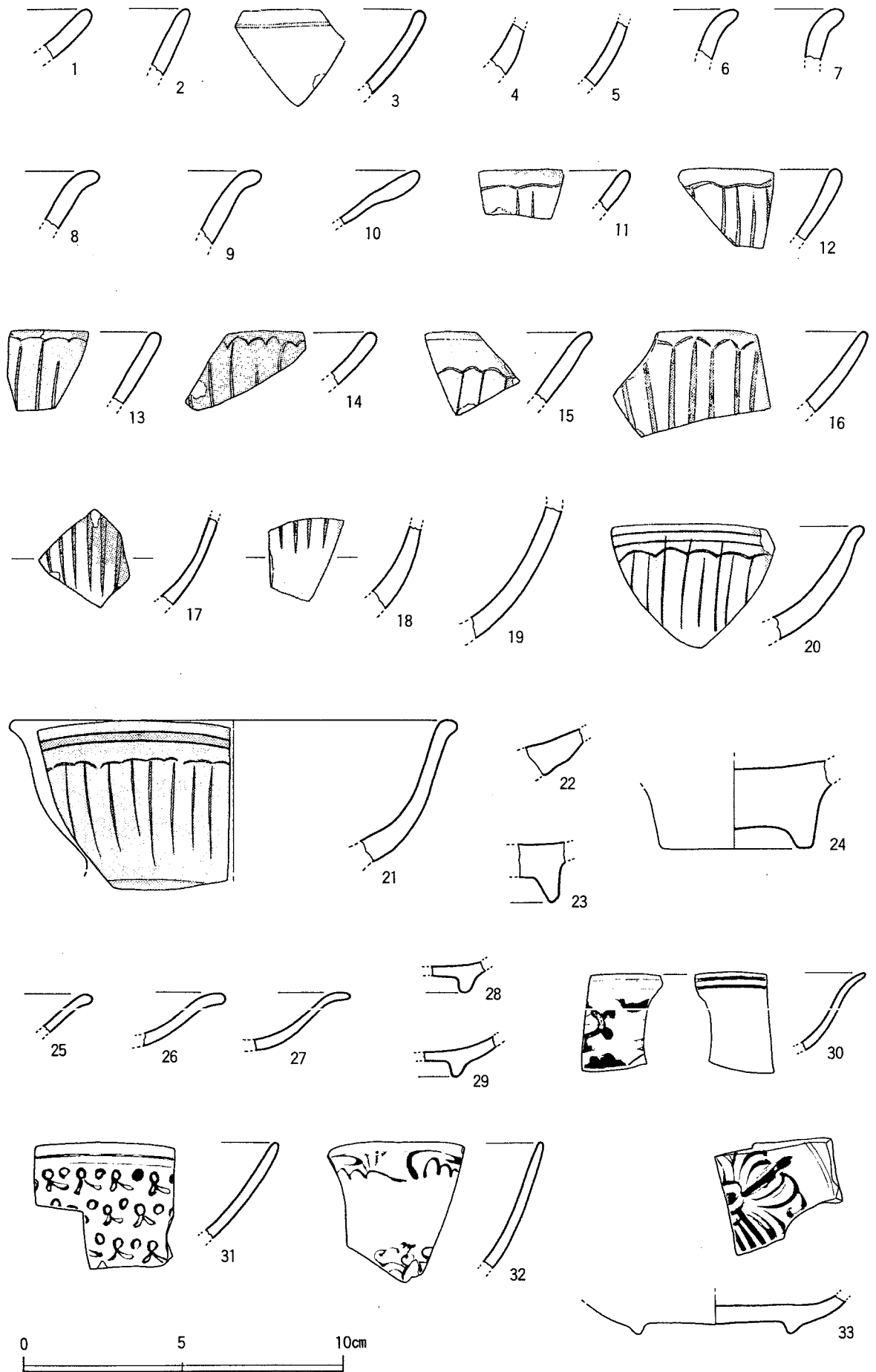
〔染付〕89～112で、いずれも中国産で、主に景德鎮の窯で焼かれているが、福建省・広東省系の窯のもの(89・90・93・94・96・107・108～111)が目立つ。93・94・108～111は碁筭皿である。93は復元口径10.9cm、94は底径3.4cmを測る。95は鳳凰文様が描かれている。96は復元底径5.1cmで、見込みに釉剥ぎが残る。97は復元口径14.7cmで、竜文様を描く。98は復元口径13.7cm。99・100は碁筭皿の可能性がある。いずれも界線間に点描き文様を有する。105の体部は大きく外弯する。112の文様は鳳凰を描いたものと思われる。

#### 6. 近世

113～155は三川城の廃城後、城跡に持ち込まれた遺物である。江戸時代のもが多く、肥前系の染付碗・皿、陶器皿、土瓶、播鉢などがある。城跡に建立された祇園社の参拝者などが持ち込んだものと思われる。

#### 7. その他

156は瓦質の播鉢で、157は火舎である。158は土師系の小壺で、159・160は糸切り土師皿の小片である。これは三川城時代の中世雑器である。161は、縄文時代のチャートの石鏃である。



第17图 出土遺物実測図①



No.	器種	産地	時代	形態の特徴	文様・手法・調整	備考
1	青磁碗	中国	14C後半 ~15C	〔口縁部〕 わずかに内弯する。 〔器厚〕中位 4.5mm 下位 5mm	〔内外器面〕無文。	〔釉色〕灰オリーブ色。 〔器面〕太めの貫入。 光沢がある。 〔出土〕I郭
2	青磁碗	中国	14C後半 ~15C	〔口縁部〕直口気味。 〔器厚〕4mm	〔内外器面〕無文。	〔釉色〕灰オリーブ色。 〔器面〕太めの貫入。 〔出土〕I郭
3	青磁碗	中国	14C後半 ~15C	〔口縁部~体部〕 やや内弯する。 〔器厚〕上位 4mm 中位 4mm 下位 4.5mm	〔外器面〕 上位に1mm幅の沈線が 巡る。 〔内外器面〕無文。	〔釉色〕灰黄オリーブ色。 〔器面〕外器面に太めの 貫入。焼き切っており、 光沢がある。 〔出土〕I郭
4	青磁碗	中国	14C後半 ~15C	〔体部〕やや内弯する。 〔器厚〕中位 5mm 下位 7.5mm	〔内外器面〕無文。	〔釉色〕濃灰オリーブ色。 〔器面〕くすんだ感じ。 〔出土〕I郭
5	青磁碗	中国	14C後半 ~15C	〔体部〕やや内弯する。 〔器厚〕中位 4mm 下位 4.5mm	〔内外器面〕無文。	〔釉色〕灰黄オリーブ色。 〔器面〕焼き切っており、 光沢がある。 〔出土〕I郭
6	青磁碗	中国	15C後半	〔口縁部〕 上位で外弯(端反り)す る。 〔器厚〕下位 5mm 中位 5mm 上位 4mm	〔内外器面〕無文。	〔釉色〕灰白オリーブ色。 〔器面〕外器面は焼き切 っている。内器面は、 やや、くすんだ感じ。 〔出土〕I郭
7	青磁碗	中国	15C後半	〔口縁部〕 口唇部は丸味を帯びる。 〔器厚〕下位 6mm 中位 6mm 上位 5mm	〔内外器面〕無文。	〔釉色〕灰オリーブ色。 〔器面〕くすんだ感じ。 貫入が走る。 〔出土〕I郭
8	青磁碗	中国	15C後半	〔口縁部〕 上位で外弯(端反り)す る。 〔器厚〕下位 4.5mm 中位 5mm 上位 4.5mm	〔内外器面〕無文。	〔釉色〕灰緑オリーブ色。 〔器面〕内器面は、やや、 くすんだ感じ。貫入が 走る。 〔出土〕I郭
9	青磁碗	中国	15C後半	〔体部~口縁部〕 直線的に伸びて、上位 で外弯(端反り)する。 〔器厚〕下位 5.5mm 中位 5mm 上位 4.5mm	〔内外器面〕無文。	〔釉色〕灰青オリーブ色。 〔器厚〕内器面は、やや、 くすんだ感じ。太めの 貫入。 〔出土〕I郭
10	青磁皿	中国	15C後半 ~16C	〔体部~口縁部〕 下位から上位にかけて 漸次、肥厚する。 途中で外弯するが、最 上位で内傾気味となる。 〔器厚〕下位 2.5mm 中位 3.5mm 上位 4.5mm	〔内外器面〕無文。	〔釉色〕灰白オリーブ色。 口唇部は灰茶オリーブ 色に変色。 〔器面〕焼き切っており、 光沢がある。 〔出土〕I郭
11	青磁碗	中国	15C後半 ~16C中	〔口縁部〕 わずかに内弯する。 〔器厚〕4mm	〔外器面〕2~4mm幅の剣 先連弁文様。 〔内器面〕無文。	〔釉色〕灰青オリーブ色。 〔出土〕I郭
12	青磁碗	中国	15C後半 ~16C中	〔口縁部〕 わずかに内弯し、口唇 部は丸みを帯びる。 〔器厚〕中位 4mm 上位 4.5mm	〔外器面〕 4mm幅の剣先連弁文様。 〔内器面〕無文。	〔釉色〕青灰オリーブ色。 〔出土〕I郭
13	青磁碗	中国	15C後半 ~16C中	〔口縁部〕 わずかに内弯する。 〔器厚〕中位 4mm 上位 4.5mm	〔外器面〕5~7mm幅の剣 先連弁文様。 〔内器面〕無文。	〔釉色〕灰青オリーブ色。 〔出土〕I郭

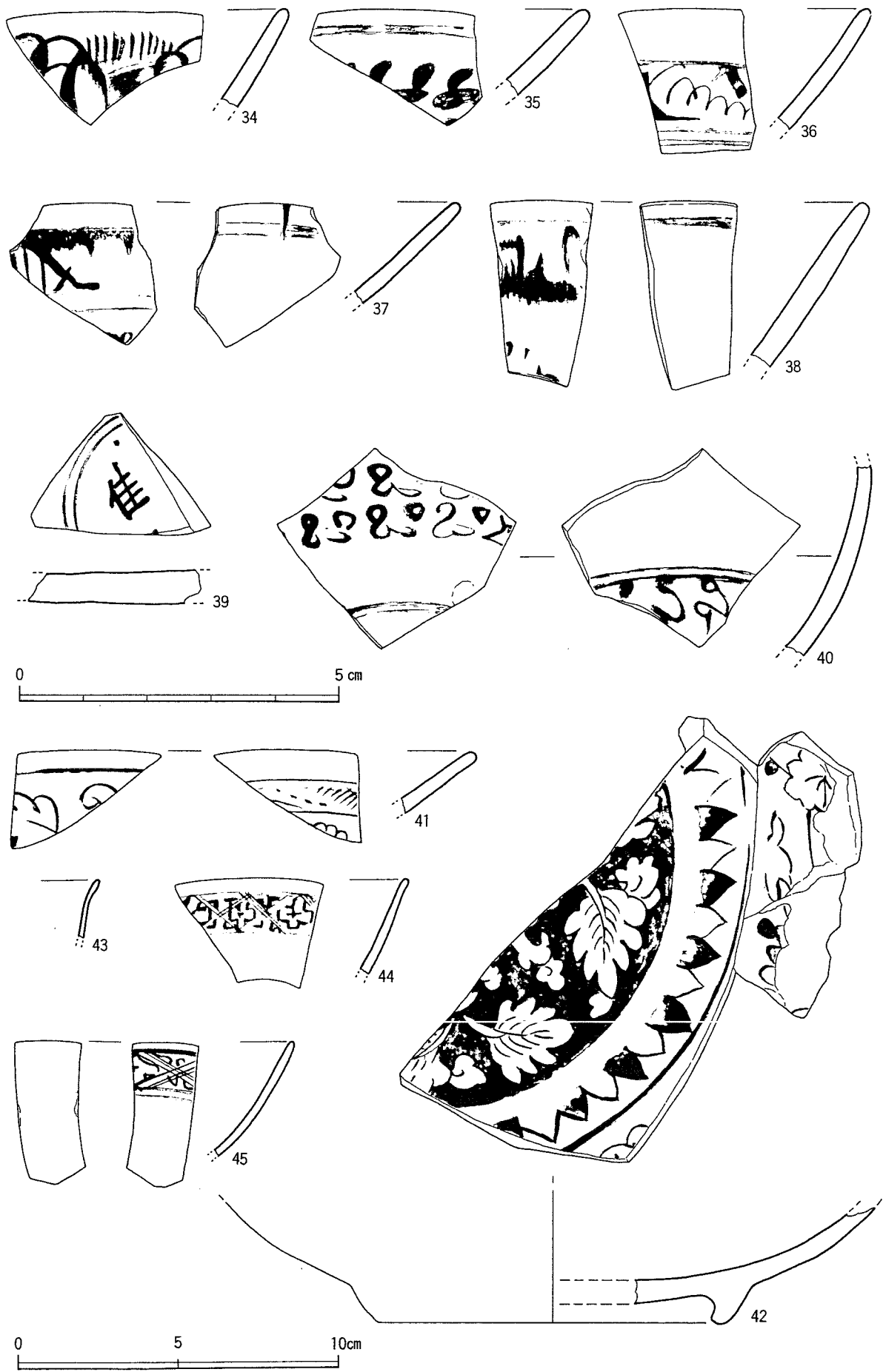
第3表 出土遺物観察表①

No.	器種	産地	時代	形態の特徴	文様・手法・調整	備考
14	青磁碗	中国	15C後半 ～16C中	〔口縁部〕 わずかに内弯する。 〔器厚〕中位 4mm 上位 4.5mm	〔外器面〕 6～8mm幅の剣先連弁文 様。 〔内器面〕無文。	〔釉色〕灰青オリブ色。 〔出土〕I郭
15	青磁碗	中国	15C後半 ～16C中	〔体部～口縁部〕 極くわずかであるが、 内弯しながら伸びて、 上位で外弯する。 〔器厚〕中位 4mm 上位 4.5mm	〔外器面〕 6～7mm幅の剣先連弁文 様。 〔内器面〕無文。	〔釉色〕灰白オリブ色。 〔器面〕太めの貫入。 焼き切っており、光沢 がある。 〔出土〕I郭
16	青磁碗	中国	15C後半 ～16C中	〔体部～口縁部〕 わずかに内弯する。 〔器厚〕中位 4.5mm 上位 3mm	〔外器面〕 5～8mm幅の剣先連弁文 様。	〔釉色〕灰オリブ色。 口唇部の内側に極小点 の黄白色。 〔器面〕内器面に貫入。 〔出土〕I郭
17	青磁碗	中国	15C後半 ～16C中	〔体部〕 やや内弯する。 〔器厚〕下位 5mm 中位 3mm	〔外器面〕 2～4mm幅の剣先連弁文 様。 〔内器面〕無文。	〔釉色〕青灰オリブ色。 〔出土〕I郭
18	青磁碗	中国	15C後半 ～16C中	〔口縁部〕 やや内弯する。 〔器厚〕下位 5mm 中位 3mm	〔外器面〕 4～5mm幅の剣先連弁文 様。 〔内器面〕無文。	〔釉色〕 灰青緑オリブ色。 〔出土〕I郭
19	青磁碗	中国	15C後半 ～16C中	〔体部〕 やや内弯する。 〔器厚〕下位 5mm 中位 4.5mm	〔内外器面〕無文。	〔釉色〕灰オリブ色。 〔器面〕太めの貫入。 〔出土〕I郭
20	青磁碗	中国	15C後半 ～16C	〔体部～口縁部〕 やや内弯し、口縁部で わずかに外弯する。 〔器厚〕下位 7mm 中位 6mm 上位 4mm	〔外器面〕 4～6mm幅の剣先連弁文 様。 〔内器面〕無文。	〔釉色〕緑白オリブ色。 〔器面〕太めの貫入。 〔出土〕I郭土坑2
21	青磁碗	中国	15C後半 ～16C	復元口径 13.9cm 〔体部～口縁部〕 内弯し、口縁部でやや 外弯する。 口唇部は丸みを帯びる。 〔器厚〕下位 8mm 中位 4.5mm 上位 4mm 口唇部 5mm	〔外器面〕 6～8mm幅の剣先連弁文 様。 〔内器面〕無文。	〔釉色〕緑白オリブ色。 〔器面〕太めの貫入。 〔出土〕I郭土坑2
22	青磁皿	中国	15C後半 ～16C中	〔器厚〕下位 9mm 中位 5mm	—————	〔釉色〕緑青白色。 分厚く施釉されている。 〔器面〕細かな貫入。 〔胎土〕褐色味が残る。 〔出土〕I郭
23	青磁碗	中国	15C後半 ～16C中	〔器厚〕底部 1cm	—————	〔釉色〕濃灰オリブ色。 〔出土〕I郭
24	青磁碗	中国	15C後半 ～16C中	底径 4.8cm 〔器厚〕底部 1.8cm	—————	〔釉色〕灰黄オリブ色。 〔出土〕I郭土坑2
25	白磁皿	中国 景德镇	15C後半 ～16C中	〔体部～口縁部〕 上位で外弯する。 〔器厚〕下位 3mm 中位 2.5mm 上位 3mm	—————	〔釉色〕白色。 〔器面〕焼ききっており、 光沢がある。 〔出土〕I郭土坑2
26	白磁皿	中国 景德镇	15C後半 ～16C中	〔体部～口縁部〕 内弯しながら伸びて、 上位で外弯する。 〔器厚〕 上位から下位にかけて 均一の厚さ。4mm。	—————	〔釉色〕白灰色。 〔出土〕I郭

第4表 出土遺物観察表②

No.	器種	産地(窯名)	時代	形態の特徴	文様・手法・調整	備考
27	白磁皿	中国 (景德鎮)	15C後半 ~16C中	〔体部~口縁部〕 内弯しながら伸びて、 上位で外弯する。 〔器厚〕下位 4mm 中位 3mm 上位 2.5mm	_____	〔釉色〕白色。 〔出土〕I 郭
28	白磁皿	中国 (景德鎮)	15C後半 ~16C中	〔器厚〕底部 3mm 体部 3mm	_____	〔釉色〕白色。 〔器面〕高台は疊付きを 除き、全面に施釉。 〔出土〕I 郭土城2
29	白磁皿	中国 (景德鎮)	15C後半 ~16C中	〔器厚〕底部 3mm 体部 4mm	_____	〔釉色〕白灰色。 〔器面〕高台は疊付きを 除き、全面に施釉。 〔出土〕I 郭
30	染付碗	中国 (景德鎮)	15C末~ 16C中	〔体部~口縁部〕 下位から中位は内弯 し、上位で外弯する。 〔器厚〕下位 3mm 中位 2.5mm 上位 2mm	〔外器面〕 外弯部分に3.5mm幅で 2条の界線。下部は薄 色。界線下に文様。 〔内器面〕 外弯部分に4mm幅で2 条の界線。 線幅は太め。	〔器面〕白灰青色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I 郭表土
31	染付碗	中国 (景德鎮)	15C末~ 16C中	蓮子型の碗。 〔体部~口縁部〕 わずかに内弯する。 〔器厚〕 ほぼ均一。3mm。	〔外器面〕 上位に2条の界線。 下部は極薄色。 界線下に逆向きの羽根 文様を羅列。2個を1 単位として、間に小円 文を挟む。 〔内器面〕 上位に2条の界線。	〔器面〕白灰青色。 くすんだ感じ。 〔呉須〕灰青色。 〔出土〕I 郭土城2
32	染付碗	中国 (景德鎮)	16C前半 ~中	〔体部~口縁部〕 わずかに内弯する。 口縁部は先細りの状 態で上位に至る。 口唇部は、やや波状 を呈する。	〔外器面〕 上位1.3cm幅に文様。 極薄色の界線間に描か れている。 下位に文様。 〔内器面〕 上位に2mm幅の界線。	〔器面〕白青色。 透明感がある。 〔呉須〕鮮やかな青黒色。 極薄色の青白色。 〔出土〕I 郭表土
33	染付碗	中国 (景德鎮)	16C前半 ~中	復元底径 4.8cm 〔器厚〕底部中央6.8mm 端部 5mm 体部下位5.5mm 中位 3mm 〔高台高〕3mm	〔外器面〕 下位に釉溜り的な界線 と文様。 〔内器面〕 見込みの立ち上がり に2条の界線。全面に 十字花文様を描く。	〔器面〕白青色。 高台の疊付きを除き 全面に施釉。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I 郭
34	染付碗	中国 (景德鎮)	16C前半 ~中	〔口縁部〕 直線的に伸びる。 〔器厚〕 ほぼ均一。3mm。	〔外器面〕 先端部が丸味を帯びる。 剣先連弁文様。 〔内器面〕 最上位に極薄色の界線。	〔器面〕白灰青色。 くすんだ感じ。 〔呉須〕外器面は青黒色。 内器面は灰色。 〔出土〕I 郭土城2
35	染付碗	中国 (景德鎮)	15C末~ 16C中	〔口縁部〕 直線的に伸びる。 口唇部は、やや直口 気味。 〔器厚〕中位 3mm 上位 2mm	〔外器面〕 2条の界線下に点描き 文様。 〔内器面〕 最上位に5mm幅の界線。	〔器面〕白青色。 〔呉須〕青黒色。 界線は薄色。 〔出土〕I 郭
36	染付碗	中国 (景德鎮)	16C前半 ~中	〔口縁部〕 わずかに内弯する。 〔器厚〕 ほぼ均一。2.5mm。	〔外器面〕 2条づつの界線間に 細線文様。 〔内器面〕 上位に薄色の界線。	〔器面〕白青色。 〔呉須〕灰青黒色。 〔出土〕I 郭表土

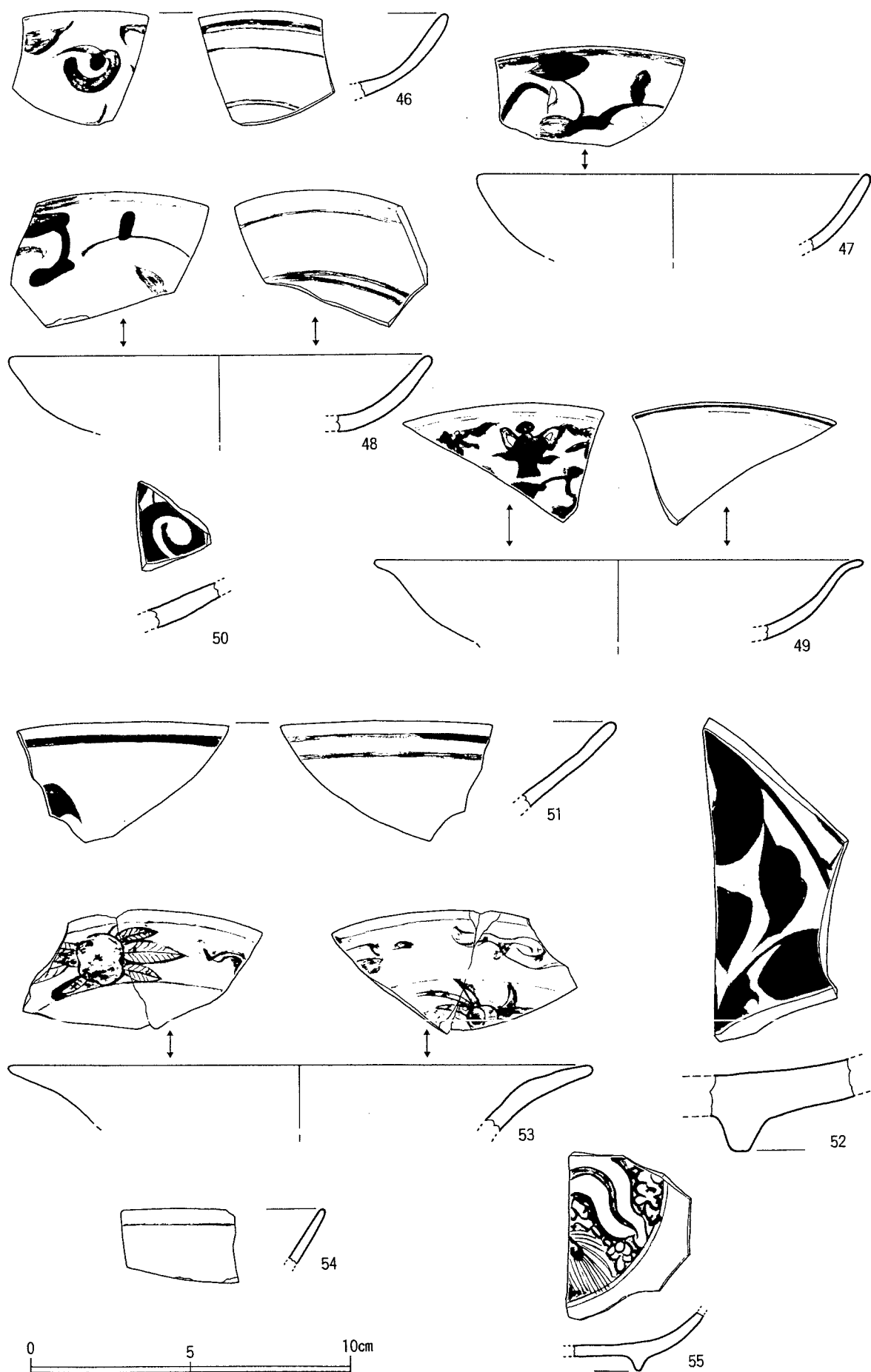
第5表 出土遺物観察表③



第18图 出土遺物実測図②

No.	器種	産地(窯名)	時代	形態の特徴	文様・手法・調整	備考
37	染付碗	中国 (景德鎮)	16C前半 ~中	〔口縁部〕 直線的に伸びる。 〔器厚〕 ほぼ均一。2.5mm。	〔外器面〕 2.8cm幅に上部1条、 下部2条の界線。 界線間に文様。 〔内器面〕上位に界線。	〔器面〕白青色。 〔呉須〕青黒色。 界線は薄色。 内器面は不鮮明。 〔出土〕I郭
38	染付碗	中国 (景德鎮)	16C前半 ~中	〔口縁部〕 直線的に伸びる。 〔器厚〕下位 3.5mm 中位 3.5mm 上位 2.5mm	〔外器面〕薄色の文様。 〔内器面〕 上位に薄色の2条の界 線。	〔器面〕白青色。 〔呉須〕薄青黒色。 〔出土〕I郭
39	染付 (碗か皿?)	中国 (景德鎮)	16C前半 ~中	〔器厚〕底部中央4.5mm 端部 5mm	〔外器面〕 2条の界線内に「佳」 の文字。 〔内器面〕無文。	〔器面〕外器面は白青色。 内器面は白色。 〔呉須〕濃青黒色。 〔出土〕I郭
40	染付碗	中国 (景德鎮)	15C末~ 16C中	〔体部〕内弯する。 〔器厚〕中位 3.5mm 上位 2.5mm	〔外器面〕 上位にNo. 31と似た文 様。ただし文様自体は 比較して、やや崩れた 感じ。 下位に2条の界線。 〔内器面〕 2つの小円文をU字形 の線で繋いだ文様。	〔器面〕白青色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭
41	色絵大皿	中国 (景德鎮)	16C前半 ~中	〔体部~口縁部〕 わずかに内弯する。 〔器厚〕下位 4.5mm 中位 4mm 上位 4mm	〔外器面〕 上位に界線。 界線下に曲線文様。	〔器面〕白色。 〔呉須〕赤色。 〔出土〕I郭
42	色絵大皿	中国	16C前半 ~中	復元底径 10.9cm 器高 6mm 〔高台〕内傾する。 〔体部〕やや内弯する。 〔器厚〕底部中央 8mm 端部 6.5mm 高台幅 8mm 体部下位 6.5mm 中位 5mm	〔外器面〕 下位に2条の界線。 界線上に文様。 〔内底面〕 全面に樹木文様。空白 部分は施釉により塗り 潰されている。 端部に描かれた1.5cm 幅の界線間に三角形の 文様。 〔内器面〕文様。	〔器面〕白灰色。 〔呉須〕やや薄色の赤色。 〔出土〕I郭土坑2
43	白磁小杯	中国 (景德鎮)	16C後半	〔体部~口縁部〕 口禿げ。 薄壁で、内弯気味に 伸びて外弯する。 〔器厚〕下位 1.5mm 中位 2mm 上位 1.5mm	—————	〔釉色〕白色。 口禿げ部分は薄茶色。 〔器面〕 焼き切っており、光沢 がある。 〔出土〕I郭土坑2
44	染付碗	中国 (景德鎮)	16C後半	〔体部~口縁部〕 直線的に伸びるが、 外器面側は最上位で わずかに外弯する。 〔器厚〕下位 3mm 中位 3mm 上位 2mm	〔外器面〕 最上位より5.5mm下に 1条の界線。 〔内器面〕 上位の1.5cm幅に文様。 薄色の界線間に四方樺 文様が描かれている。	〔器面〕白色。 〔呉須〕青白色。 〔出土〕I郭土坑2
45	染付碗	中国 (景德鎮)	16C後半	〔体部~口縁部〕 わずかに内弯する。 〔器厚〕 ほぼ均一。2.5mm。	〔内器面〕 上位の1.7cm幅に文様。 薄色の界線間に四方樺 文様が描かれている。 界線は上部が1条、下 部は2条。	〔器面〕白灰青色。 外器面の2回目の施釉 に薄色の緑釉。 口唇部に緑釉がかかる。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭土坑2

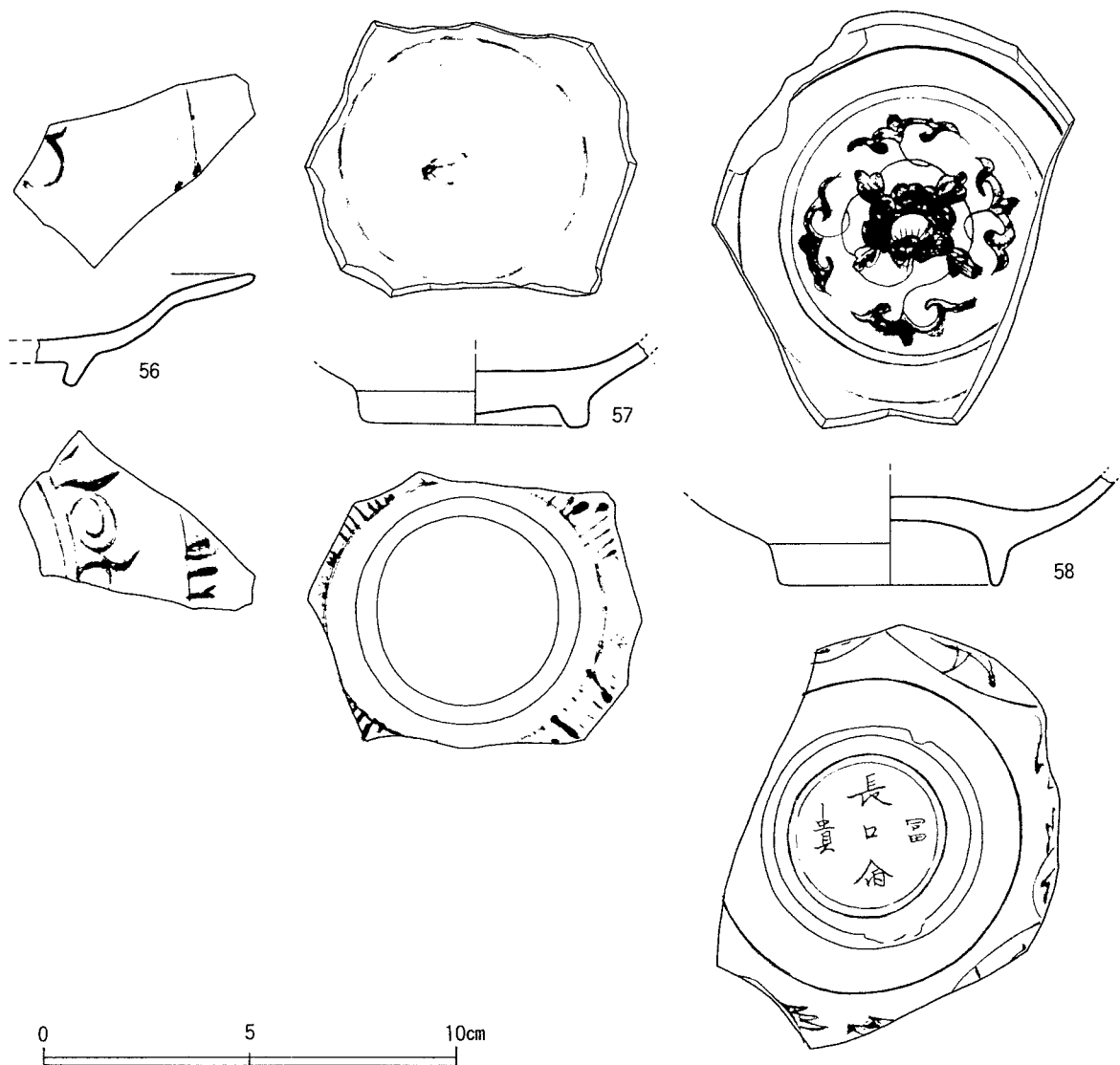
第6表 出土遺物観察表④



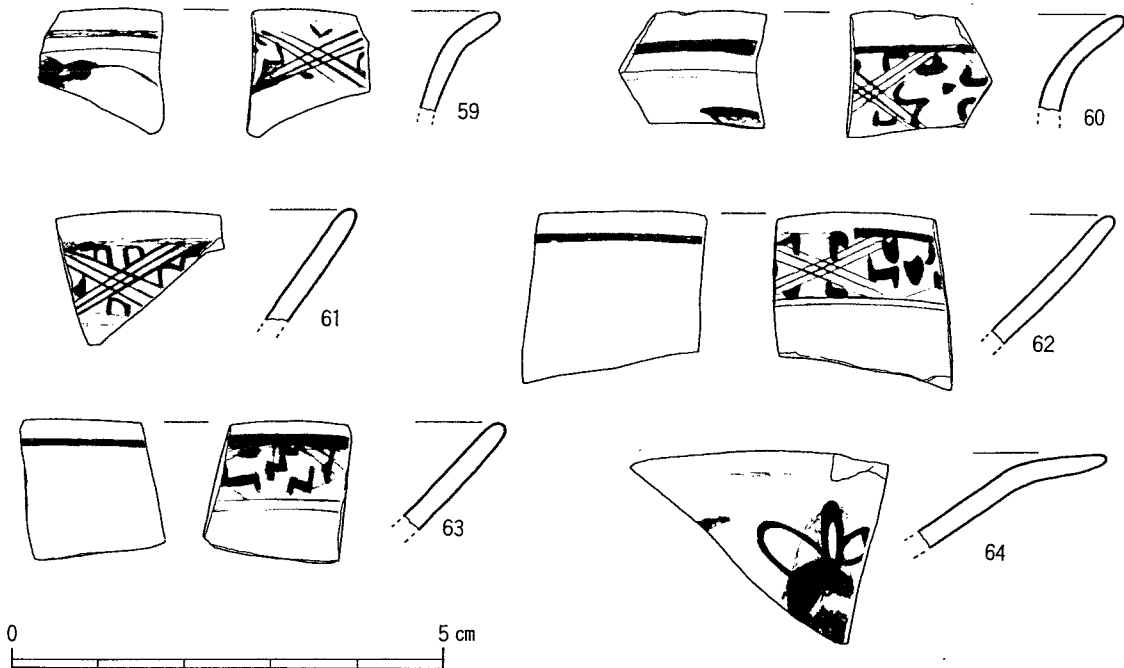
第19图 出土遺物実測図③

No.	器種	産地(窯名)	時代	形態の特徴	文様・手法・調整	備考
46	染付碗	中国 (福建省 広東省 系)	16C後半	〔体部～口縁部〕 やや内弯する。 〔器厚〕下位 3.5mm 中位 3mm 上位 2.5mm	〔外器面〕 最上位に1mm幅の界線。 界線下に太線描きの文様。 〔内器面〕 上位に2条の界線。 上線は4mm幅、下線は1mm幅。	〔器面〕白灰褐色。 太めの貫入。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭表土
47	染付皿	中国 (福建省 広東省 系)	16C後半	復元口径 12.2cm 〔体部～口縁部〕 わずかに内弯する。 〔器厚〕下位 3.5mm 中位 4mm 上位 3mm	〔外器面〕 最上位に4.5mm幅の界線。 界線下に文様。 〔内器面〕 上位に1mm幅の界線。	〔器面〕灰褐白色。 細かな貫入。 〔呉須〕黒青色。 〔出土〕I郭土城2
48	染付皿	中国 (福建省 広東省 系)	16C後半	復元口径 13.2cm 〔体部～口縁部〕 やや内弯する。 〔器厚〕下位 5mm 中位 5mm 上位 3.5mm	〔外器面〕 最上位に4mm幅の界線。 界線下に文様。 〔内器面〕 上位に1条、下位に2条の界線。	〔器面〕灰白褐色。 細かな貫入。 〔呉須〕黒青色。 〔出土〕I郭土城2
49	染付皿	中国 (景德鎮)	16C中～ 末	復元口径 15.2cm 〔体部～口縁部〕 内弯し、上位で外弯する。 〔器厚〕下位 4.5mm 中位 3mm 上位 2mm	〔外器面〕 上位に2mm幅で2条の界線。 界線下に文様。 〔内器面〕 最上位に3mm幅で2条の界線。	〔器面〕白青色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭
50	染付大皿	中国 (福建省 漳州窯 系)	16C後半	〔器厚〕下位 8mm 中位 6mm	〔内器面〕渦巻き文様。	〔器面〕白灰褐色。 〔呉須〕濃青黒色。 〔出土〕I郭
51	染付皿	中国 (福建省 漳州窯 系)	16C後半	〔体部～口縁部〕 直線的に伸びて、中途からやや内弯する。 〔器厚〕下位 4.5mm 中位 4mm 上位 4mm	〔内器面〕 上位に7mm幅で2条の界線。 〔外器面〕 上位に3mm幅の界線。 界線下に文様。	〔器面〕白黄褐色。 細かな貫入。 〔呉須〕青緑黒色。 〔出土〕I郭
52	染付大皿	中国 (福建省 漳州窯 系)	16C後半	〔器厚〕肉太。 底部 1.2cm 高台幅 1.5cm 体部 1.2cm	〔外器面〕 下位に2.6cm幅の2条の界線。界線の上位に文様。 〔内器面〕 3mm幅の界線。 器面一杯に葉状文様。	〔器面〕白黄褐色。 外器面に細かな貫入。 〔呉須〕濃黒青色。 〔出土〕I郭
53	染付皿	中国 (景德鎮)	16C後半	復元口径 18.3cm 〔体部～口縁部〕 中途から外弯する。 〔器厚〕下位 6mm 中位 6.5mm 上位 3.5mm	〔内外器面〕 中途から上位に1.9cm幅の界線。 界線間に文様。 〔内器面〕下位に文様。	〔器面〕白青色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭
54	染付碗	中国 (景德鎮)	16C後半	〔体部～口縁部〕 わずかに内弯する。 〔器厚〕下位 4mm 中位 3.5mm 上位 3mm	〔内外器面〕 上位に界線。	〔器面〕白青色。 〔呉須〕薄青黒色。 〔出土〕I郭
55	染付皿	中国 (景德鎮)	16C後半	底部は薄壁。 〔体部〕やや内弯する。 〔器厚〕底部中央3.5mm 端部 4mm 体部下位 5mm 中位 3mm 〔高台高〕5mm	〔外器面〕 高台側面に2条の界線。 〔内器面〕 見込みの立ち上がりに2条の薄色で細い界線。 全面に獅子を描いた文様。	〔器面〕白色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭土城2

第7表 出土遺物観察表⑤



0 5 10cm



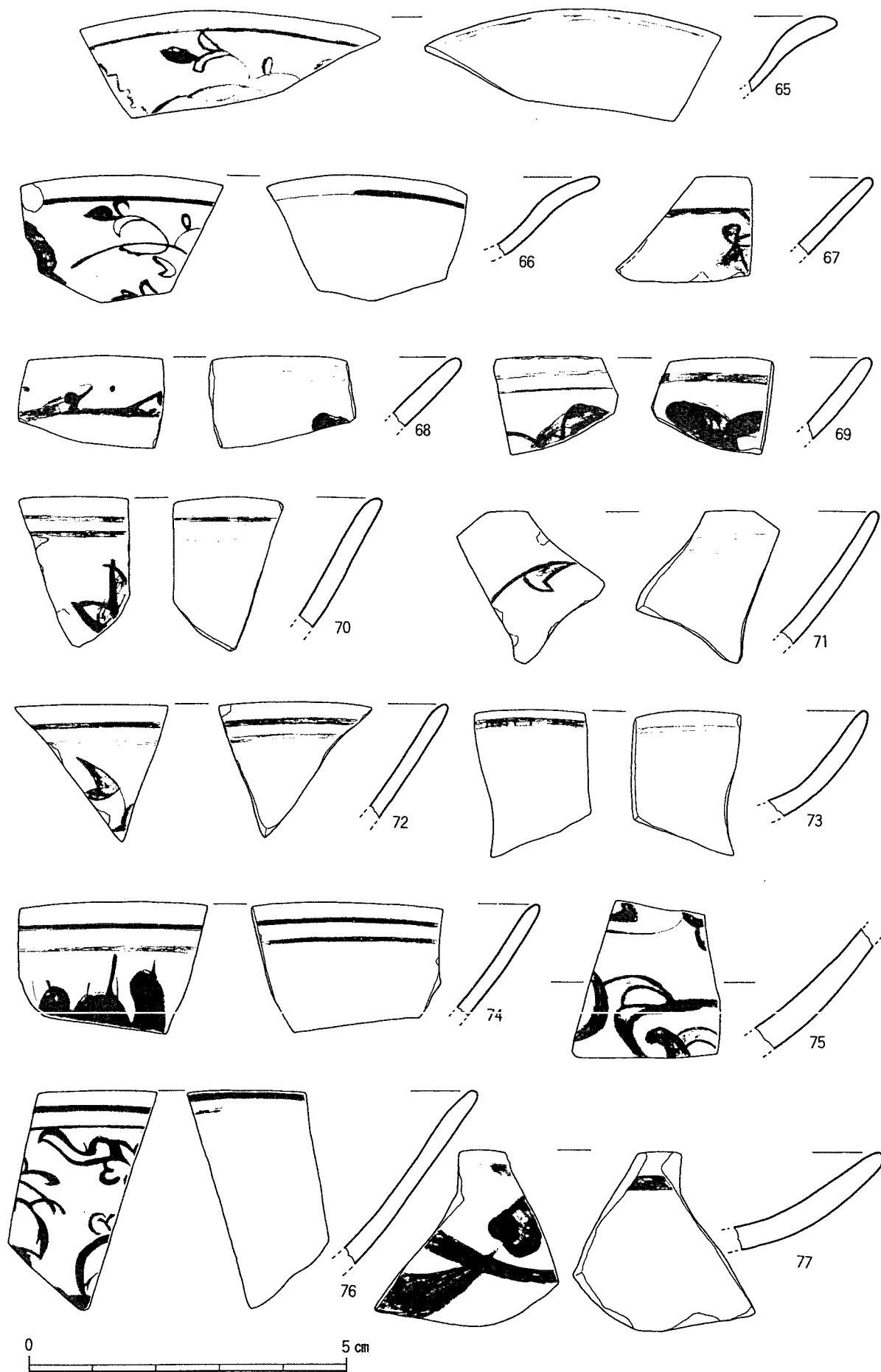
0 5 cm

第20図 出土遺物実測図④



No.	器種	産地(窯名)	時代	形態の特徴	文様・手法・調整	備考
56	染付皿	中国 (景德鎮)	16C中～末	〔体部～口縁部〕 途中で大きく外弯する。 〔器厚〕底部 5mm 高台幅 5mm 体部下位 4.5mm 中位 3mm 上位 2mm	〔外器面〕 上位と下位に文様。 中途から上位に3条の 界線。 高台に2条の界線。 〔内器面〕 中途から上位に文様と 界線。界線は上下2条 つつ。 〔内底面〕界線と文様。	〔器面〕白青色。 焼き切っており、光沢 がある。 高台の畳付きと内側の み無釉。 〔呉須〕青白黒色。 〔出土〕I 郭土坂2
57	染付碗	中国 (福建省 広東省 系)	16C中～末	外底面中央部は凸。 高台の畳付きは5mm 幅。底部径 5.4cm 〔器厚〕底部中央10mm 端部8.5mm 体部下位 7mm 中位 4mm 〔高台高〕中央 3mm 端部 5mm	〔外器面〕 下位に界線。界線を基 準に縦線を放射状に描 く。 〔内器面〕 見込みの立ち上がりに 界線。全面に大柄の絵 を描くが、界線と共に 薄く、不鮮明。	〔器面〕 くすんだ感じの灰青色。 高台の畳付きから外底 面は無釉で、墨書の丸 印あり。 〔呉須〕灰青褐色。 〔出土〕I 郭土坂1
58	染付碗	中国 (景德鎮)	16C後半	内底面は饅頭形。 底部径 5.2cm 〔器厚〕底部中央5.5mm 端部 8mm 体部下位 8mm 中位3.5mm 〔高台高〕1.5cm	〔外器面〕 曲線を組み合わせた文 様。下位に界線。 〔高台側面〕 2条の界線。 〔外底面〕 端部に2条の界線。 四方に「長命富貴」の 文字を配する。 〔内器面〕 3条の界線。全面に葉 状文様を描く。	〔器面〕白青色。 高台の畳付きを除き、 全面に施釉。 〔呉須〕青黒色。 外器面には呉須がにじ んでいる。 〔出土〕I 郭土坂2
59	染付 (碗か皿?)	中国 (景德鎮)	16C中～末	〔体部～口縁部〕 直線的に伸びて、上 位で外弯する。 〔器厚〕 ほぼ均一。2mm。	〔外器面〕 屈曲部に界線。界線下 に文様。 〔内器面〕 9mm幅の界線間に四方 襷文様。界線は上部1 条、下部2条。	〔器面〕白青色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I 郭土坂2
60	染付碗	中国 (景德鎮)	16C中～末	〔口縁部〕外弯する。 〔器厚〕 ほぼ均一。2mm。	〔外器面〕 屈曲部に2条の界線。 下部は細線。 界線下に文様。 〔内器面〕 界線間に四方襷文様。	〔器面〕白青色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I 郭土坂2
61	染付碗	中国 (景德鎮)	16C後半	〔口縁部〕 直線的に伸びる。 〔器厚〕 ほぼ均一。2.5mm	〔外器面〕無文。 〔内器面〕 1cm幅の界線間に四方 襷文様。	〔器面〕白色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I 郭
62	染付碗	中国 (景德鎮)	16C後半	〔口縁部〕 直線的に伸びる。 〔器厚〕 ほぼ均一。2mm。	〔外器面〕上位に界線。 〔内器面〕 9mm幅の界線間に四方 襷文様。界線は上部1 条、下部2条。	〔器面〕白色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I 郭土坂2
63	染付碗	中国 (景德鎮)	16C後半	〔口縁部〕 直線的に伸びる。 〔器厚〕 ほぼ均一。2mm。	〔外器面〕上位に界線。 〔内器面〕 9mm幅の界線間に文様。 界線は上部1条、下部 2条。	〔器面〕白色。 〔呉須〕外器面は黒青色。 内器面は青黒色。 〔出土〕I 郭
64	染付皿	中国 (景德鎮)	16C中～末	〔体部～口縁部〕 直線的に伸びて、上 位で外弯する。 〔器厚〕下位 2mm 中位 2.5mm 上位 1.5mm	〔外器面〕 屈曲部に薄色の界線。 界線下に線描き文様。 〔内器面〕 屈曲部に2条の界線。	〔器面〕白青色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I 郭

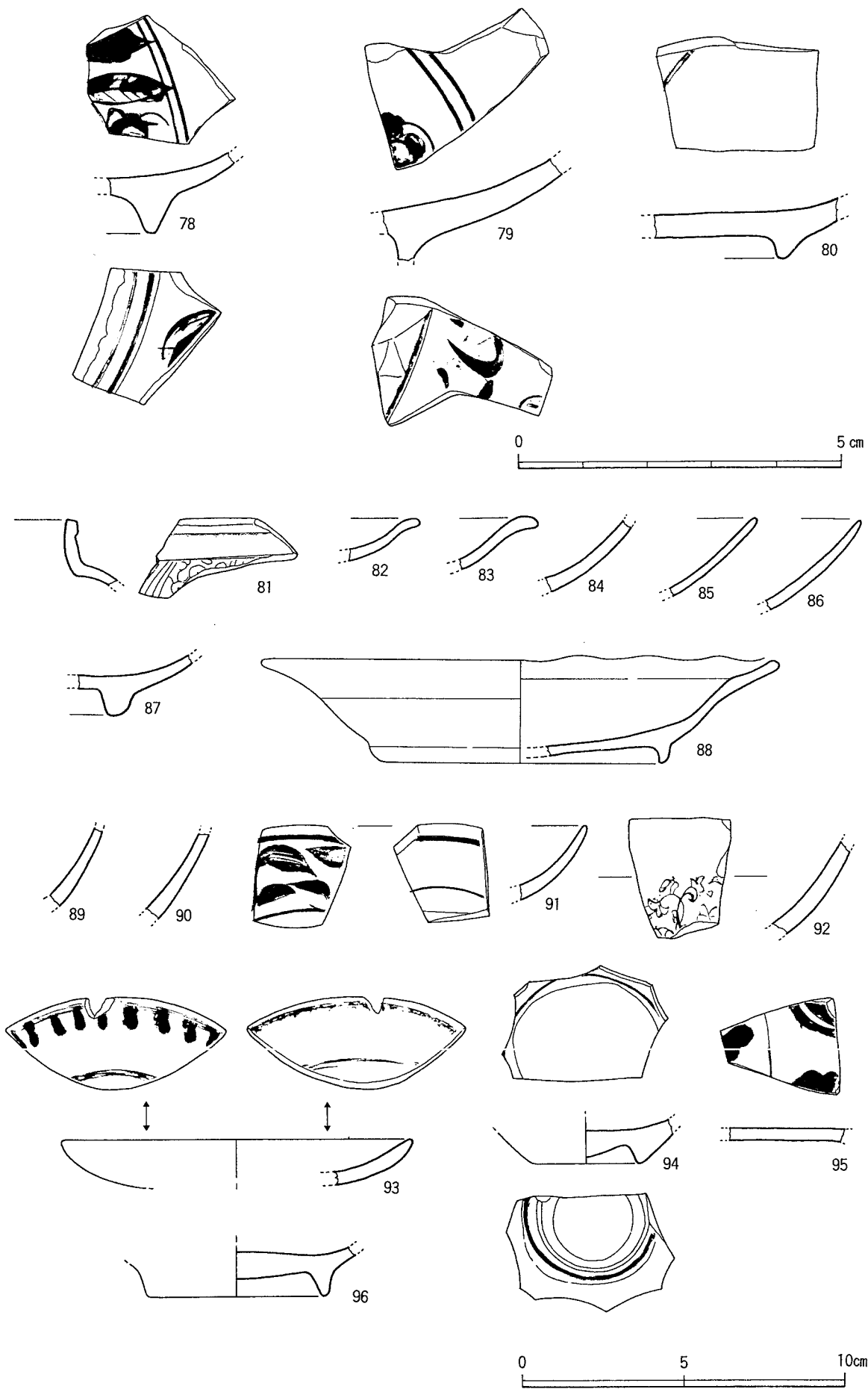
第8表 出土遺物観察表⑥



第21图 出土遺物実測图⑤

No.	器種	産地(窯名)	時代	形態の特徴	文様・手法・調整	備考
65	染付皿	中国 (景德鎮)	16C	〔口縁部〕 中位から上位にかけて漸次、肥厚する。 上位で外弯。 〔器厚〕中位 1.5mm 上位 3mm	〔外器面〕 屈曲部に薄色の界線 界線下に唐草文様。 〔内器面〕 屈曲部に界線。	〔器面〕白青色。 〔呉須〕薄青黒色。 外器面の呉須は、ややにじむ。 〔出土〕I郭
66	染付皿	中国 (景德鎮)	16C後半	〔体部～口縁部〕 中位までは内弯し、 上位で外弯する。 〔器厚〕下位 2mm 中位 2.5mm 上位 2mm	〔外器面〕 上位に薄色の界線。 界線下に唐草文様。 〔内器面〕上位に界線。	〔器面〕白青色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭
67	染付碗	中国 (景德鎮)	16C後半	〔口縁部〕 直線的に伸びる。 〔器厚〕中位 2.5mm 上位 2mm	〔外器面〕無文。 〔内器面〕 上位に界線。 界線下に文様。	〔器面〕白色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭
68	染付碗	中国 (景德鎮)	16C中～末	〔口縁部〕 直線的に伸びる。 〔器厚〕ほぼ均一。 中位 2mm 上位 3mm	〔外器面〕 界線間に文様。 〔内器面〕 上位に極薄色の界線。 界線下に文様。	〔器面〕灰白青色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭土坑2
69	染付碗	中国 (景德鎮)	16C後半	〔口縁部〕 直線的に伸びる。 〔器厚〕 ほぼ均一。2mm。	〔外器面〕 上位に2条の界線。 界線下に文様。 〔内器面〕肉太の界線。	〔器面〕白青色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭土坑2
70	染付碗	中国 (景德鎮)	16C後半	〔口縁部〕 外器面は直線的に伸びて、 内器面は最上部でやや外弯気味となる。 〔器厚〕中位 3.5mm 上位 2.5mm	〔外器面〕 上位に2条の界線。 界線下に文様。 〔内器面〕 最上位に薄色の2条の界線。	〔器面〕白青色。 〔呉須〕薄青黒色。 〔出土〕I郭
71	染付碗	中国 (景德鎮)	16C後半	〔体部～口縁部〕 わずかに外弯する。 〔器厚〕中位 3mm 上位 2mm	〔外器面〕 上位に2条の界線。 界線下に文様。 〔内器面〕 上位に2条の界線。	〔器面〕白色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭
72	染付碗	中国 (景德鎮)	16C後半	〔口縁部〕直口气味。 〔器厚〕 ほぼ均一。2.5mm。	〔外器面〕 上位に2条の界線。 界線下に文様。 〔内器面〕上位に界線。	〔器面〕白青色。 〔呉須〕青白色。 〔出土〕I郭表土
73	染付碗	中国 (景德鎮)	16C後半	〔体部～口縁部〕 内弯する。 〔器厚〕下位 3.5mm 中位 3mm 上位 2mm	〔内外器面〕 上位に界線。	〔器面〕白色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭
74	染付碗	中国 (景德鎮)	16C後半	〔口縁部〕 わずかに内弯する。 口唇部は直口气味。 〔器厚〕 ほぼ均一。2.5mm。	〔外器面〕 2条の界線下に樹木文様。 〔内器面〕 最上位に2条の界線。	〔器面〕白灰色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕II郭
75	染付皿	中国 (景德鎮)	16C後半	〔体部〕やや内弯する。 〔器厚〕下位 4.5mm 中位 3mm	〔外器面〕文様。 〔内器面〕無文。	〔器面〕外器面は白青色。 内器面は白色。 〔呉須〕薄青黒色。 〔出土〕I郭
76	染付碗	中国 (景德鎮)	16C後半	〔体部～口縁部〕 わずかであるが、中位までは内弯し、上位で外弯する。 口唇部は直口气味。 〔器厚〕下位 3mm 中位 2.5mm 上位 3mm	〔外器面〕 上位に2条の界線。 下部は細線。 界線下に文様。 〔内器面〕 上位に極薄色の2条の界線。	〔器面〕白青色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭

第9表 出土遺物観察表⑦



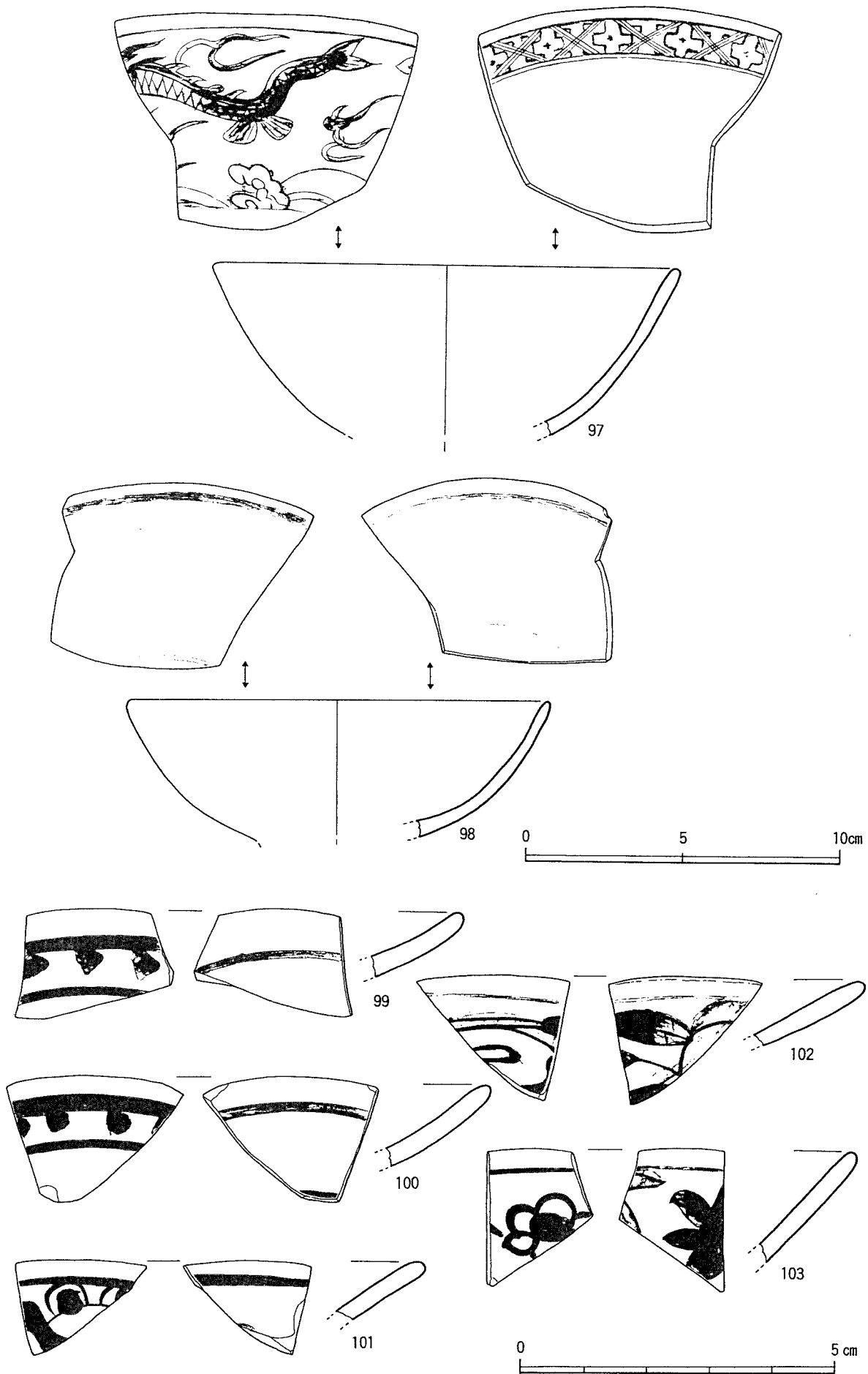
第22图 出土遺物実測図⑥

No.	器種	産地(窯名)	時代	形態の特徴	文様・手法・調整	備考
77	染付皿	中国 (福建省 広東省 系)	16C後半	〔体部～口縁部〕 やや内弯する。 〔器厚〕下位 3.5mm 中位 3.5mm 上位 3mm	〔外器面〕 肉太描きの文様。 〔内器面〕 上位に2mm幅の界線。	〔器面〕灰褐色。 針穴状の小穴。 〔呉須〕 やや薄色の青黒色。 〔出土〕I郭土坑2
78	染付皿	中国 (景德鎮)	16C中～ 末	〔器厚〕体部下位 3mm 上位 2mm 底部 2.5mm	〔外器面〕文様。 〔高台側面〕界線。 〔内器面〕 見込みの立ち上がりに 2条の界線。 全面に樹木文様。	〔器面〕白青色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭
79	染付碗	中国 (景德鎮)	16C中～ 末	〔器厚〕下位 6mm 中位 3mm	〔外器面〕 立ち上がりに界線。 界線上に曲線文様。 〔内器面〕 立ち上がりに2条の界 線。界線下に文様。	〔器面〕灰白青色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭土坑1
80	染付碗	中国 (景德鎮)	16C後半	〔器厚〕体部下位3.5mm 底部 4mm	〔内外器面〕 立ち上がりに界線。	〔器面〕白色。 高台の畳付きを除き、 全面に施釉。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭
81	三彩陶器 角型の瓶	中国	16C前後	短頸部 〔器厚〕口縁部 3.5mm 胴部 3.5mm	〔外器面〕 頸部に強い横ナデ。 上位に2mm幅の沈線。 胴部に文様。斜めの 櫛描き沈線。 〔内器面〕 頸部は丁寧なナデ。 胴部は横ナデ。	〔器面〕外器面に緑釉。 内器面頸部に黄 色釉。 〔胎土〕乳褐色。 〔出土〕I郭
82	白磁皿	中国 (福建省 広東省 系)	16C後半 ～ 17C初頭	〔体部～口縁部〕 内弯しながら伸びて、 上位で外弯する。 〔器厚〕下位 4mm 中位 3.5mm 上位 3mm	—————	〔釉色〕白(青)色。 〔器面〕 焼き切っており、光沢 がある。貫入が走る。 〔出土〕I郭
83	白磁皿	中国 (福建省 広東省 系)	16C後半 ～ 17C初頭	〔体部～口縁部〕 内弯しながら伸びて、 上位で外弯する。 〔器厚〕 均一の厚さ。4mm。	—————	〔釉色〕白(緑)色。 〔器面〕 焼き切っており、光沢 がある。 〔出土〕I郭土坑2
84	白磁皿	中国 (福建省 広東省 系)	16C後半 ～ 17C初頭	〔体部～口縁部〕 内弯する。 〔器厚〕下位 4.5mm 中位 4mm 上位 3mm	—————	〔釉色〕 外器面は白灰色。 内器面は白(青)色。 〔器面〕 外器面は細かな貫入。 内器面は太めの貫入。 〔胎土〕褐色。 〔出土〕I郭
85	白磁皿	中国 (福建省 広東省 系)	16C後半 ～ 17C初頭	〔体部～口縁部〕 内弯する。 〔器厚〕下位 3mm 中位 2.5mm 上位 2mm	—————	〔釉色〕白(灰)色。 〔器面〕 焼き切っており、光沢 がある。 〔出土〕III郭
86	白磁皿	中国 (福建省 広東省 系)	16C後半 ～ 17C初頭	〔体部～口縁部〕 内弯する。 〔器厚〕下位 3.5mm 中位 3mm 上位 2mm	—————	〔釉色〕白(青)色。 〔器面〕 焼き切っており、光沢 がある。 〔出土〕I郭
87	白磁(?)	中国 (福建省 広東省 系)	16C後半 ～ 17C初頭	〔器厚〕底部 4.5mm 体部下位 5mm 中位 3mm	—————	〔釉色〕灰白色。 〔内外器面〕貫入。 高台の畳付きに焼成時 の砂が付着。 〔出土〕I郭土坑2

第10表 出土遺物観察表⑧

No.	器種	産地(窯名)	時代	形態の特徴	文様・手法・調整	備考
88	白磁皿	中国	16C後半 ~ 17C初頭	復元口径 16cm 器高 3.2cm 復元底径 8.6cm 〔体部~口縁部〕 中途で外弯する。 口唇部は波状を呈する。内底面はやや凹の状態。 〔器厚〕底部中央 4mm 端部 5mm 高台幅 3.5mm 体部下位 6mm 屈曲部 4mm 上位 3.5mm	〔内外器面〕 体部の下位から中位まで、6mm幅の浅い沈線が放射状に広がる。	〔釉色〕濃白色。 〔器面〕 高台の畳付きとその周辺部を除き、全面に施釉。 〔出土〕I郭土坑2
89	染付碗	中国 (福建省 広東省系)	16C後半 ~ 17C初頭	〔体部〕やや内弯する。 〔器厚〕下位 5mm 中位 4mm 上位 3mm	—————	〔釉色〕白(黄)色。 〔内外器面〕貫入。 〔出土〕I郭土坑2
90	染付碗	中国 (福建省 広東省系)	16C後半 ~ 17C初頭	〔体部〕内弯する。 〔器厚〕下位 5mm 中位 4mm 上位 3mm	〔内外器面〕 灰白黒色の箇所あり (文様?)	〔釉色〕白灰黄色。 〔内外器面〕貫入。 〔出土〕I郭土坑2
91	染付碗	中国 (景德镇)	16C後半 ~ 17C初頭	〔体部~口縁部〕 やや内弯する。 〔器厚〕下位 5mm 中位 3.5mm 上位 2mm	〔外器面〕 2条の界線間に文様。 大柄の絵を描く。 〔内器面〕 上下に2条の界線。	〔器面〕白灰褐色。 高台を除き全面に施釉。 太めの貫入。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭
92	染付皿	中国 (景德镇)	16C後半 ~ 17C初頭	〔体部〕内弯する。 〔器厚〕下位 5mm 上位 4mm	〔外器面〕小葉文様。	〔器面〕白青色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭
93	染付皿	中国 (福建省 広東省系)	16C後半 ~ 17C初頭	碁筭皿。 復元口径 10.9cm 〔体部~口縁部〕 やや内弯する。 〔器厚〕下位 4.5mm 中位 5mm 上位 2mm	〔外器面〕 2.3cm幅で2条の界線。 界線間に太描きの点文様。 〔内器面〕 2cm幅で2条の界線。	〔器面〕白灰緑青色。 〔呉須〕緑青色。 〔出土〕I郭
94	染付皿	中国 (福建省 広東省系)	16C後半 ~ 17C初頭	碁筭皿。 底径 3.4cm 中央部は凸状。 〔器厚〕下位 9mm 中位 5mm 底部 6mm	〔内外器面〕 最下位に界線。	〔器面〕灰褐色。 外器面の最下位と外底面は無釉。 〔呉須〕外器面は黒灰色。 内器面は緑青色。 〔出土〕I郭土坑1
95	染付皿	中国 (景德镇)	16C後半 ~ 17C初頭	〔器厚〕底部 3.5mm	〔内器面〕鳳凰文様。	〔器面〕白青色。 〔呉須〕濃青黒色。 〔出土〕I郭土坑2
96	染付碗	中国 (福建省 広東省系)	16C後半 ~ 17C初頭	復元底径 5.5cm 〔器厚〕底部中央 6mm 端部 4.5mm 体部 5mm	〔外器面〕 下位に界線。	〔器面〕乳褐色。 見込み釉剥ぎ。 高台は無釉。 外器面に貫入。 〔呉須〕黒青色。 〔出土〕I郭土坑2
97	染付碗	中国 (景德镇)	16C後半 ~ 17C初頭	復元口径 14.7cm 〔体部~口縁部〕 やや内弯する。 〔器厚〕下位 5mm 中位 3.5mm 上位 4mm	〔外器面〕 界線間に竜文様。 〔内器面〕 上位に1.4cm幅の界線。 界線は上部1条、 下部2条。	〔器面〕白灰青色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭
98	染付皿	中国 (景德镇)	16C後半 ~ 17C初頭	復元口径 13.7cm 〔体部~口縁部〕 内弯する。 〔器厚〕下位 4.5mm 中位 4mm 上位 2.5mm	〔外器面〕 上位と下位に界線。 〔内器面〕 上位と立ち上がりに界線。 上位の界線は太め。	〔器面〕白褐桃色。 太めの貫入。 〔呉須〕青黒灰色。 〔出土〕I郭土坑2

第11表 出土遺物観察表⑨

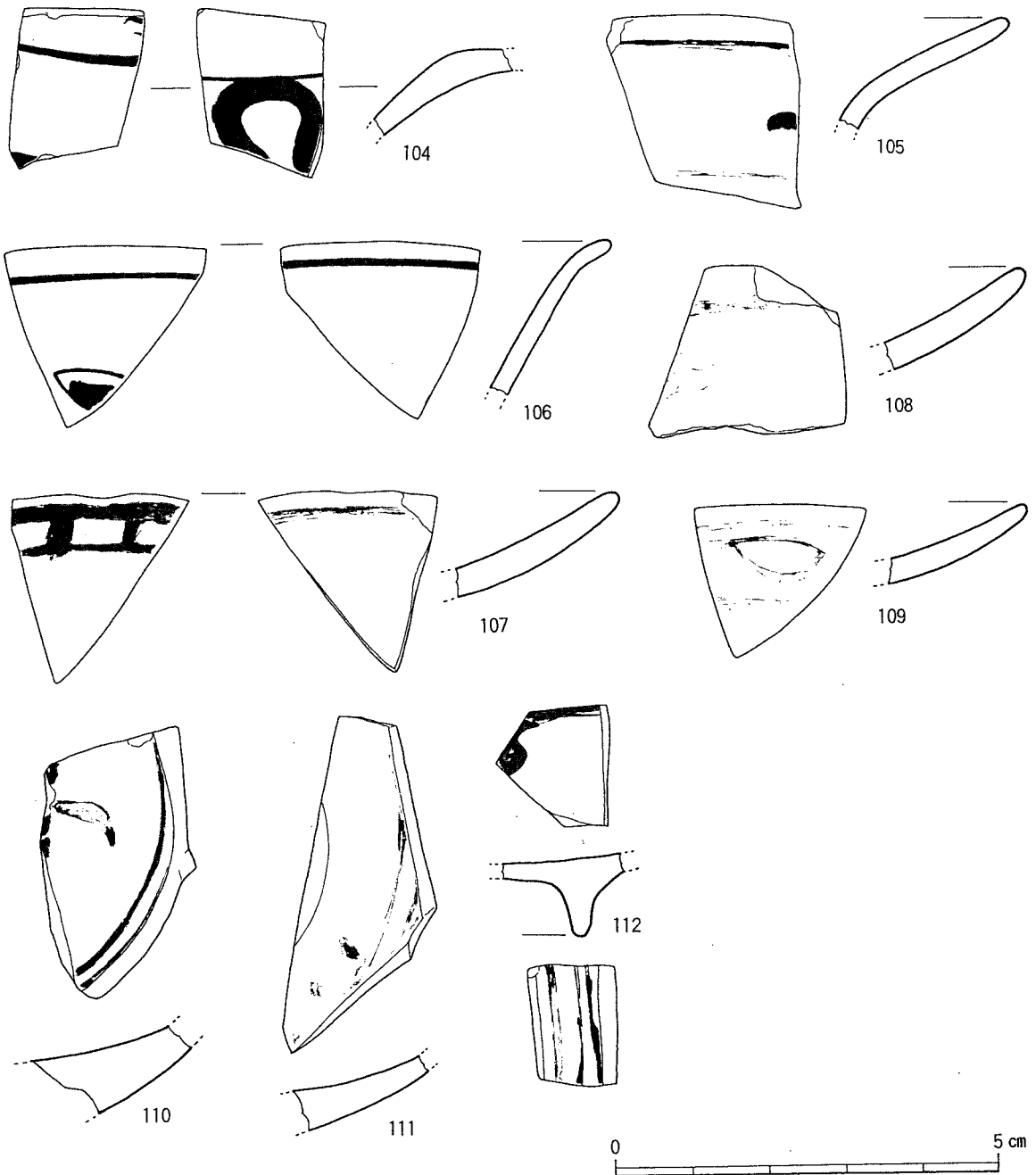


第23图 出土遺物実測図⑦

No.	器種	産地(窯名)	時代	形態の特徴	文様・手法・調整	備考
99	染付皿	中国 (景德鎮)	16C後半 ～ 17C初頭	碁筍底(?) 〔口縁部〕 わずかに内弯する。 〔器厚〕 ほぼ均一。3mm。	〔外器面〕 9mm幅の界線間に、筆 先による点描き文様。 〔内器面〕肉太の界線。	〔器面〕灰白青色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭
100	染付皿	中国 (景德鎮)	16C後半 ～ 17C初頭	碁筍底(?) 〔口縁部〕 わずかに内弯する。 〔器厚〕 ほぼ均一。3mm。	〔外器面〕 8mm幅の界線間に、筆 先による点描き文様。 〔内器面〕 上下に2条の界線。	〔器面〕白灰色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭
101	染付皿	中国 (景德鎮)	16C後半 ～ 17C初頭	〔口縁部〕 直線的に伸びる。 〔器厚〕 ほぼ均一。3mm。	〔外器面〕上位に界線。 〔内器面〕 上位に界線。 界線下に文様。	〔器面〕灰白青色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭
102	染付皿	中国 (景德鎮)	16C後半 ～ 17C初頭	〔口縁部〕 中位から上位にかけ て漸次、肥厚する。 〔器厚〕中位 2mm 上位 3mm	〔外器面〕 上位に界線。 界線下に文様。 〔内器面〕 上位に界線。 界線下に文様。	〔器面〕白青色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭表土
103	染付碗	中国 (景德鎮)	16C後半 ～ 17C初頭	〔口縁部〕 直線的に伸びる。 〔器厚〕 ほぼ均一。3mm。	〔外器面〕 上位に界線。 界線下に花卉文様。 〔内器面〕 上位に界線。 界線下に線描きによる 花卉文様。	〔器面〕白青色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭表土
104	染付皿	中国 (景德鎮)	16C後半 ～ (18C初頭)	〔体部〕 途中で肥厚し、外弯 する。 〔器厚〕下位 3mm 中位 4mm 上位 3mm	〔外器面〕界線。 〔内器面〕 界線下に曲線文様。	〔器面〕白青色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭
105	染付皿	中国 (景德鎮)	16C後半 ～ 17C初頭	〔体部～口縁部〕 外弯する。 〔器厚〕中位 3mm 上位 2mm	〔外器面〕 1.8cm幅の界線間に文 様。 〔内器面〕無文。	〔器面〕外器面は白青色。 内器面白色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭
106	染付碗	中国 (景德鎮)	16C後半 ～ 17C初頭	〔体部～口縁部〕 直線的に伸びて、上 位で外弯する。 〔器厚〕下位 2.5mm 中位 2mm 上位 2mm	〔外器面〕 屈曲部に界線。 界線下に楕円形文様 〔内器面〕 屈曲部に界線。	〔器面〕白色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭
107	染付皿	中国 (福建省 広東省 系)	16C後半 ～ 17C初頭	碁筍底。 〔体部～口縁部〕 内弯する。 口唇部に指頭痕。 〔器厚〕下位 4mm 中位 4mm 上位 3mm	〔外器面〕 上位に2条の界線。 界線内に文様。 〔内器面〕 上位に界線。	〔器面〕灰白褐色。 くすんだ感じ。 〔呉須〕薄青黒色。 〔出土〕I郭
108	染付皿	中国 (福建省 広東省 系)	16C後半 ～ 17C初頭	碁筍底。 〔体部～口縁部〕 やや内弯する。 〔器厚〕下位 3.5mm 中位 3.5mm 上位 3mm	〔外器面〕 上位に界線。文様。 〔内器面〕 上位に界線。	〔器面〕灰褐色。 〔呉須〕極薄青黒色。 〔出土〕I郭
109	染付皿	中国 (福建省 広東省 系)	16C後半 ～ 17C初頭	碁筍底。 〔体部～口縁部〕 やや内弯する。 〔器厚〕下位 3mm 中位 2.5mm 上位 1.5mm	〔外器面〕 2条の界線。 界線間に曲線文様。	〔器面〕灰白褐色。 〔呉須〕極薄青白色。 〔出土〕I郭

第12表 出土遺物観察表⑩

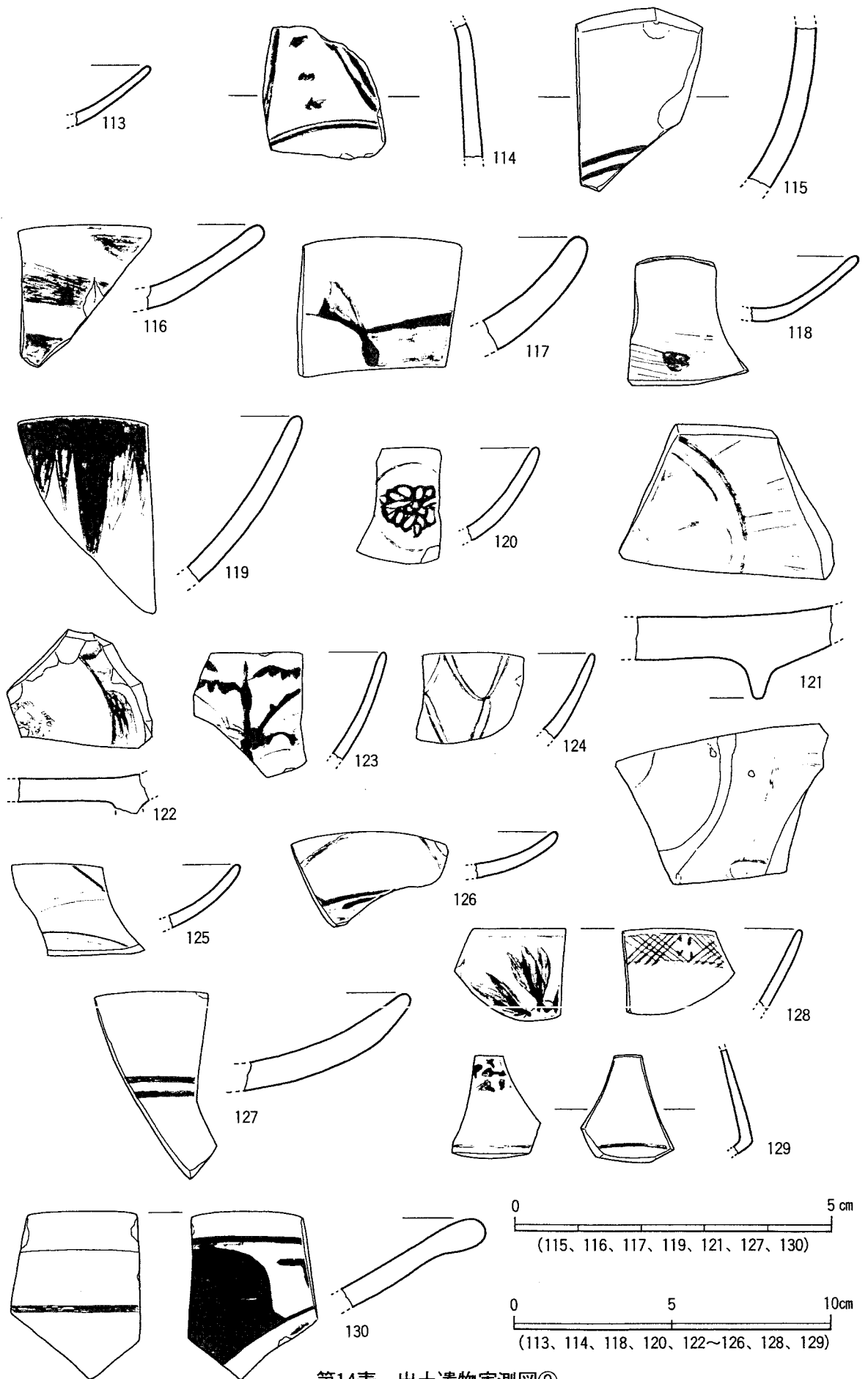




第24図 出土遺物実測図⑧

No.	器種	産地(窯名)	時代	形態の特徴	文様・手法・調整	備考
110	染付皿	中国 (福建省 広東省 系)	16C後半 ~ 17C初頭	碁笥底。 〔器厚〕底部 8mm 体部 5mm	〔内器面〕 2条の界線。文様。	〔器面〕灰白褐色。 〔呉須〕薄青黒色。 〔出土〕I郭
111	染付皿	中国 (福建省 広東省 系)	16C後半 ~ 17C初頭	碁笥底(?)。 〔器厚〕下位 5mm 中位 3.5mm	〔外器面〕界線(?) 〔内器面〕 2条の界線。界線の内 側に点描き文様。	〔器面〕白灰色。 〔呉須〕極薄青黒色。 〔出土〕I郭
112	染付皿	中国 (景德镇)	16C後半 ~ 17C初頭	〔器厚〕底部 2mm 体部 3mm 〔高台高〕7mm	〔高台側面〕 3条の界線。 〔内底面〕 鳳凰を描いたと思われ る文様。	〔器面〕白青色。 〔呉須〕濃青黒色。 〔出土〕I郭土城2

第13表 出土遺物観察表⑪



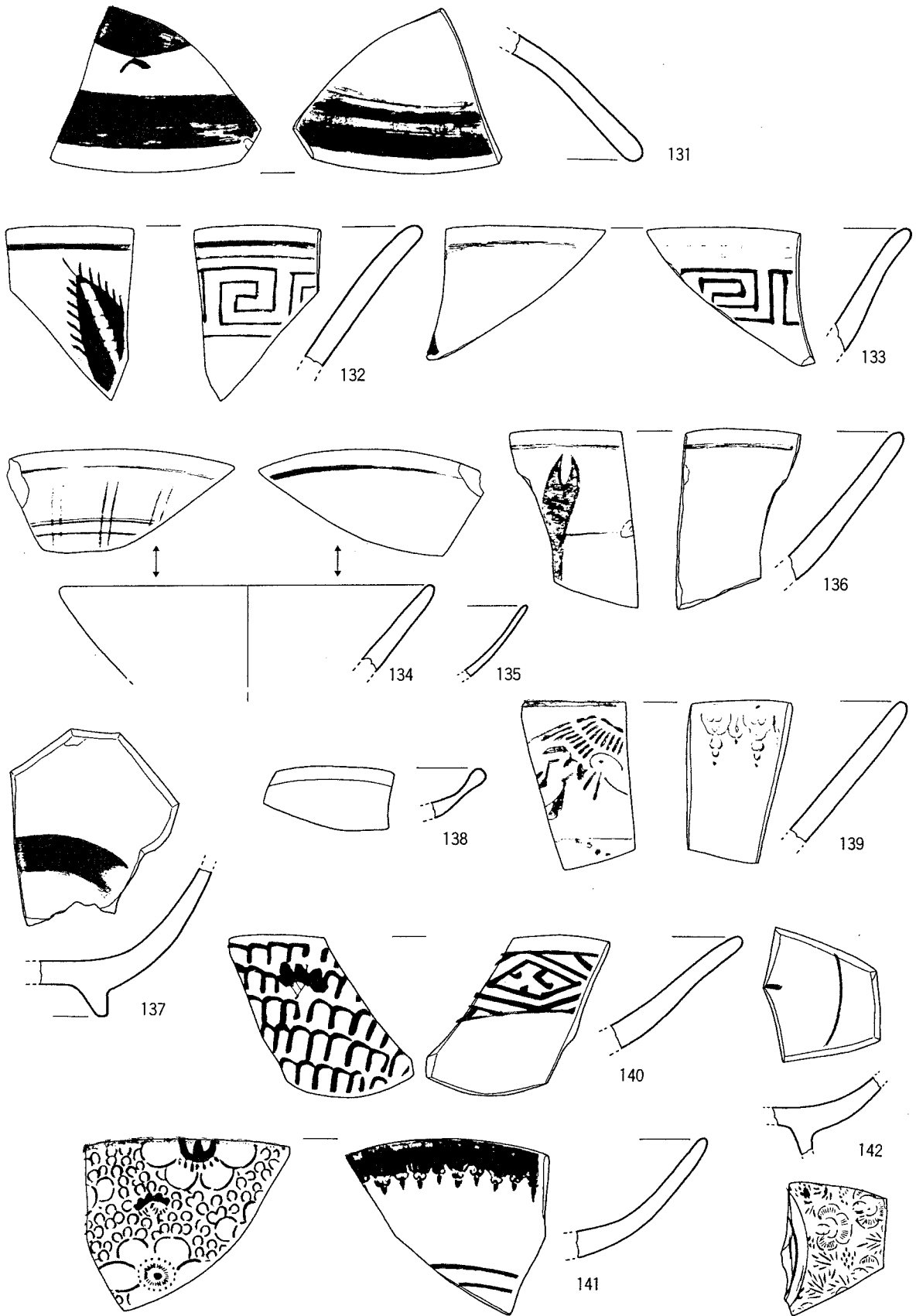
第14表 出土遺物実測図⑨

No.	器種	窯名	時代	形態の特徴	文様・手法・調整	備考
113	染付皿	肥前系	17C末～ 18C中	〔体部～口縁部〕 わずかに内湾する。 〔器厚〕下位 4mm 中位 3mm 上位 2.5mm	〔内外器面〕 指頭による縦位の沈線 で、器面は波状を呈す る。	〔器面〕濃白(黄)色。 口唇部は茶色。 〔出土〕Ⅱ郭
114	染付瓶	肥前系	17C後半	〔体部〕内湾する。 〔器厚〕下位 5mm 中位 5mm 上位 4mm	〔外器面〕 三角形を形造る線書き 文様。 内部に点描き文様。 〔内器面〕 ロクロ回転痕。	〔器面〕 外器面は灰白色、内器 面は灰茶オリブ釉が かかる。 〔呉須〕薄青黒色。 〔出土〕Ⅱ郭
115	染付碗	肥前系	17C後半	〔体部〕内湾する。 〔器厚〕下位 4mm 中位 3.5mm 上位 3mm	〔外器面〕1条の界線。 〔内器面〕 下位に2条の界線。	〔器面〕濃白(褐)色。 薄く細かな貫入。 〔呉須〕薄青黒色。 〔出土〕Ⅰ郭
116	染付皿	肥前系	17C後半 ～ 18C前半	〔口縁部〕 わずかに内湾する。 〔器厚〕下位 3.5mm 中位 3mm 上位 3mm	〔内器面〕 肉太書きの文様。	〔器面〕濃白色。 〔呉須〕薄色の青黒色。 〔出土〕Ⅱ郭
117	染付碗	肥前系	17C後半 ～ 18C初頭	〔体部～口縁部〕 やや内湾する。 〔器厚〕下位 5mm 中位 4mm 上位 3.5mm	〔内器面〕文様。	〔器面〕灰色。 〔呉須〕灰黒青色。 〔出土〕Ⅰ郭
118	染付皿	肥前系	17C末～ 18C中	〔体部～口縁部〕 内湾しながらも直線 気味に伸びる。	〔内外器面〕 指頭による縦位の凹み 箇所がある。 〔内底面〕 横位のスジ書き文様。	〔器面〕乳白色。 くすんだ感じ。口縁部 にも施釉。 〔呉須〕茶褐色。 〔出土〕Ⅰ郭
119	染付碗	肥前系	18C前半	〔体部～口縁部〕 やや内湾する。 〔器厚〕下位 3mm 中位 3mm 上位 2mm	〔外器面〕 上位から下位へ引かれ た垂下線文様。 〔内器面〕無文。	〔器面〕白色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕Ⅰ郭
120	染付碗	肥前系	18C前半 ～中	〔体部～口縁部〕 やや内湾する。 〔器厚〕下位 4.5mm 中位 4.5mm 上位 3.5mm	〔外器面〕 コンニャク印判の文様 〔内器面〕無文。	〔器面〕白(灰)色。 〔呉須〕 くすんだ感じの青灰色。 〔出土〕Ⅰ郭
121	染付碗	肥前系	18C前半 ～中	〔器厚〕底部 7mm 体部 6.5mm	〔外器面〕二重網目文様。 〔外底面〕細線文様。 〔内器面〕二重の界線か ら、内器面の上位にか けて放射状に二重の直 線が伸びる。 〔内底面〕 界線内に花卉文様。	〔器面〕 くすんだ感じの灰白色。 〔呉須〕 くすんだ感じの青灰色。 〔出土〕Ⅰ郭
122	色絵皿	肥前系	18C前半 ～中	〔器厚〕底部 中央 7mm 端部 8mm	〔内底面〕 蛇の目釉剥ぎ後、色絵 を施す。中央に文様。	〔器面〕白(青)色。 〔釉色〕赤茶色。 〔呉須〕薄色の青黒色。 〔出土〕Ⅰ郭
123	染付碗	肥前系	18C	〔体部～口縁部〕 やや内湾する。 口縁部は直口気味。 〔器厚〕下位 3.5mm 中位 4mm 上位 2.5mm	〔外器面〕 竹(?)を描いた文様。	〔器面〕白色。 〔呉須〕黒青色。 〔出土〕Ⅰ郭土塚2
124	染付碗	肥前系	18C後半	〔体部～口縁部〕 やや内湾する。 〔器厚〕下位 5mm 中位 4mm 上位 2.5mm	〔外器面〕二重網目文様。 〔内器面〕無文。	〔器面〕白灰色。 〔呉須〕薄青黒色。 〔出土〕Ⅰ郭

第14表 出土遺物観察表⑫

No.	器種	窯名	時代	形態の特徴	文様・手法・調整	備考
125	染付碗	肥前系	18C後半	〔体部～口縁部〕 内湾する。 〔器厚〕下位 3.5mm 中位 3.5mm 上位 3mm	〔外器面〕無文。 〔内器面〕 2本が一単位となった 線書き文様。	〔器面〕白(灰)色。 〔呉須〕極薄青黒色。 〔出土〕I郭
126	染付皿	肥前系	18C後半	〔体部～口縁部〕 やや内湾する。 〔器厚〕下位 5mm 中位 4mm 上位 3mm	〔外器面〕無文。 〔内器面〕線書き文様。	〔器面〕灰白色。 〔呉須〕青黒色。 〔出土〕I郭
127	染付皿	肥前系	18C後半	〔体部～口縁部〕 内湾する。 口縁部は直口気味。 〔器厚〕下位 4.5mm 中位 4.5mm 上位 3mm	〔内器面〕 立ち上がりに2条の界 線。	〔器面〕 くすんだ感じの白褐色。 〔釉色〕薄色の青黒色。 〔出土〕I郭
128	染付碗	肥前系	18C後半	〔体部～口縁部〕 やや内湾する。 口唇部は直口気味と なる。 〔器厚〕下位 4mm 中位 3.5mm 上位 2mm	〔外器面〕 上位に細い界線。 界線下に長葉文様。 〔内器面〕 上位に9.5mm幅の2条 の界線。界線間に四方 襷文様。	〔器面〕白青色。 〔呉須〕黒青色。 〔出土〕I郭 南側域
129	湯呑碗	肥前系	1780～ 1810	〔体部〕 わずかに内湾しなが ら、直線的に立ち上 がる。 〔器厚〕底部 3mm 体部下位 4.5mm 中位 3mm 上位 2mm	〔外器面〕 上位に点描き文様。 最下位に界線。 底部にも文様。 〔内器面〕 最下位に界線。	〔器面〕白灰色。 〔呉須〕黒青色。 〔出土〕I郭
130	染付皿	肥前系	18C後半 ～ 19C前半	〔体部～口縁部〕 内器面側は直線的に 伸びて口唇部で外側 へ肥厚する。結果と して外器面側が外湾 することになる。 〔器厚〕下位 3mm 中位 3.5mm 上位 4.5mm	〔外器面〕中位に界線。 〔内器面〕 上位に界線。 界線下に文様。	〔器面〕白灰色。 〔呉須〕濃青黒色。 〔出土〕I郭
131	染付碗 の蓋	肥前系	1820～60	〔体部～口縁部〕 わずかに内湾する。 〔器厚〕下位 3mm 中位 2.5mm 上位 3mm	〔外器面〕 上位に1cm幅の界線。 界線下に文様。 〔内器面〕 上位に9mm幅の界線。	〔器面〕白色。 〔呉須〕濃青黒色。 〔出土〕I郭
132	染付碗	肥前系	1820～60	〔体部～口縁部〕 やや内湾する。 〔器厚〕下位 3mm 中位 3mm 上位 2.5mm	〔外器面〕 上位に界線。 界線下に葉状文様。 〔内器面〕2条の界線間 (1.5cm)に雷文。	〔器面〕白色。 〔呉須〕濃青黒色。 雷文はやや薄色。 〔出土〕I郭
133	染付碗	肥前系	1820～60	〔体部～口縁部〕 わずかに外湾する。 〔器厚〕下位 3mm 中位 3mm 上位 2.5mm	〔外器面〕 上位に界線。 界線下に文様(?) 〔内器面〕雷文。	〔器面〕白色。 〔呉須〕 界線は極薄色の青色。 文様は青黒色。 〔出土〕I郭
134	染付碗	肥前系	1820～60	〔体部～口縁部〕 直口気味。 〔器厚〕 ほぼ均一。4mm。	〔外器面〕格子文様。 〔内器面〕 上位に3mm幅の界線。 重ね描きされている。	〔器面〕白灰色。 〔呉須〕灰緑色。 〔出土〕I郭
135	色絵小杯	肥前系	19C後半	〔体部～口縁部〕 わずかに内湾する。 〔器厚〕下位 2mm 中位 1.5mm 上位 2mm		〔器面〕白色。 〔出土〕I郭

第15表 出土遺物観察表⑬



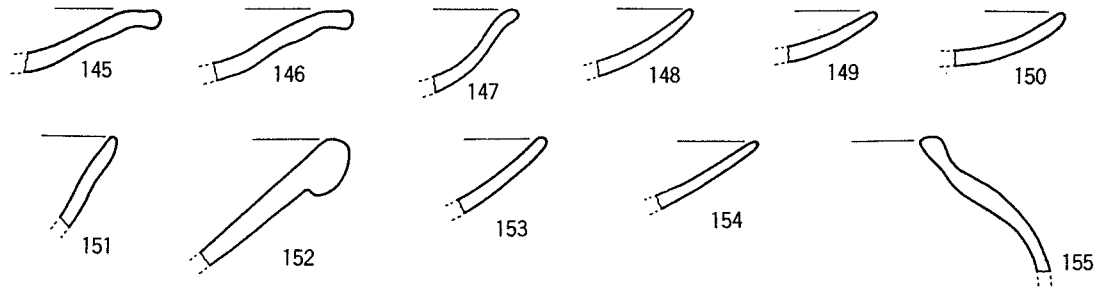
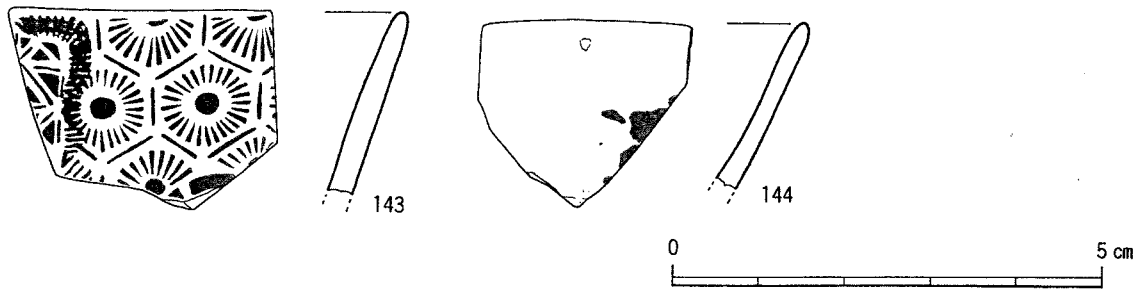
0 5 cm (131、132、133、136、137、139、140、141)

0 5 10 cm (134、135、138、142)

第26图 出土遺物実測图⑩

No.	器種	窯名	時代	形態の特徴	文様・手法・調整	備考
136	染付碗	肥前系	19C後半	〔体部～口縁部〕 わずかに内弯する。 〔器厚〕下位 3.5mm 中位 3.3mm	〔外器面〕 上位に界線。 界線下に文様。 〔内器面〕上位に界線。	〔器面〕白(灰)色。 〔呉須〕やや薄い青黒色。 〔出土〕I郭
137	色絵小杯	肥前系	19C後半	〔器厚〕下位 4.5mm 中位 3mm 上位 2.5mm	〔内器面〕 立ち上がりに5.5mm幅 の界線。 上位にも薄色の界線。	〔器面〕白色。 〔釉色〕 黄金色に茶色が混入。 〔出土〕I郭
138	青磁皿	瀬戸 美濃系	明治	〔体部～口縁部〕 内弯する。 口縁部は玉縁状を呈 する。 〔器厚〕下位 5mm 中位 2mm 上位 5mm	〔内外器面〕無文。	〔釉色〕クロム緑色。 クロム酸鉛とベルリン 青との混合物により鮮 麗な緑色が生じている。 〔器面〕焼き切っており、 光沢がある。 〔出土〕I郭
139	染付碗	肥前系	明治～ 大正	〔体部～口縁部〕 直線的に伸びる。 〔器厚〕下位 3mm 中位 3mm 上位 2.5mm	〔内外器面〕 型紙刷りの文様。 外器面は鳥(?)、内器 面は上位に逆三角形に の垂下文様。	〔器面〕 くすんだ感じの白色。 〔釉色〕薄色の青黒色。 〔出土〕II郭
140	染付碗	肥前系	明治	〔体部～口縁部〕 漸次、先細りとなり、 中途より外弯する。 〔器厚〕下位 4mm 中位 3mm 上位 2mm	〔外器面〕 小さなカギ型文様が器 面一杯に描かれている 〔内器面〕 9mm幅の界線間に菱形 文様。	〔器面〕白色。 〔呉須〕濃青黒色。 〔出土〕I郭
141	染付碗	肥前系	明治～ 大正	〔体部～口縁部〕 やや内弯する。 〔器厚〕下位 4.5mm 中位 2mm 上位 2mm	〔外器面〕 型紙刷りによる文様。 花卉を中心にピツシリ と文様が描かれている。 〔内器面〕 上位に逆三角形の垂下 文様が界線状に巡る。 下位に2条の界線。	〔器面〕白(青)色。 〔呉須〕濃青黒色。 〔出土〕I郭
142	染付碗	肥前系	明治～ 大正	〔器厚〕下位 7mm 中位 5.5mm 上位 3.5mm	〔外器面〕 型紙刷りによる文様。 花卉と松の葉(?)を描 く。最下位に1条、高 台に2条の界線が巡る。 〔内底面〕線書き文様。	〔器面〕白(青)色。 〔呉須〕濃青黒色。 〔出土〕I郭
143	染付碗	肥前系	明治～ 大正	〔体部～口縁部〕 直線的に伸びる。 〔器厚〕下位 3mm 中位 2.5mm 上位 2.5mm	〔外器面〕 型紙刷りによる文様。 器面一杯に亀甲文様。	〔器面〕白(青)色。 〔呉須〕濃青黒色。 〔出土〕I郭
144	染付碗	肥前系	明治～ 大正	〔体部～口縁部〕 やや内弯する。 〔器厚〕下位 3mm 中位 2.5mm 上位 2.5mm	〔外器面〕 型紙刷りによる文様。	〔器面〕白色。 〔呉須〕濃青黒色。 〔出土〕I郭
145	溝ふち皿 (陶器)	肥前系	1610～ 1630	〔体部～口縁部〕 やや内弯気味に伸び て上位で外弯する。 〔器厚〕下位 4.5mm 中位 3mm 上位 4mm	〔外器面〕 ロクロ回転時の指頭に よって形造られた凹線 が巡る。	〔器面〕 灰釉。光沢がある。 〔胎土〕褐灰色。 〔出土〕II郭
146	溝ふち皿 (陶器)	肥前系	1610～ 1630	145と同一個体の可 能性がある。	—————	〔出土〕II郭
147	陶器	肥前系	17C中 ～末	〔体部～口縁部〕 内弯しながら上位で やや外弯する。 〔器厚〕下位 4mm 中位 3mm 上位 2.5mm	—————	〔器面〕褐白色。 内器面に薄緑青色の釉 がかかる。 細かな貫入が走る。 〔出土〕I郭

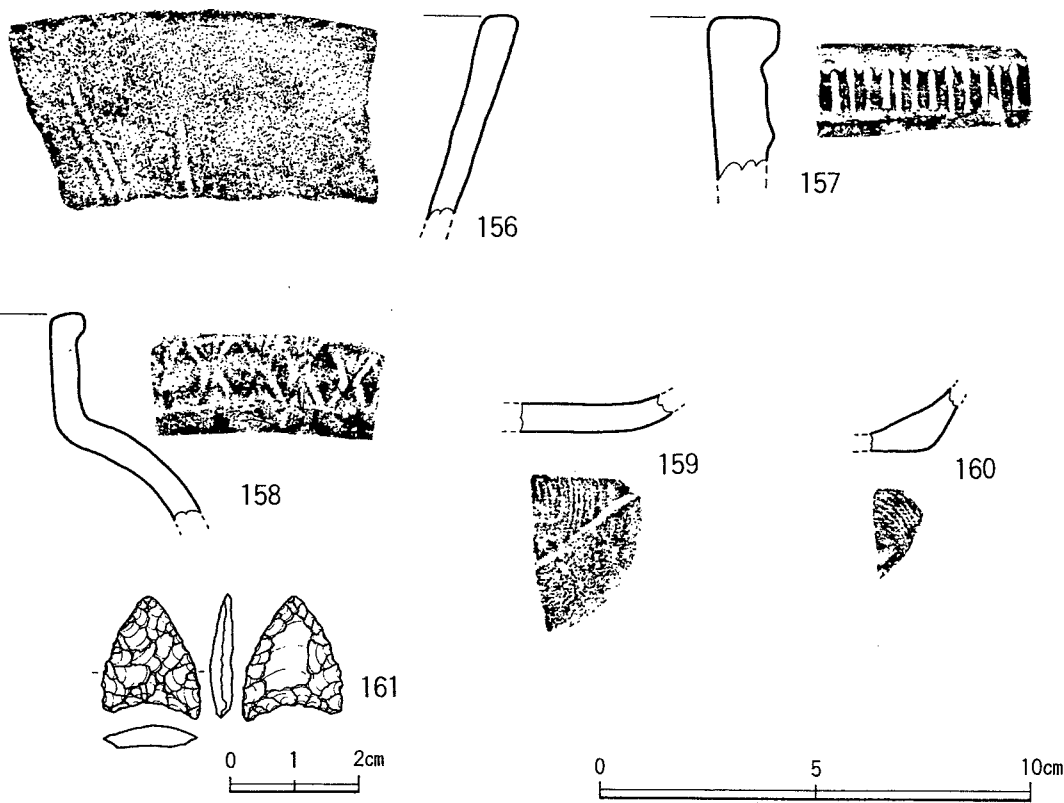
第16表 出土遺物観察表⑭



第27図 出土遺物実測図①

No.	器種	窯名	時代	形態の特徴	文様・手法・調整	備考
148	陶器皿	肥前 (内野山窯)	17C末～ 18C前半	〔体部～口縁部〕 わずかに内弯する。 最上位に3mm幅の沈線。 〔器厚〕下位 3.5mm 中位 3mm 上位 2.5mm	—————	〔器面〕 褐灰色。 〔釉色〕 青緑色。 外器面に施釉。 〔出土〕 I郭
149	陶器皿	肥前系 (内野山窯)	17C～ 18C前半	〔体部～口縁部〕 やや内弯する。 〔器厚〕下位 4.5mm 中位 3.5mm 上位 3mm	—————	〔器面〕 灰色。 〔釉色〕 青緑色。 〔出土〕 I郭
150	陶器皿	肥前(?)	17C後半～ 18C前半	〔体部～口縁部〕 やや内弯する。 〔器厚〕下位 3.5mm 中位 3mm 上位 2.5mm	〔内器面〕 文様の一部が認めら れている。	〔器面〕 外器面は灰色。 内器面は茶褐色。 〔釉色〕 青緑色。 〔出土〕 II郭
151	鉢(?)	天草(?)	18C～ 19C	〔体部～口縁部〕 内弯しながら伸びて、 上位でやや外弯する。 〔器厚〕下位 3mm 中位 4mm 上位 3mm	—————	〔器面〕 茶褐(黄)色。 〔釉色〕 なまこ色。 〔出土〕 II郭
152	播鉢	肥前系	18C～ 19C	玉縁口縁。 〔器厚〕下位 4mm 中位 4.5mm 上位 10mm	—————	〔器面〕 茶小豆色。 〔出土〕 II郭
153	陶器	九州産	18C～ 19前半	〔体部～口縁部〕 わずかに内弯する。 〔器厚〕下位 4mm 上位 3mm	—————	〔器面〕 灰白(褐)色。 〔出土〕 I郭
154	碗 (陶器)	肥前 (内野山窯)	17C末～ 18C前半	〔体部～口縁部〕 わずかに内弯する。 〔器厚〕下位 4mm 中位 3.5mm 上位 2mm	—————	〔器面〕 褐色。 〔釉色〕 外器面に青緑色と黄緑 色の釉。 〔出土〕 I郭
155	土瓶	在地(?)	19C	〔器厚〕胴部下位 3mm 上位 3.5mm 頸部 5mm	—————	〔器面〕 灰小豆色。 〔釉色〕 アメ釉(黒色混り) 〔出土〕 I郭

第17表 出土遺物観察表⑮



[実測・製図 村崎孝宏]

第28図 出土遺物実測図⑫

No.	器種	窯名	時代	形態の特徴	文様・手法・調整	備考
156	播鉢	—	—	〔体部～口縁部〕 直線的に伸びる。 下位から上位にかけて 漸次、肥厚する。 〔器厚〕下位 6mm 中位 7mm 上位 8mm	〔内外器面〕 ローリングが激しい。 〔内器面〕 磨滅した3条(1単 位内での条線数)の 条線を確認できる。	〔胎土〕白色粒が混入。 〔焼成〕やや甘い。 〔色調〕 外器面は灰黒褐色。 内器面は黒灰褐色。
157	火舎	—	—	〔口縁部〕 内器面側は直線的に伸 びる。 〔口唇部〕扁平。 〔器厚〕下位 11mm 中位 13mm 上位 16mm	〔外器面〕 1.3cm幅の沈線内に 縦長の格子文様。凸 面は3mm幅。凹面は2 mm幅。 〔内器面〕 強い横ナデ。	〔胎土〕精良。 〔焼成〕非常に堅緻。 〔色調〕灰白色。
158	土師系 の小壺	—	—	〔頸部〕 やや内傾しながら直線 的に伸びる。 〔器厚〕胴部 6～7mm 頸部 6.5mm 口唇部 8mm	〔内外器面〕 ローリングが激しい。 〔外器面〕 頸部に縦長で菱形の スタンプ。 〔内器面〕 指頭痕が目立つ。	〔胎土〕鉍物が混入。 〔焼成〕普通。 〔色調〕外器面は褐白色。 内器面は灰白色。 〔出土〕I 郭土塚2。
159	土師器	—	—	平底。 〔器厚〕底部 6～7mm 体部 6mm	〔内外器面〕 ローリングが激しい。 〔外底面〕糸切り痕。	〔胎土〕精良。 〔焼成〕やや甘い。 〔色調〕乳褐色。
160	土師器	—	—	小皿。 〔器厚〕底部中央 4mm 外底端 9mm 体部 4mm	〔内外器面〕 ローリングを受けて いる。 〔外底面〕糸切り痕。	〔胎土〕精良。 〔焼成〕やや甘い。 〔色調〕乳白褐色。
161	石鏃	—	—	〔石材〕チャート 長さ 1.9cm 幅 1.5cm 厚さ 0.3cm 重さ 0.9g		〔出土〕I 郭。

第18表 出土遺物観察表⑬



染

白磁

青磁

14 C

後半

15 C

初

中

末

16 C

初

中

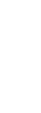
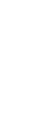
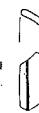
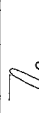
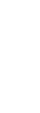
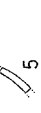
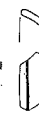
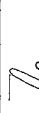
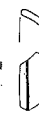
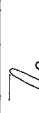
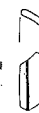
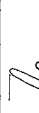
末

17 C

初

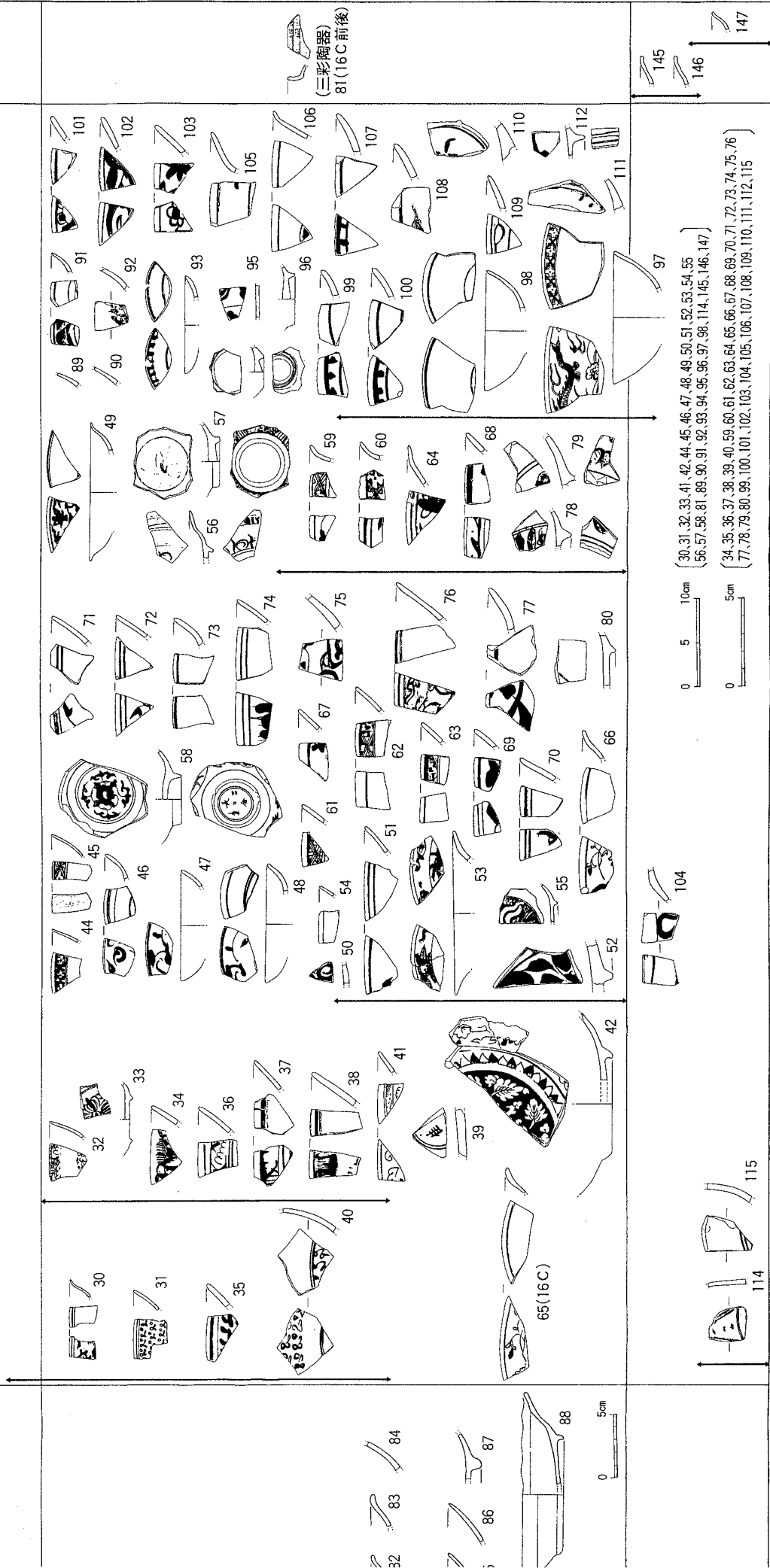
中

末



第19表 三川城関連遺物年代別分類表





第19表 三川城関連遺物年代別分類表



	年 代	染 付	青 磁	白 磁	陶 器	三彩陶器
三 川	14C 後半～15C		●●●●●			
	15C 後半		●●●●			
	15C 後半～16C 中		●●●●●●●●●● ●●	●●●●●		
	15C 後半～16C		●●●			
	15C 末～16C 中	●●●●				
	16C	●				●
	16C 前半～中	●●●●●●●●				
	16C 中～末	●●●●●●●●				
	16C 後半	●●●●●●●●●● ●●●●●●●●●● ●●●●●●●●			●	
	16C 後半～17C 初頭	●●●●●●●●●● ●●●●●●●●●● ●●●			●●●●●●●●	
時 代	16C 後半～18C 初頭	●				
	17C 前半				●●	
	17C 中～末				●	
	17C 後半	●●				
	17C～18C 前半				●	
廃 城	17C 後半～18C 初頭	●				
	17C 後半～18C 前半	●			●	
	17C 末～18C 前半				●●	
	17C 末～18C 中	●●				
	18C	●				
	18C 前半	●				
	18C 前半～中	●●●				
	18C 後半	●●●●●				
	18C～19C				●●	
	18C～19C 前半				●	
後 城	18C 末～19C 初頭	●				
	18C 後半～19C 前半	●				
	19C 前半～19C 中	●●●●				
	19C				●	
	19C 後半	●●●				
	明治	●	●			
	明治～大正	●●●●●				

●は1個体を表す。

第20表 三川城跡出土遺物年代別分類表

## 第V章 ま と め

[1] 内野川には、上流域から下流域にかけて、城木場城跡、三川城跡、下内野城跡が順に並んでいる。その間の距離はわずかに3.4kmで、中間位置にある三川城跡からは両城を望めるほどの近さである。

この中で、三川城跡のみが文献未記載の城で、慶安四年の「肥後国 江戸江差上候帳之扣」からも欠落している。しかし、規模の点では他の2城を凌ぎ、景観的に最も城跡らしい様相を呈しているのが三川城跡である。この辺のところが、なんとも不可解である。

[2] 三川城跡は大規模造りの丘城で、尾根筋の主軸方位は大方N14° Wにある。鞍部の南端箇所には堀切があり、全長319mを測る。この中で上面域での平場区画は大きく3つに分かれているが、中心部分は北端域に位置するI郭である。高台状の小山をなしており、どこから見ても非常に目立つ地形である。

城地の条件として特に山城の場合は「山容」に大きく左右されているように思われる。県内でも近年の調査事例から、中世城も近世城と同様に象徴的な存在であった事が明らかになりつつある。築城に際しては、威厳を有して、さらに遠地からでも目立つ地形が城地に求められたものと思われる。当然の事ながら似かよった地形の丘城の場合も山城と同様な事が考えられる。五和町に限っていえば、前年度に調査した下内野城跡も遠目に良く目立ち、内野川の大蛇行内に治まる城跡地は落ち着いた雰囲気がある。

したがって、三川城跡の場合、城としての機能が集中するのは、景観的に突出したI郭であろうという事は容易に推察される。現在、II郭は一部が墓地となり、III郭にも配水施設があるため、はっきりとした事は言えないが、周辺部における崖面の整形状態から見てもI郭とは明らかに差異がある。

[3] I郭の平場から検出された2棟の建物跡は、いわゆる臨戦体制の中における急拵のものではなかった。年単位の幅を持つ掘立柱建物が存在した可能性が高く、それを裏付ける様に建物跡1に至っては、縁部に庇が巡っていた。これらの建物は規模は小さいものの主殿と副殿といった感じが強く、おそらく三川城の対面所であろう。

一方で、建物区域の段下り部分から検出された土壇の解明は困難である。I郭の北端部にあたる区画を掘り窪めたもので、前述のように建物区域とは明確に仕切られた状況にある。埋土に焼土が混入していた事から、烽火穴の可能性が最も高い。しかし、余りに建物に近すぎるといふ矛盾点がある。一方で埋土に多くの遺物(茶碗類)が混入していた事から、単なるゴミ捨て穴とも思えるが、I郭での限られた平場を有効的に使用する為にも、こういう部類のものが建物近くに掘られたとは考えにくい。なお、調査区を見る限りにおいて遺構は重複しておらず、

建て替えの痕跡は無かった。さらに建物が建て混んでいる様な状況に無い事も判明した。平場の中でも限定された箇所に建物が存在している様である。

〔4〕 三川城に関連ある出土遺物は14世紀後半～15世紀代の青磁を上限とし、下限の遺物は16世紀後半～17世紀初頭の染付である。この中には16世紀前後の三彩陶器が含まれている。希少遺物で、角型の瓶と思われる。出土遺物の大方のものは輸入陶磁器の青磁・白磁・染付で、染付の出土量が最も多かった。不思議な事に中世城跡の出土遺物で、最もポピュラーな糸切り土師皿・杯が数片の出土にとどまった事である。それも細片である。城時代に見合う播鉢・石臼等も出土しなかった。この現象は建物の性格と関連があるのであろうか。対面所とすれば輸入陶磁器は儀式用として使用されたと考えた方が最も妥当であろう。その為に日用雑器の糸切り土師器は不必要だったのであろうか。しかし、<sup>とのおい</sup>宿直をした当番もいたはずで、灯明皿は使用されたはずである。土師器を含め、もう少し生活必需品が出土してよさそうなものである。現に比高差200mの轟嶽城跡（玉名郡南関町）の山頂からは、それらのものがセットで出土している。なお、出土遺物が廃城後も現代に至るまで継続的に出土しているのも特色である。この事は廃城後も何らかの形で連続して城跡地が使用されていた事を示している。I郭の祇園社と秋葉社に深く関連するものと思われるが、天草郡内では町内の下内野城跡にも河浦町の下田城跡にも似たような傾向があり、興味ある真実である。

## 結 語

〔1〕 三川城の実年代は14世紀後半を上限として、17世紀初頭を下限とする中世城である。I郭の建物の重複は見られないが、幅広い年代に渡って使用されたとしか考えざるを得ない。隣接地の下内野城とは戦国時代の末期に並存した事が今回の調査で判明した。少なくともこの時期において2つの城は同時代に存在したのである。

〔2〕 三川城跡のI郭は俗にいう小山で、下内野城跡は丘陵を切り開いた畑地である。今回、三川城跡から多くの遺物が出土した事はこの土地利用の差異にも関係があるのではとの見方が出てきた。前年度に調査した下内野城跡はかつてミカン畑に開墾されて、その後、畑地になった経緯がある。出土遺物は極端に少なかったが、この事は後世の土地利用にも関連があるのではないかと思う。その点、三川城跡は山で、保存状況が極めて良好であったからと言える。出土遺物の量を推し測る場合は後世の土地利用も考慮に入れるべきであろう。さらに表土剥ぎに重機を導入しなかった事も幸いした。薄層の表土に混じる細片の遺物を丹念に採集できたからである。中世城跡の調査においては表土剥ぎの段階から細心の注意を払う必要がある事を今回の調査で再認識した。

- 〔参考文献〕 『轟嶽城跡』 南関町文化財調査報告第2集 南関町教育委員会 1995年  
『下内野城跡』 五和町史資料編（その2） 五和町教育委員会 1995年  
『下田城跡』 河浦町文化財調査報告第3集 河浦町教育委員会 1993年

鶴田倉造（町史編纂委員長）

## 1. 当地関連史料

当地についての最古の史料は、寺沢期のものとされる『肥後国絵図』（永青文庫蔵）に「内野村、一六三八石余」の記録が出てくるのが最初である。さらに元和三年(1617)の『マテウス・デ・コウロスの証言文書』に内野村のキリシタン信者代表として大長嶋左兵衛、安当仁(アントニオ)、さゝ原与兵衛、備前天(ピセンチ)、飛瀬(鳥羽瀬)外記、伊那所(イナショ)等が署名捺印している。城内墓地にも後世のものではあるが、笹原姓の墓碑があり関連が注目される。これらの史料から近世初期、少なくとも寺沢期までは、当地の行政地名は「内野村」であったことがわかる。

しかし、『秀島家文書』によれば「寺沢志摩守御代御検地、元和二年、御領分高左の通」の中に「一、高四万石、肥後国天草郡」または「四万石、天草郡、御蔵納」とあるが下部組織については、わからない。

『松浦記集成』には天草の郡代、代官、庄屋について「畑参河佐源渡、二千石、畑城に居、天草四萬石郡代、右郡代の下に代官四人、知行八十石宛、天草住、石川宗左衛門通秀・坂本体四郎相松・村上久次郎方・江口又一茂和、大庄屋四人、(「石抜け」)原太郎左衛門・山上九一郎・林源一郎・山本次郎助・脇庄屋百四人」等とある。これによれば当時、天草には、郡代の下に代官四人、大庄屋四人、脇庄屋百四人があったことになるが、寺沢期のものであっても年記がないので何時の時点のものかわからない。

『天草近代年譜』では、天草が十組八十六ヶ村になったのは寛永十八年(1641)とされ、この八十六ヶ村の一村が前記の「上野原村」であることは確かである。従って行政地名として「上野原村」がでてくるのは元和三年から寛永十八年迄の間と考えられる。

## 2. 城主考

城下の岩崎正高氏宅には、城主の遺物と伝えられる<sup>よろいびつ</sup>鎧櫃(注1)等が伝存されており、城主は「松下姓」または「松平姓」であったとされる。一説には「松平主殿頭」であったとするものもあるが、これは享保二十年～寛延三年(1735～50)天草を兼帯支配した島原城主の松平主殿頭との混同も考えられる。この事について、城内の墓地(2)に「打越・松下吉左衛門」記名の墓碑がある点は注目される。

また、岩崎正高氏の話によれば、明治時代に城河原地区の岩崎氏と城下地区の松下氏が姓を交換したという言い伝えもあるという。これによれば、岩崎家は本来、松下姓という事になる。



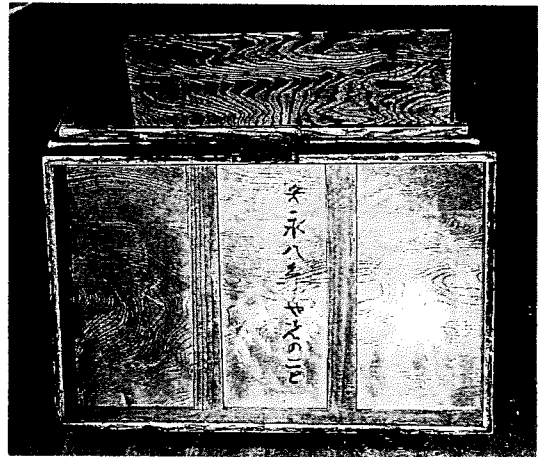
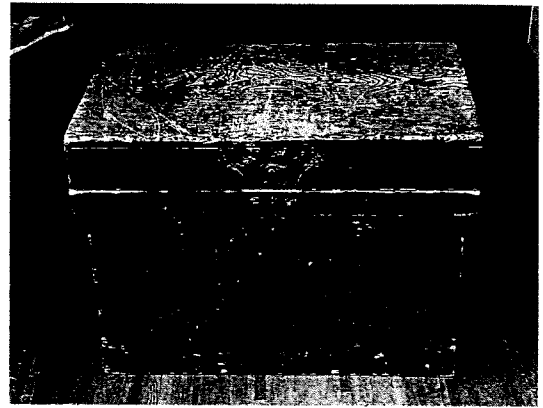
### 3. 遺物・遺跡

城下の岩崎正高氏宅に城主の遺物とされる鎧櫃(注1)等が存在する事はすでに述べた。他に中世遺物と考えられるものは、城内の墓地(2)に1個の五輪塔火輪(注2)と凝灰岩製平型伏碑数基がある。また、内野川を隔てた対岸の文殊庵(写真図版15)にも数基の五輪塔残欠がある。この文殊庵は開庵の時期は不明であるが、佐伊津阿弥陀寺末庵で真言宗であった。阿弥陀寺は佐伊津城主の菩提寺であったとされていて、その点、当城と佐伊津との関連も推察される。中世末期、佐伊津は志岐氏の領域であり、当地も志岐氏の領域であったと考えられることから、両城は当然関係があったと思われる。

#### (注1) 鎧櫃

岩崎正高氏宅に伝わる鎧櫃は、木製で、横幅74cm、縦幅46.5cm、高さ44cmを測る。

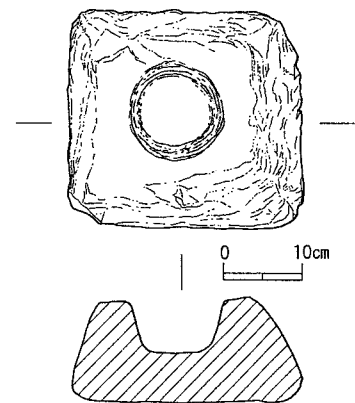
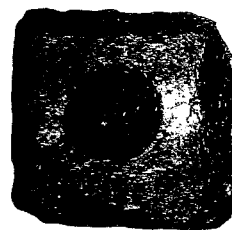
上蓋の内側には「安永八年やえのこと」との墨書きがある。内容からして「やえ」という娘さんが1779年(安永8年)に嫁入りした際の用具入れではないかと思われる。しかし、箱の作りや留め金具が嫁入り道具としてはあまりに立派すぎるきらいがある。この事から、もしそうだとした場合、伝世品としての鎧櫃の転用ではないか考える。岩崎家では意味不明のまま、この木箱に女物の衣類を収納する事を言い伝えにより代々禁じてきたという。



#### (注2) 五輪塔の火輪

三川城跡のⅢ郭西下にある墓地(2)から表採された小型の五輪塔である。凝灰岩製の火輪で、大きさは29cm×28.5cm×12.5cm、中心の穴は直径12.5cm、深さ6.5cmを測る。

三川城跡周辺に中世墳墓の存在を示唆する遺物である。



〔右側面〕

渡辺九郎兵衛子立之

〔正面〕

享保三戊戌年

坂一霜元信士靈位  
十月

〔正面〕

元禄八亥天

無為釋妙閑  
十二月三日

〔正面〕

出征從軍中病死

渡辺喜六倅庄作事  
明治廿八年旧五月廿日

〔左側面〕

釋忠恭信士

釋齊圓信士

〔正面〕

享保十六辛亥

釋善淨禪定門  
三月十六日

他に渡辺家・森田家・金井家の  
集合墓あり。

### 墓地(2)

〔所在地〕

五和町大字上野原字下野原

三三一―

笹原作三名義墓地 四一㎡

〔正面〕

明和七寅年

梅心妙香信女  
正月□□四日

〔正面〕

天明七年

秋雪信士  
七月十四日

〔正面〕

宝永五戊子天

為妙柳善提  
閏五月十四日

〔右側面〕

元禄四未天

隻悦信士

〔左側面〕

四月 五日

〔正面〕

花妙月信女

〔左側面〕  
文化四卯正月朔日

〔右側面〕

作造母

〔正面〕

心月了性信女

〔左側面〕

慶応三年八月  
吉日

〔右側面〕

明治十八酉年

二月笹原久平

〔正面〕  
最雲義勝信士

〔右側面〕

明治十四巳年八月  
廿六日

〔正面〕  
南山詳壽信女

〔左側面〕  
作造妻

〔正面〕

元文□□□□  
妙專禪定尼  
七月初七日

〔正面〕

享保五庚子年  
為春宵童子  
正月初九日

〔正面〕

不明(剥離)

〔左側面〕

施主 打越  
松下吉左衛門

〔右側面〕

明治廿九年  
旧三月廿八日

〔正面〕

契  
空□大雄活道信士  
笹原作造

〔左側面〕

〔正面〕

明和六巳丑年  
露岸知心信士  
五月□□日

〔右側面〕

弘化四未年五月十日  
久右衛門倅

〔正面〕

知誓童子  
自休信士

〔右側面〕

寛政六年寅正月八日  
久右衛門

〔正面〕

梅春信士

〔右側面〕

寛政五癸丑十月八日  
〔正面〕  
春月重光信女

〔左側面〕

弥市母

〔正面〕

天明六丙午年  
寒庭江月信女  
閏正月初二日

〔正面〕

安永五丙申年  
木原良雪信士

〔正面〕

外に五輪塔火輪1基、  
凝灰岩製平型伏碑3基あり。

\*墓碑銘調査と結果公表については、各御遺族の了解を得て行った。(鶴田・町史編集室)

墓碑銘調査〔鶴田倉造〕

墓地(1)

〔所在地〕

五和町大字上野原字下野原

三四七及び三四八一

金井梅造 他5名墓地

金井市平

渡辺嘉六 名義墓地

渡辺藤吉

〔右側面〕

明治三十六年旧四月廿三日

金井保七 五十四才

梅造 養父貞次郎父

〔正面〕

至孝軒大岳露明居士

善孝軒智室正明大姉

〔左側面〕

昭和三年旧四月廿五日

金井保七妻梅造養母

ユキ事七十四才

〔正面〕

釈連満信士

〔左側面〕

明治六酉年

九月廿一日

〔正面〕

明治二十年七月八日

法名釈妙證信女

金井傳吉娘

〔正面〕

文政三辰九月十九日

法名釋秋道

世名 平吉

〔正面〕

安永六酉天

飯一 釈智海塔

八月十八日

〔正面〕

文政□天

釋□□回信士

五月廿六日

〔正面〕

安永四未

釋妙秀信士

十月廿八日

〔右側面〕

天保二卯三月十九日

〔正面〕

法名釋妙現

〔左側面〕

富右衛門

〔正面〕

安永二巳天

釈尼□月塔

三月九日

〔正面〕

法名釋浄本

天明元丑正月八日

世名 権平

〔右側面〕

明治四年辛未

十月十六日

〔正面〕

釈尼妙諦

〔左側面〕

渡辺喜助

八十六才

〔右側面〕

嘉永二酉

十月十九日

〔正面〕

法号釋常樂信士

〔左側面〕

熊藏父

〔右側面〕

明治廿四卯年

〔正面〕

釋尼慈寿墓

〔左側面〕

四月八日

金井保七母  
ツル七十九才

〔正面〕

明和元

釈浄誓信士

十二月廿七日

〔正面〕

天保十亥五月廿七日

釋妙誠信女

卯助

〔右側面〕

明治三十八年

八月八日没

〔正面〕

釋德勝信士位

〔左側面〕

金井保七 倅

貞次郎

行年十七才

〔正面〕

享和三亥曆

釋道元信士

六月八日

〔左側面〕

俗名喜右衛門

〔正面〕

釋西順禪定門

〔左側面〕

俗名渡部九郎兵衛事

(古形式)

〔右側面〕

天保七丙申年

〔正面〕

法名釋浄閑

〔左側面〕

庄右衛門

〔正面〕

文政十一子十二月

法名釋一山

十三 世名四郎右衛門

## あ と が き

ここに五和町史資料編(その5)として『三川城跡』を発刊することになった。本書は、先の『下内野城跡』について、五和町内の中世城跡調査報告書の2冊目である。

天草はもともと中世史料の少ない所である。五和町もその例外でなく、町史編纂にあたって最大のネックはその点にあった。それを補う手段として町内各地の城跡の調査を計画したのである。

本調査の意義や成果については、すでに本文に述べられた通りであるが、この城が割に内陸部に営まれた城であるにもかかわらず下内野城跡とともに、天草の海洋指向性を色濃くもっていたことは何より大きな驚きであった。

幸い、近時、中世遺跡についても考古学的手法による研究が一般化してきている。本調査の結果は単に町史編纂にとってばかりでなく、天草の中世を考える上でも貴重な資料になり得るものと思われる。

本調査に献身的に取り組んでいただいた大田先生をはじめ、ご協力いただいた多くの方々に御礼を申し上げますとともに、町史編纂についてもさらなるご指導ご援助を御願ひ申し上げますものである。

平成8年3月30日

五和町史編纂委員長 鶴田倉造

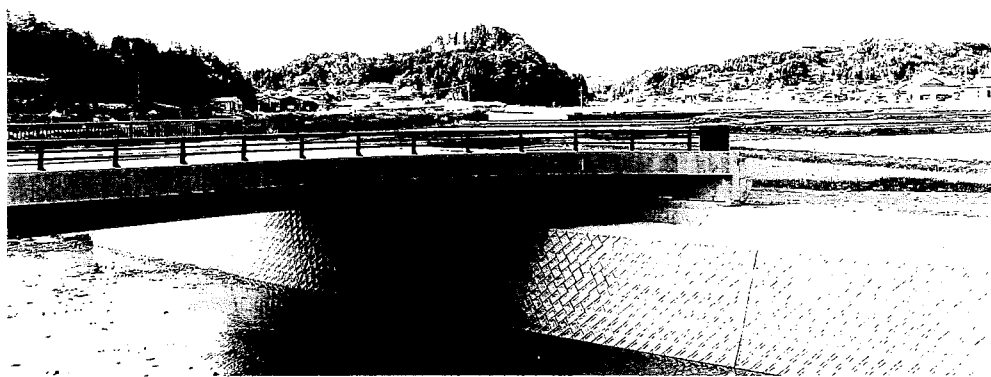
# 写 真 图 版



図版1 三川城跡遠景 南西方向より



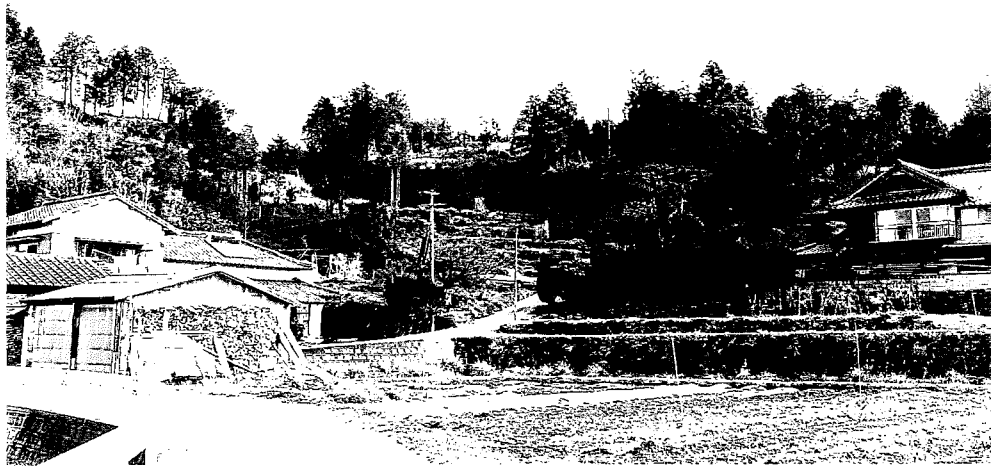
図版2 三川城跡遠景 南西方向より



図版3 三川城跡遠景 北東方向より



図版4 三川城跡Ⅰ郭近景



図版5 三川城跡Ⅱ郭近景



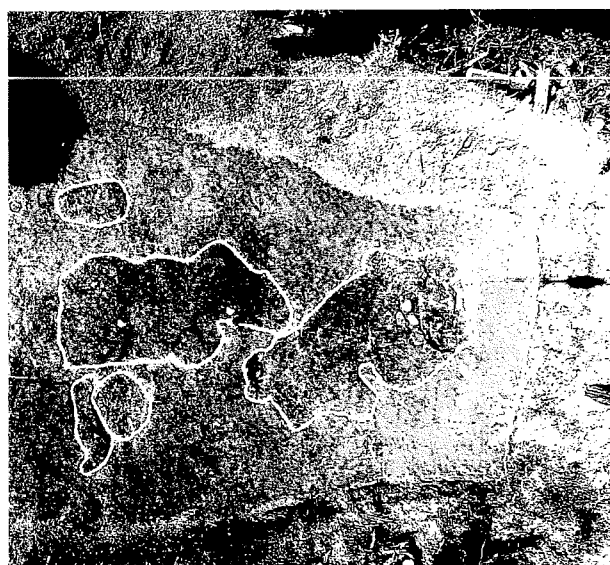
図版6 三川城跡Ⅲ郭・堀切3近景



図版7 三川城跡 I 郭検出遺構



図版8 I 郭検出遺構 建物跡



図版9 I 郭検出遺構 土壇





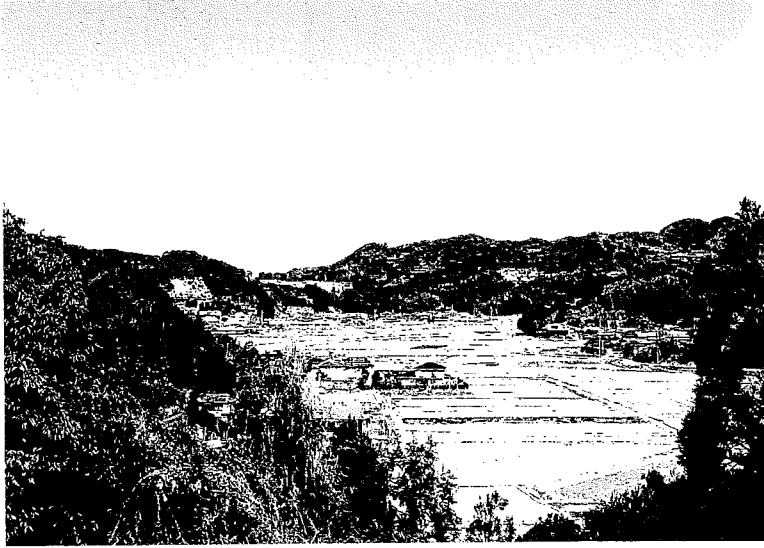
図版10 建物跡検出状況



図版11 調査風景①

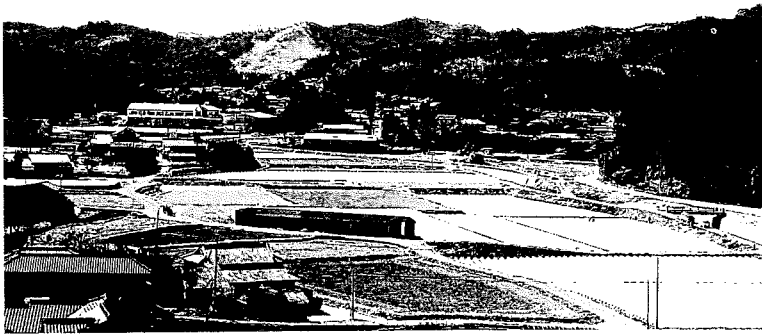


図版12 調査風景②



図版13

三川城跡から見た下内野城跡



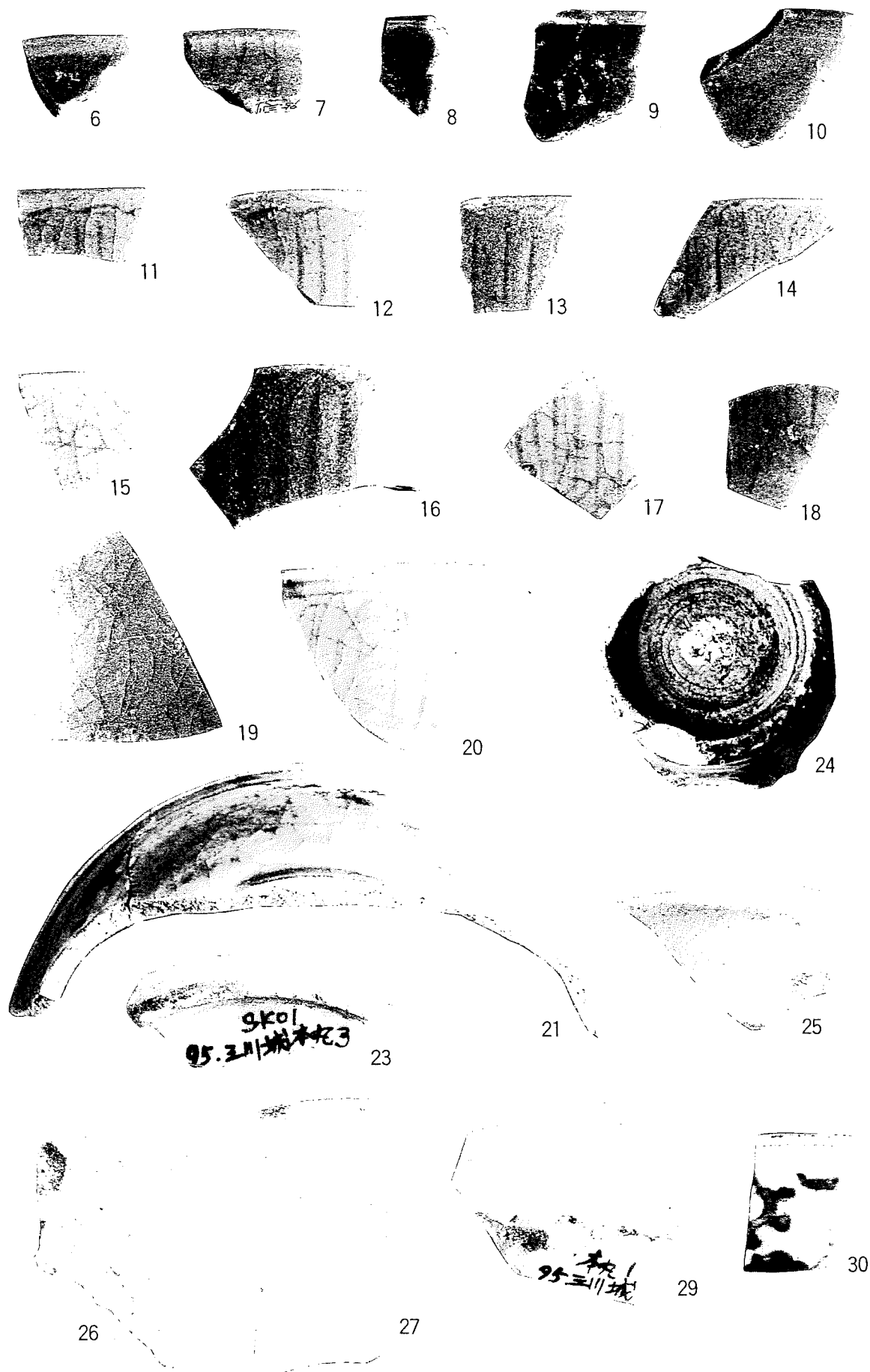
図版14

三川城跡から見た城木場城跡



図版15

対岸にある文殊庵



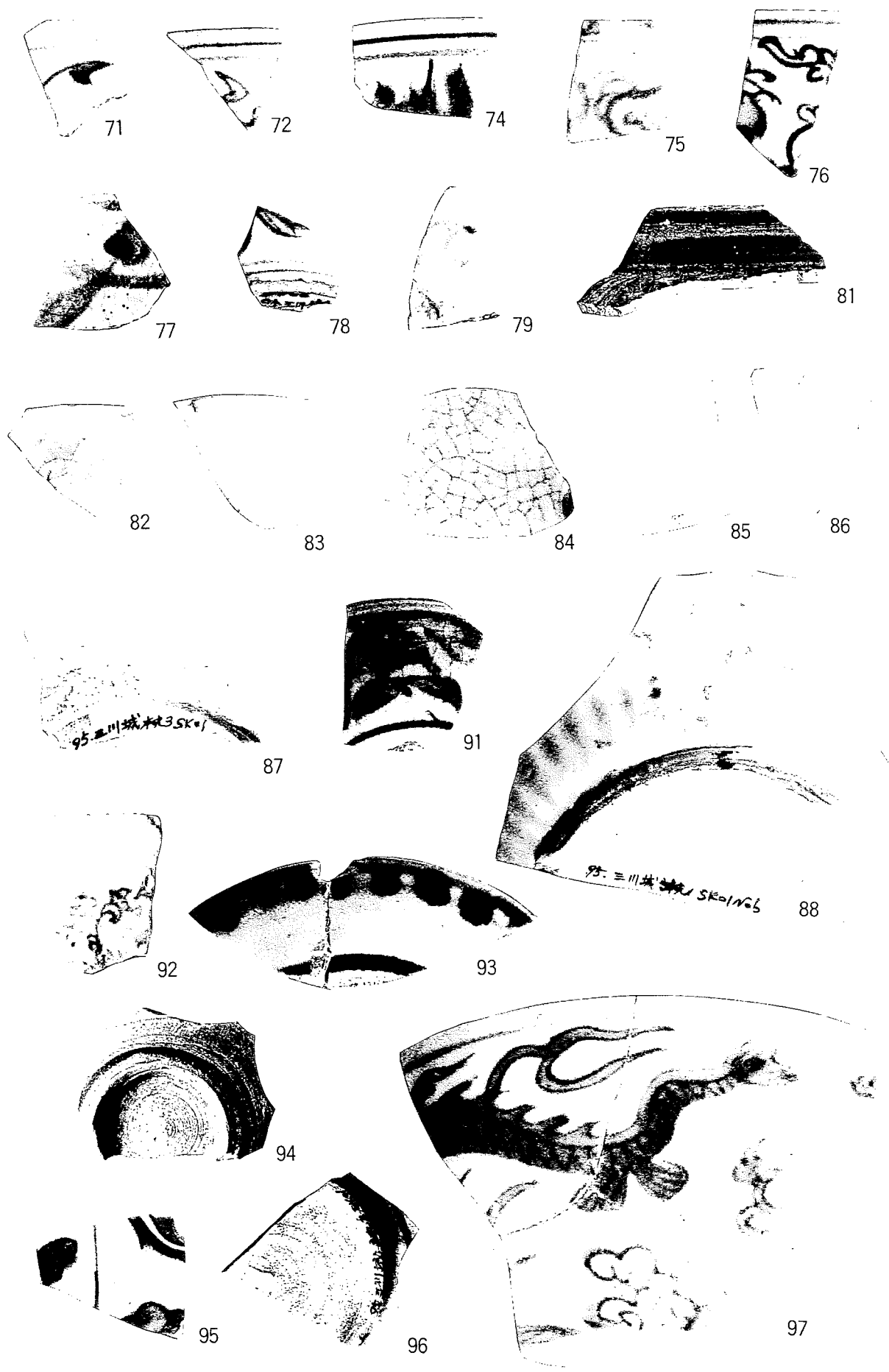
图版16 出土遺物①



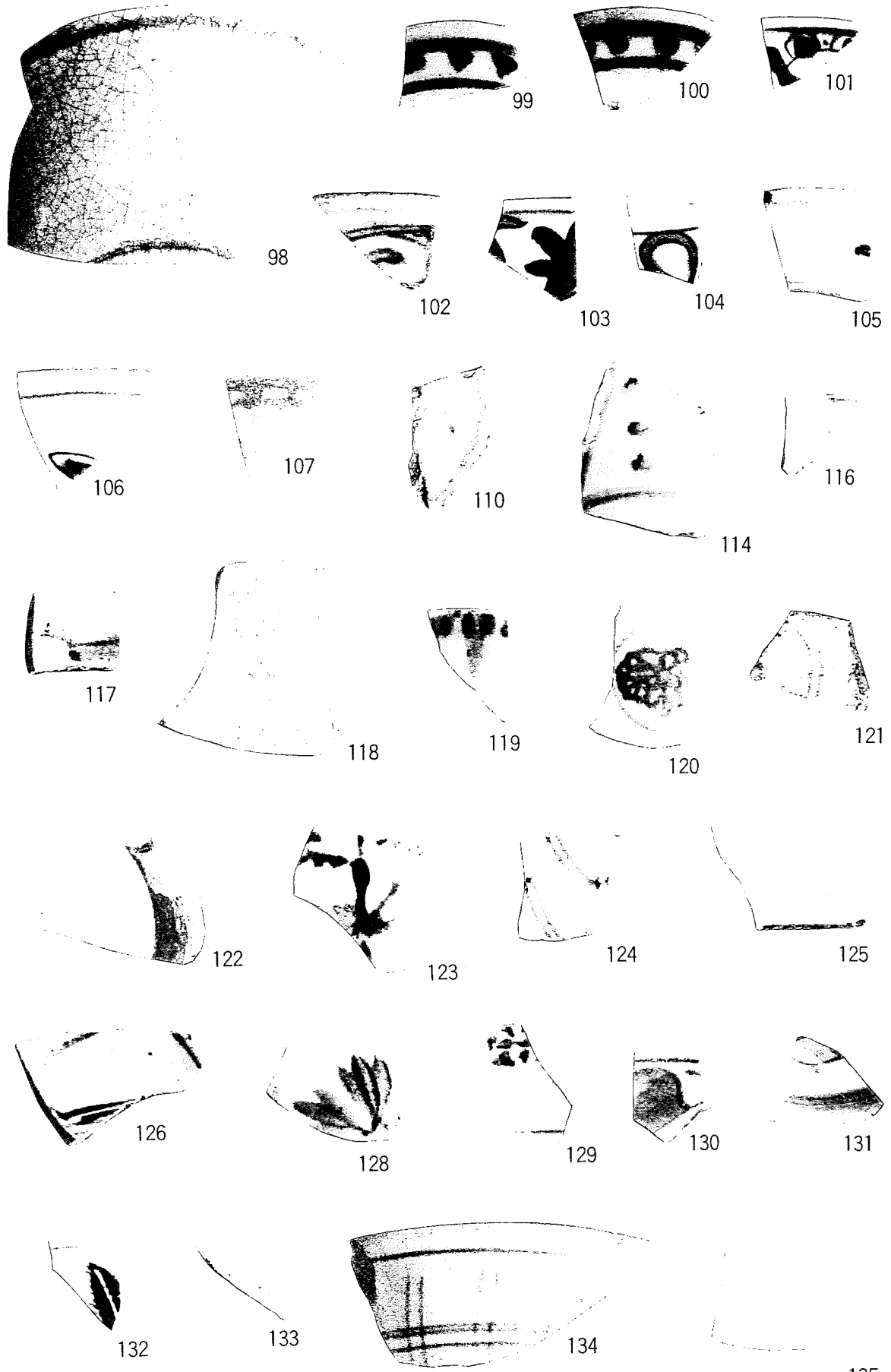
図版17 出土遺物②



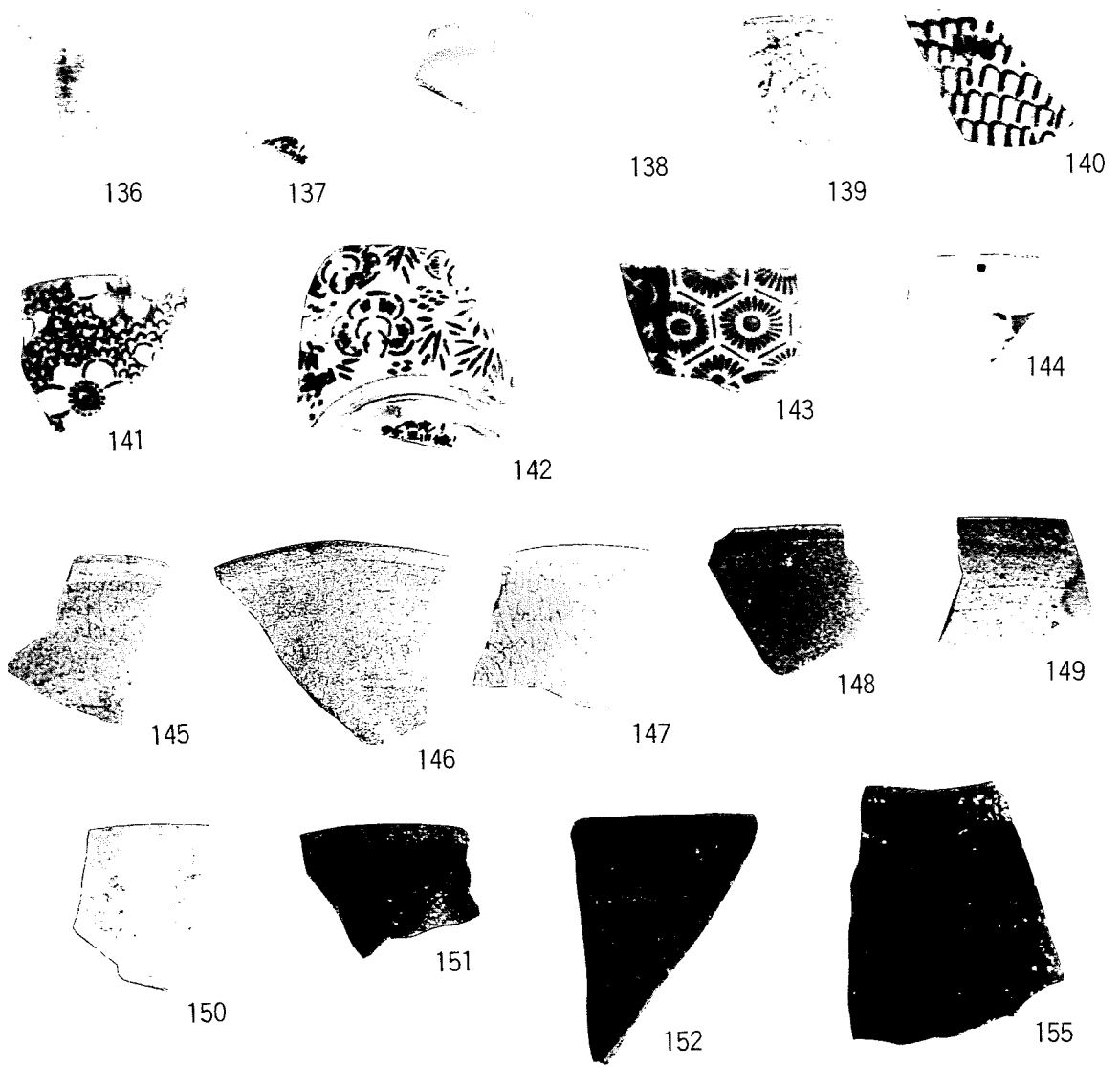
图版18 出土遺物③



图版19 出土遺物④



图版20 出土遺物⑤



图版21 出土遺物⑥





〔既刊資料〕

五和町史資料編（その1）『石本家文書録』	平成6年3月刊
五和町史資料編（その2）『下内野城跡』	平成7年3月刊
五和町史資料編（その3）『火筒の響』	平成7年8月刊
五和町史資料編（その4）『近代天草漁業史料集成』	平成8年3月刊
五和町史資料編（その5）『三川城跡』	平成8年3月刊

五和町史資料編（その5）

## 三 川 城 跡

平成8年3月30日

〔発行〕

五和町教育委員会

〒863-22 熊本県天草郡五和町大字御領2943

TEL 0969-32-1111（代表）

〔印刷〕

（株）大和印刷所

〒862 熊本県熊本市戸島町920-11

TEL 096-380-0303